

吹田市・摂津市

吹田操車場遺跡V

—吹田操車場遺跡・同C地点・明和池遺跡—

吹田（信）基盤整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

吹田操車場遺跡は、大阪層群の隆起によって形成された千里丘陵東南側の沖積平野に立地し、大正 12 年に開業し昭和 59 年まで操業した吹田操車場を中心に広がる遺跡です。

この遺跡が所在する地域は、古代からの幹線道路である西国街道が走り、また京都と大阪を結ぶ水運ルートである淀川が流れるなど、古くからの交通の要所として知られるところです。そして千里丘陵には古墳時代からの須恵器窯跡群や難波宮の官瓦窯であった七尾瓦窯跡が所在するなど、多くの遺跡に恵まれた地域でもあります。

吹田操車場遺跡は、JR 梅田貨物駅の機能を移転する計画や、まちづくり再開発、住宅建替工事に伴い、平成 10 年より本センター・吹田市教育委員会・摂津市教育委員会によって発掘調査がなされました。

本書で報告する発掘調査の内容は、吹田信号場基盤整備工事に先立ち、平成 21 年度から同 22 年度にかけて実施した調査成果です。この工事では吹田操車場遺跡だけでなく、隣接する明和池遺跡および新たに発見された吹田操車場遺跡 C 地点も整備工事の対象とする計画でしたので、これらの遺跡も含めて発掘調査を実施しました。

調査の結果、本書にあるように弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が多く検出されました。これらの成果は地域の歴史解明の貴重な資料となるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査および遺物整理事業の実施にあたり多大なご協力を頂きました独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 国鉄清算事業西日本支社、日本貨物鉄道株式会社、大阪府教育委員会、吹田市教育委員会、摂津市教育委員会はじめ、関係各位に深く感謝の意を表しますとともに、今後とも本センターの文化財事業にご理解とご協力をお願いする次第です。

平成 23 年 3 月

財団法人 大阪府文化財センター

理事長 水野 正好

例　　言

1. 本書は、大阪府吹田市芝田町他に所在する吹田操車場遺跡、同市岸部南一丁目に所在する吹田操車場遺跡C地点、摂津市千里丘七丁目に所在する明和池遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、吹田（信）基盤整備工事に伴う吹田操車場遺跡遺物整理9・11として、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 国鉄清算事業西日本支社の委託を受け、大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪府文化財センターが実施した。調査番号は吹田操車場遺跡9-2・10-1である。
3. 調査は、現地での発掘調査を平成19年5月1日から実施してきたが、このうち平成21年7月14日までの分については、すでに整理作業が終了し、平成22年3月に『吹田操車場遺跡IV』として報告書を刊行した。今回報告する調査は、これに続く平成21年7月15日～平成22年8月31日に発掘調査を実施した分であり、これに伴う遺物整理作業を平成22年12月31日までに行ない、翌23年3月15日本書の刊行をもって終了した。
4. 本書で報告する調査および整理作業は以下の体制で実施した。

[平成21年度]

調査部長兼調査課長 福田英人、調査課調整グループ長 金光正裕、調査課調査グループ長 寺川史郎、中部総括主査 秋山浩三、副主査 岡本圭司（平成21年10月31日まで）、主査 辻本武（平成21年11月1日から）

[平成22年度]

調査部長兼調査課長 福田英人、調査課調整グループ長 江浦洋、同主幹 岡本茂史、調査課調査グループ長 岡戸哲紀、中部総括主査 秋山浩三、主査 辻本武

5. 遺物の撮影は、調査グループ主査 片山彰一が行なった。
6. 発掘調査および整理作業の際には、大阪府教育委員会、吹田市教育委員会、摂津市教育委員会の諸氏よりご指導・ご教示を賜った。記して感謝する次第である。
7. 本書の執筆編集は辻本が担当した。
8. 本調査に関わる出土遺物および写真・実測図などの記録類は当センターにおいて保管しており、広く活用されることを希望する。

凡　　例

1. 遺構実測図の標高値はすべて東京湾平均海水面（T.P.）+値を使用する。
2. 遺構実測図の座標値は世界測地系（測地成果 2000）第VI座標系に基づくもので、単位はmである。
3. 本書に掲載した遺構図に付した方位はすべて国土座標に基づく座標北を示す。
4. 発掘調査および遺物整理作業は当センター『遺跡調査基本マニュアル』に準拠して行なった。
5. 土層断面図の土層は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2008年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所監修）を用いた。
6. 遺構番号は、各調査区ごとに遺構の種類とは関係なく通し番号で表示し、その後に遺構種類を付している。なお掘立柱建物などの遺構集合体の場合は、遺構種類を先に表示している。
7. 遺構種類は溝・土坑などのように漢字で表すもの以外に、小ピットは「P」の略称で表した。
8. 掲載遺物番号は全体を掲載順に通し番号で表示しており、本文・挿図・写真ともに遺物番号は一致する。遺物実測図は4分の1縮尺である。

目 次

序 文
例 言
目 次

第1章 調査に至る経過と方法.....	1
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査の方法.....	3
第2章 遺跡の位置と環境.....	5
第1節 地理的・歴史的環境.....	5
第2節 吹田操車場遺跡・明和池遺跡における既往の調査.....	10
第3章 調査の成果.....	11
第1節 4-1区.....	11
第2節 4-2区.....	12
第3節 4-3区.....	15
第4節 4-4区.....	19
第5節 4-5区.....	22
第6節 4-6区.....	27
第7節 5区.....	31
第8節 6区.....	32
第9節 7区.....	33
第10節 8区.....	42
第11節 9区.....	43
第12節 10区.....	43
第13節 11-1~5区.....	45
第14節 11-6区.....	48
第15節 12区.....	48
第16節 13・9区.....	51
第4章 まとめ.....	62

挿 図 目 次

第1図 調査対象地の位置図.....	1
第2図 調査区割と各調査区の位置.....	2
第3図 調査区と既往の調査区の位置.....	4
第4図 周辺の遺跡分布図.....	6
第5図 吹田信号場構内発見資料（実測図）.....	8

第6図	吹田信号場構内発見資料（写真）	9
第7図	4-1区 断面模式図	11
第8図	4-1区 各遺構面 平面図	11
第9図	4-1区 出土遺物	12
第10図	4-2区 断面模式図	13
第11図	4-2区 200土坑 平面・断面図	13
第12図	4-2区 各遺構面 平面図	14
第13図	4-2区 出土遺物	15
第14図	4-3区 断面模式図	15
第15図	4-3区 平面図	16
第16図	4-3区 挖立柱建物 平面・断面図	17
第17図	4-3区 各遺構 断面図	17
第18図	4-3区 出土遺物	18
第19図	4-4区 断面模式図	19
第20図	4-4区 各遺構面 平面図	20
第21図	4-4区 1土坑 断面図	21
第22図	4-4区 各遺構 平面・断面図	21
第23図	4-4区 出土遺物	22
第24図	4-5区 断面模式図	22
第25図	4-5区 平面・断面図	23
第26図	4-5区 土坑群 断面図	24
第27図	4-5区 出土遺物	26
第28図	4-6区 断面模式図	27
第29図	4-6区 各遺構面 平面図	28
第30図	4-6区 断面図	28
第31図	4-6区 各遺構 断面図	29
第32図	4-6区 出土遺物	31
第33図	5区 断面模式図	31
第34図	5区 平面図	32
第35図	5区 断面図	32
第36図	6区 断面模式図	32
第37図	6区 平面図	33
第38図	7区 断面模式図	34
第39図	7区 第1面・第2-1面 平面図	35
第40図	7区 第2-2面・第3面 平面図	36
第41図	7区 断面図	38
第42図	7区 各遺構 断面・平面図	40
第43図	7区 出土遺物	41

第44図	8区 断面模式図	42
第45図	8区 各遺構面 平面図	42
第46図	8区 出土遺物	43
第47図	10区 平面・断面図	44
第48図	11-1~5区 調査区位置図	45
第49図	11-1~5区 断面模式図	46
第50図	11区 出土遺物	47
第51図	11-6区 断面模式図	48
第52図	11-6区 平面図	48
第53図	12区 断面模式図	49
第54図	12区 各遺構 断面図	49
第55図	12区 各遺構面 平面図	50
第56図	13区 断面図	52
第57図	13区 第1面 平面図	53
第58図	13区 第1-2面 平面図	54
第59図	13区 各遺構 平面・断面図	55
第60図	13区 15溝・小ピット群 実測図	56
第61図	13区 出土遺物(1)	58
第62図	13区 出土遺物(2)	59
第63図	13区 各時期別 平面図	61

表 目 次

表1 吹田操車場遺跡・同C地点・明和池遺跡 発掘調査 一覧表(本書報告分) 4

写 真 図 版 目 次

図版1	4-1区	1. 4-1-1区 第1面(北東から) 2. 4-1-2区 第3面(南東から)
図版2	4-2区(1)	1. 第1面全景(南西から) 2. 第2面全景(北東から)
図版3	4-2区(2)	1. 第3面全景(北東から) 2. 北西側セクション(南東から) 3. 第3面(南西から) 4. 200土坑(北西から) 5. 200土坑(北から)

- 図版 4 4-3 区 (1) 1. 地山面全景 (南西から)
2. 掘立柱建物 (西から) 檢出時
3. 掘立柱建物 (西から) 完掘
4. 2 井戸 (南東から) 断面
5. 2 井戸 (南東から) 遺物出土状況
- 図版 5 4-3 区 (2) 1. 9 P (南東から)
2. 11 P (南西から)
3. 12 P (南西から) 断面
4. 12 P (南西から) 完掘
5. 14 P (北から)
6. 15 P (北から)
7. 16 P (北から)
8. 18 P (東から)
- 図版 6 4-4 区 (1) 1. 第1面全景 (北東から)
2. 1 P (北東から)
- 図版 7 4-4 区 (2) 1. 第2面全景 (北東から)
2. 7 P の断面 (南東から)
3. 7 P の遺物出土状況 (南東から)
4. 8 P (東から)
5. 9 P (東から)
- 図版 8 4-5 区 1. 全景 (北東から)
2. 1・9 土坑の断面 (南西から)
3. 11・13 土坑の断面 (南西から)
4. 20 土坑の断面 (南から)
5. 21 土坑の断面 (南東から)
- 図版 9 4-6 区 (1) 1. 第1面全景 (南西から)
2. 第2面拡張部 土坑群 (北東から)
- 図版 10 4-6 区 (2) 1. 土坑群精査状況 (南東から)
2. 19 土坑 (南西から)
3. 20 土坑 (南西から)
4. 21 土坑 (南から)
5. 25 土坑 (南西から)
6. 26 土坑 (南から)
7. 27 土坑 (南東から)
8. 20・21 土坑 (東から)
- 図版 11 5区 1. 全景 (南西から)
2. 断面 (南西から) 最下層が汽車土瓶堆積層
- 図版 12 6区 1. 第1面 全景 (北東から)

2. 第2面（東から）中央トレンチ
- 図版 13 7区（1） 1. 方形周溝1・2（北から）
2. 方形周溝2と土坑（東から）
- 図版 14 7区（2） 1. 方形周溝1（南から）
2. 方形周溝1と断面（北東から）
- 図版 15 7区（3） 1. 方形周溝1・2（北から）検出当初
2. 方形周溝2（東から）検出当初
3. 11・12P（北東から）
- 図版 16 7区（4） 1. 1・8・3溝の断面（東から）
2. 1溝の断面（南から）
3. 3溝の断面（東から）
4. 2・5溝の断面（北西から）
5. 8溝の断面（北東から）大阪側
6. 8溝の断面（南西から）京都側
7. 6P（南西から）
8. 南東側セクション（北から）
- 図版 17 8区 1. 第4面セクション（北西から）
2. 第5面（西から）
- 図版 18 10区（1） 1. 10-1区（北東から）
2. 10-2区（南西から）
3. 10-3区（北東から）
- 図版 19 10区（2） 1. 10-4区（南西から）
2. 10-2区 旧正雀川 堤防断面（北西から）
3. 10-2区 土坑（南東から）
- 図版 20 11区 1. 11-2区 第7面（北東から）
2. 11-2区 最下の断面（北東から）
3. 11-3区 第5面 足跡（北東から）
4. 11-3区 最下の断面（北東から）
5. 11-4区 第4面（北東から）
6. 11-4区 最下の断面（南東から）
7. 11-6区 全景（南西から）
8. 11-6区 セクション（西から）
- 図版 21 12区 1. 第1面 全景（南西から）
2. 第2面 自然河川（南から）
- 図版 22 13・9区（1） 1. 9区 第1面 全景（南西から）
2. 9区 第1-2面 全景（北東から）
- 図版 23 13・9区（2） 1. 13区 第1面 全景（南西から）
2. 13区 第1-2面 全景（南西から）

- 図版 24 13・9区(3) 1. 13区 第1面 南東隅(南西から)
2. 13区 第1面 南西隅(北から)
3. 13区 第1面 北西隅(南から)
- 図版 25 13・9区(4) 1. 13区 1土壤墓(北西から)
2. 13区 1土壤墓の断面(北西から)
3. 9区 1土壤墓の断面(北西から)
- 図版 26 13・9区(5) 1. 13区 2落込(北から)
2. 13区 2落込の断面(北から)
3. 9区 2落込断面(北西から)
- 図版 27 13・9区(6) 1. 18P(西から)
2. 18Pの断面(南西から)
3. 3P(南西から)
4. 16P(北東から)
5. 17溝の断面(北西から)
6. 26溝の断面(北西から)
7. 13区 25自然河川(西から)
8. 9区 25自然河川の断面(北西から)
- 図版 28 4-1・2・3区 出土遺物
- 図版 29 4-3区 出土遺物
- 図版 30 4-4・5区 出土遺物
- 図版 31 4-5・6区 出土遺物
- 図版 32 7区 出土遺物
- 図版 33 8・11・13区 出土遺物
- 図版 34 13・9区 出土遺物(1)
- 図版 35 13・9区 出土遺物(2)

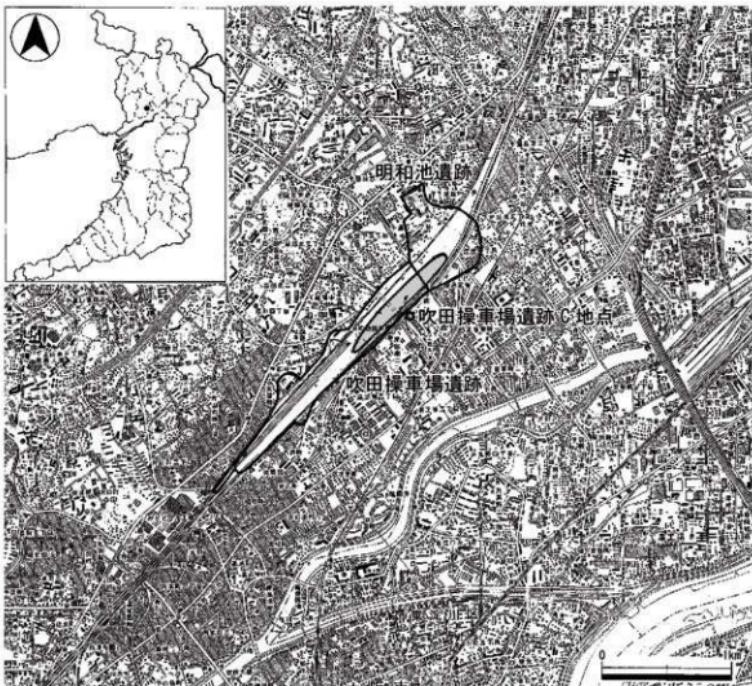
第1章 調査に至る経過と方法

第1節 調査に至る経過

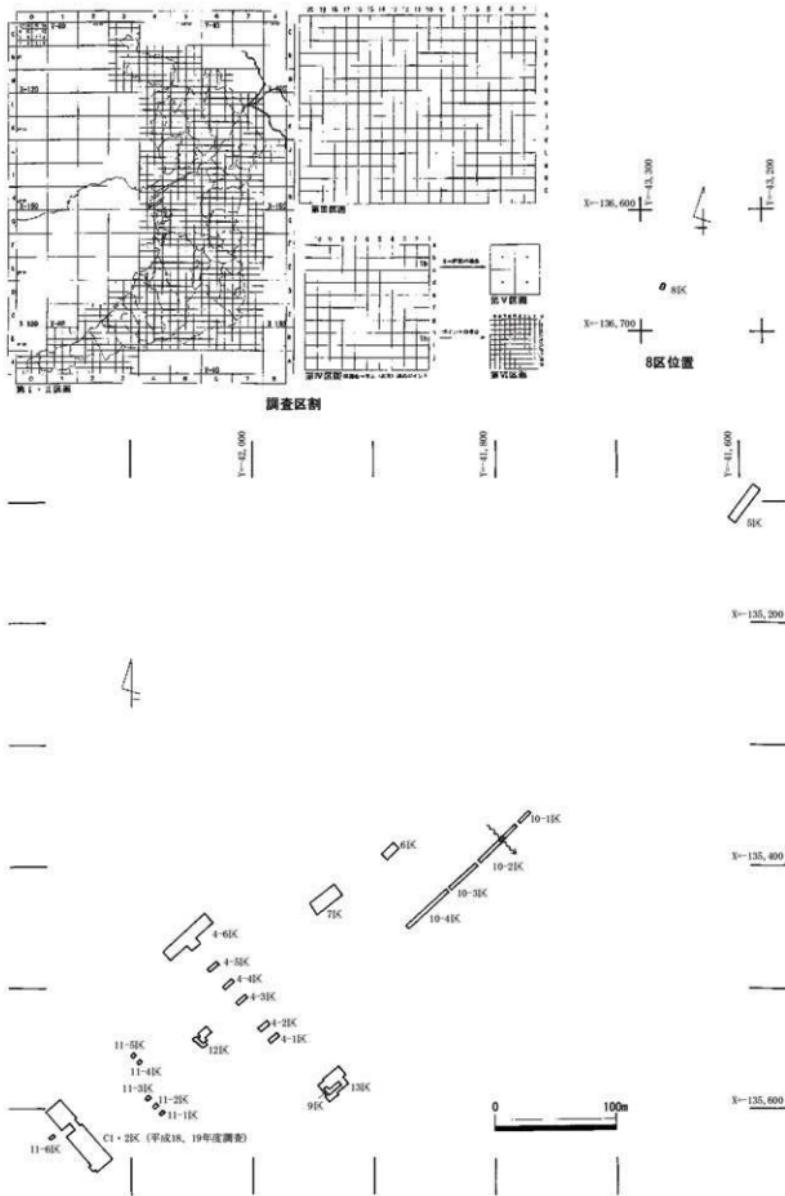
吹田操車場遺跡は、昭和42年に操車場内の水路等整備工事に伴い、吹田市教育委員会によって確認された遺跡である。また明和池遺跡は、昭和8年に明和池の底土から弥生～古墳時代の土器が発見されることによって知られるようになった遺跡である。両遺跡は吹田市から摂津市にかけて所在するJR吹田西日本信号場（旧吹田操車場）を中心に広がるもので、本来は一連のものと思われるが、吹田市部分が吹田操車場遺跡、摂津市部分が明和池遺跡と呼称される。

平成10年に日本国有鉄道清算事業団近畿支社がJR梅田貨物駅の機能の一部を吹田操車場跡地に移転する計画に伴い、大阪府教育委員会と協議の上、移転予定地内の遺跡確認調査を行なうこととなった。調査は（財）大阪府文化財調査研究センターが、予定地内に61箇所のトレンチを設定して調査した。このうち59箇所は吹田操車場遺跡、2箇所は明和池遺跡である。この結果、予定地内のほぼ全域で旧石器から中世に至るまでの遺物が出土し、また遺構が良好に残存していることを確認した。

平成12年には日本鉄建公団国鉄清算事業本部西日本支社が、吹田信号場基盤整備工事による貨物駅



第1図 調査対象地の位置図



第2図 調査区割と各調査区の位置

倉庫や駅舎建設を計画したこと併い、上記の調査成果を踏まえて大阪府教育委員会と協議し、この計画予定地の発掘調査を同センターが実施することとなった。そして並行して、当時は遺跡の範囲外にあった旧貨車庫の建替えに併い試掘調査を実施したところ、遺構・遺物が発見されたため、新規発見の遺跡として吹田操車場遺跡B地点と名付けて発掘調査を実施した。

平成18年からは、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 国鉄清算事業西日本支社が吹田信号場基盤整備工事による調整池や導水路、職員通路、貨物専用道路等々の建設を計画したこと併い、大阪府教育委員会と協議の上、(財)大阪府文化財センターが発掘調査を実施している。なお本書はこのうちの平成21・22年度に実施した、南北自由通路等の建設に伴う発掘調査の成果を報告するものである。

第2節 調査の方法

調査区割

今回の調査は、原因となる基盤整備工事の具体的計画に沿って、21箇所の調査区を設定し、調査区名の数字を付した。調査区は、600m²を越える比較的まとまった面積のものもあれば、わずか3mほどの小規模なものもある。当センターのマニュアルでは、国土座標（第VI座標系）に基づく区画割をせねばならないところであるが小規模な調査区が大部分であるので、写真撮影や遺物取上げの際にはこの調査区名をそのまま利用することとした。国土座標に基づく区画割は、発掘調査終了後の整理段階で書き加えることとした。

調査区名

調査区名は調査実施の順番の数字を付することを原則としたが、実際には前後したものも少なくない。また原因となる工事が一つでも実際の調査区が複数となる場合は、枝番を付することとした。（例えば4-1区、4-2区など）

なお発掘調査時には事業者との協議を円滑に行なうため、事業者側が呼びならわす計画工事名を別称として並行して使用した。調査区名と別称の対応関係については、表1を参考されたい。

遺構名

各調査区で検出した遺構名は、各調査区ごとに通し番号を付し、遺構種類の前にこの番号を表した。

遺構図

発掘調査で検出した遺構は、全体図を平板測量により50分の1もしくは100分の1で実測し、各遺構は20分の1もしくは10分の1、断面図は20分の1で実測した。すべて手作業による測量である。本書に掲載する遺構図は、これをもとに編集して作成したものである。

写真撮影

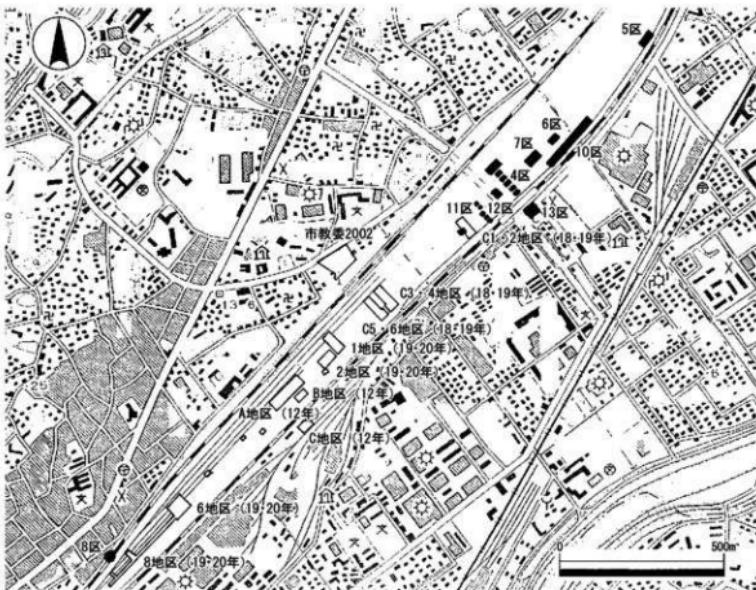
各調査区の全景写真および各遺構写真は、35mmモノクロおよびリバーサルフィルムとともに6×7フィルムを使用した。本書に掲載する遺構写真は6×7フィルムを主に用いた。

整理作業

遺構図は、各調査区ごとに実測図を編集してトレースした。遺物は洗浄・注記の後、図化が可能な遺物を選別して実測し、必要に応じて拓本を探査し、各調査区ごとにまとめてトレースした。以上のトレース作業はすべて手作業で行なった。

表1 吹田操車場遺跡・同C地点・明和池遺跡 発掘調査一覧表（本書報告分）

調査区	面積 (m ²)	調査期間		別称	遺跡名
		発掘調査開始日	発掘調査終了日		
4-1区	30	平成21年11月19日	平成21年12月18日	南北自由通路P-1	吹田操車場遺跡
4-2区	50	平成21年10月1日	平成21年10月28日	南北自由通路P-2	同上
4-3区	70	平成21年9月1日	平成21年9月25日	南北自由通路P-3	同上
4-4区	75	平成21年9月28日	平成21年10月28日	南北自由通路P-4	同上
4-5区	45	平成21年7月15日	平成21年8月21日	南北自由通路P-5	同上
4-6区	620	平成21年8月20日	平成21年9月24日	南北自由通路P-6	同上
5区	120	平成21年11月4日	平成21年11月11日	マルタイ検修庫	明和池遺跡
6区	70	平成21年11月10日	平成21年11月20日	モーターカー検修庫	吹田操車場遺跡
7区	280	平成21年12月4日	平成22年2月2日	連絡地下通路	同上
8区	6	平成21年12月16日	平成22年1月8日	西部調整池接続管	同上
9区	40	平成22年1月12日	平成22年1月21日	岸辺駅駐車場（確認）	吹田操車場遺跡C地点
10区	280	平成22年2月2日	平成22年2月26日	プレキャストL型擁壁	吹田操車場遺跡・明和池遺跡
11-1~5区	15	平成22年2月23日	平成22年3月26日	特殊電柱1~5	吹田操車場遺跡
11-6区	8	平成22年4月14日	平成22年4月22日	特殊電柱6	同上
12-1区	16	平成22年4月5日	平成22年4月12日	職員通路（試験掘り）	同上
12-2区	90	平成22年7月21日	平成22年8月12日	職員通路（本調査）	同上
13区	360	平成22年6月4日	平成22年7月22日	岸辺駅駐車場（本調査）	吹田操車場遺跡C地点
計	2,175				



第3図 調査区と既往の調査区の位置

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的・歴史的環境

吹田信号場構内は、吹田操車場遺跡および明和池遺跡の二つの遺跡の存在が周知されている。吹田操車場遺跡は吹田市芝田町他、明和池遺跡は摂津市千里丘七丁目他に所在する遺跡であるが、両遺跡は隣接しており、本来は一連の遺跡と考えられる。本書では両遺跡をまとめて言う場合には「吹田操車場遺跡等」と呼称することにした。

吹田操車場遺跡等は大阪層群の隆起によって形成された千里丘陵の南側に広がる三島平野にあり、安威川の右岸に所在する遺跡である。周辺には千里丘陵から山田川や正雀川などの小河川が走るので、当遺跡はこれらの河川に伴う冲積平野に位置すると見える。

吹田操車場遺跡等周辺には、旧石器時代以降の各時代の遺跡の存在が知られている。旧石器時代としては、吉志部遺跡でナイフ形石器や削器、錐状石器が、また高城遺跡等々でナイフ形石器が出土している。吹田操車場遺跡でも、平成10・19年度の確認調査で旧石器の出土が報告されている。

縄文時代では、中ノ坪遺跡でチャート製有舌尖頭器、高浜遺跡で船元式土器、七尾瓦窯跡下層遺構で船橋式土器、目依遺跡で長原式土器が出土している。

弥生時代になると、垂水遺跡では前期～後期の遺物が出土している。特に後期では竪穴建物や高床式建物が見つかり、遺物も壺・高杯・手焙り・蜻蛉などの多彩な土器だけでなく、近江・東海・四国・山陰などから搬入された土器も確認されている。また七尾東遺跡では竪穴建物とともに土器や石包丁などが出土した。他に垂水南遺跡・櫻坂遺跡・目依遺跡・明和池遺跡でも後期の遺物が出土している。吹田操車場遺跡等では、平成21・22年度調査で竪穴建物や方形周溝墓かと思われる遺構が発見された。

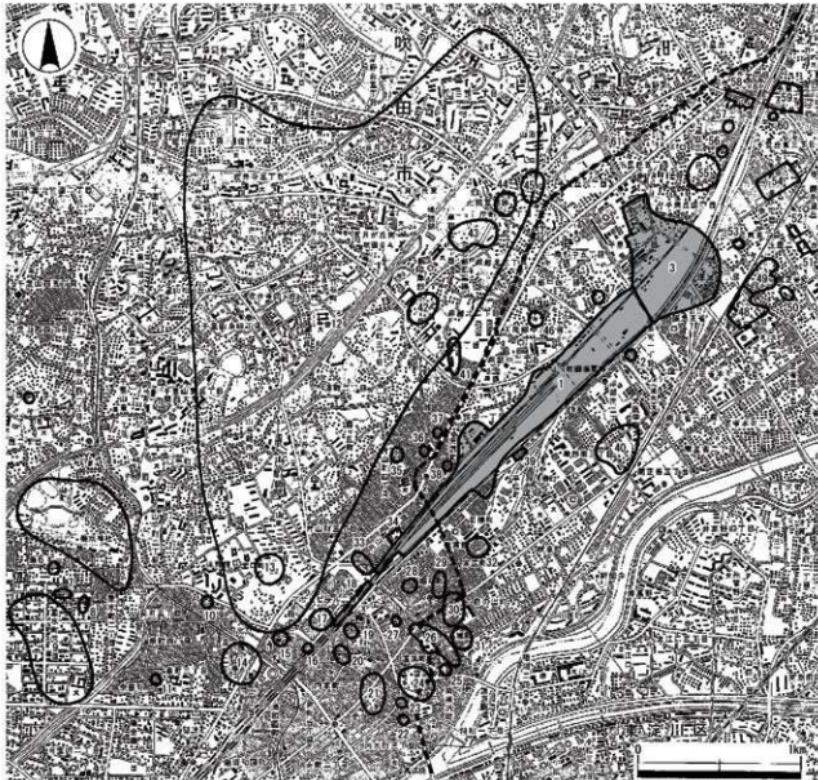
古墳時代になると、垂水南遺跡では前期の竪穴建物・掘立柱建物・水田、櫻坂遺跡では竪穴建物等々の遺構が見つかっており、また垂水遺跡では彷彿鏡・韓式系土器・初期須恵器、五反島遺跡では小型丸底壺や甕などの土師器・初期須恵器・鉄劍が出土した。そして千里丘陵では須恵器窯が操業され、6世紀に最盛期となり、8世紀前半まで続く。古墳としては、横穴式石室を持つ吉志部古墳、木芯粘土室に組合式石棺を納めるという珍しい形態の新芦屋古墳がある。吹田操車場遺跡では古墳時代後期から平安時代にかけての群集土坑、明和池遺跡では布留期の井戸など、この時期の遺構が検出されている。

8世紀になると瓦窯の操業が始まると、七尾瓦窯跡は難波宮の瓦と同范のものが出土したことから当時の官瓦窯と判明し、8世紀末には吉志部瓦窯が始まり平安京に供給された。

古代では垂水南遺跡で「垂庄」「中庄」といった莊園関係を示す墨書き土器が出土し、藏人遺跡では掘立柱建物や鍛冶遺構等が検出された。吹田操車場遺跡では、飛鳥・奈良・平安時代の掘立柱建物などの遺構が検出されており、また墨書き土器・緑釉陶器・円面鏡等の出土が報告されている。また明和池遺跡では飛鳥時代の土馬と平安時代の丸鞘が出土している。

中世になると、前期において吹田操車場遺跡等では掘立柱建物や土塙墓、井戸などが検出されて、生活拠点であった様相を呈するが、後期には田畠がほとんどを占めるようになる。従ってこの一帯は耕作地であり、ここから少し離れた場所に吉志部、南垣内などの集落が形成された。この田園景観は近世を経て、近代の初めになんともほとんどが変わることがなかった。

しかし明治時代になってこの地に東海道線が走り、さらに大正時代に吹田操車場が建設されることに



- | | | | | |
|---------------|--------------|----------------|---------------|---------------|
| 1. 吹田操車場遺跡 | 14. 豊島郡条里遺跡 | 27. 朝日町遺跡 | 40. 中ノ坪遺跡 | 53. 庄屋1丁目所在遺跡 |
| 2. 吹田操車場遺跡C地点 | 15. 西の庄遺跡 | 28. 昭和町遺跡B地点 | 41. 原東遺跡 | 54. 千里丘東4丁目遺跡 |
| 3. 明和池遺跡 | 16. 西の庄遺跡B地点 | 29. 高堀遺跡 | 42. 吉志部遺跡 | 55. 瞬前寺跡 |
| 4. 重水西原遺跡 | 17. 吹田城跡 | 30. 高城遺跡 | 43. 吉志部瓦窯跡 | 56. 千里丘3丁目遺跡 |
| 5. 重水遺跡 | 18. 西の庄東遺跡 | 31. 吹田城跡推定地 | 44. 七尾瓦窯跡 | 57. 千里丘2丁目遺跡 |
| 6. 重水中遺跡B地点 | 19. 本町遺跡 | 32. 日俵遺跡 | 45. 七尾東遺跡 | 58. 千里丘遺跡 |
| 7. 重水中遺跡 | 20. 夙の庄遺跡 | 33. 片山遺跡 | 46. 岸部中遺跡 | 59. 千里丘東2丁目遺跡 |
| 8. 重水中遺跡C地点 | 21. 都邑遺跡 | 34. 片山泡池遺跡 | 47. 岸部東遺跡 | 60. 千里丘東3丁目遺跡 |
| 9. 重水南遺跡 | 22. 宮の前遺跡B地点 | 35. 円塚古墳 | 48. 正雀1丁目遺跡 | 61. 西国街道 |
| 10. 北泉遺跡 | 23. 宮の前遺跡 | 36. 片山芝田遺跡 | 49. 東正雀遺跡 | |
| 11. 金田遺跡 | 24. 高浜遺跡 | 37. 片山芝田遺跡B地点 | 50. 東正雀第2地点 | |
| 12. 吹田須恵器窯遺跡 | 25. 神鏡遺跡 | 38. 天道遺跡 | 51. 東正雀所在遺跡 | |
| 13. 片山公園遺跡 | 26. 高城B遺跡 | 39. 吹田操車場遺跡B地点 | 52. 庄屋2丁目所在遺跡 | |

第4図 周辺の遺跡分布図

よって、この地域の景観が大きく変貌した。

吹田操車場は当時の鉄道貨物輸送が急増する状況のもとで、貨物列車の操車能力の大幅な増強と効率化を目的に大正12年（1923）にこの地で開業した。昭和の初めのごく短い期間に客車を扱うことはあったが、それ以外は一貫して貨物専用の操車場として機能した。そして構内線路総延長150km、一日最大貨物取扱可能量6000両という東洋でも最大級の操車場となり、日本の経済発展に大いに貢献したのである。しかし1970年代に入りて高度経済成長の終息とともに鉄道貨物輸送の減少と合理化のなかで、吹田操車場は昭和59年（1984）に至り幕を閉じ、「吹田信号場」となって現在に至っている。

吹田操車場の歴史資料

吹田操車場は1923年から1984年までの60年の歴史を有している。遺跡発掘調査においてはこの歴史的環境をも考慮する必要があるので、操車場の歴史を示す資料について簡単に触れておきたい。

第5・6図は、今回調査の5区で一括して発見された汽車土瓶とこれに伴う湯呑み、そして丼類である。汽車土瓶には形態的に泥漿詰込みで製作された角型の吊り下げ土瓶と、轆轤成形による丸型の茶瓶との二種類がある。前者の製造窯は愛知県の瀬戸焼・福島県の会津本郷焼・福岡県の篠栗焼であり、後者の製造窯は滋賀県の信楽焼である。

角型の吊り下げ土瓶の側面には「お茶」「鉄道局指定」とともに、駅名や製造元、販売業者名、値段、注意書き等々の文字が陰刻あるいは浮彫、印字される。

駅名では「浜松駅」「鶴岡駅」、

製造元では「尾張瀬戸古藤」「伊村製陶所」「筑前篠栗陶器」「あいづ耕山」「会津本郷②工場」「会津本郷②工場」「会津製陶所」、

販売業者では「自笑亭」「松浦」「伊勢屋」「桃中軒」、

値段では「金七錢」「金五錢」、

注意書きは「空壇空折箱などを窓の外へ投げては危険ですからこしかけの下にお置き下さるか又はお持ちかえり下さい」「あきびんはこしかけの下へ」「空壇はこしかけの下にお置を願ます」、

その他に「意匠登録済」がある。

丸型の土瓶の側面には「山は富士 お茶は静岡」という標語が手描きされる。

汽車土瓶に被せる蓋や湯呑みには各種あるが、注目すべきものはガラス製の湯呑みである。大正11年頃から昭和4年にかけて販売されたガラス製汽車土瓶に伴うものと思われる。

井にもいくらかの種類があるが、そのうちの一つの井鉢蓋には「米原駅 井筒屋 うなぎ井 金五十銭」が浮彫されている。

これらの資料の時期については、①汽車土瓶販売価格が「七錢」と「五錢」の二種類があり、七錢は大正13年～昭和5年、五錢は昭和5年～18年の価格であること、②昭和5年には七錢と五錢の両方が販売された記録があること、③大正11年～昭和4年に販売されたガラス製汽車土瓶の湯呑みがあること、④昭和初めより汽車土瓶生産が始まったとされる会津本郷焼および筑前篠栗の製品があることから、昭和初期とすることができる。

ところでこれらは鉄道乗客が購入し消費した商品であるので、貨車ではなく客車に関係する資料である。吹田操車場の沿革によれば、昭和3年（1928）10月25日に「客車操車場」が併設されて、貨物だけでなく客車の操車作業も行われたのであるが、昭和8年（1933）9月1日に廃止されて再び貨物専用となったと記録されている。



第5図 吹田信号場構内発見資料（実測図）



第6図 吹田信号場構内発見資料（写真）

以上から当該の一括資料は、吹田操車場において昭和3年（1928年）から同8年（1933年）までの5年間に客車を取り扱っていた時期に限定することができるものと考える。

第2節 吹田操車場遺跡・明和池遺跡における既往の調査

吹田操車場遺跡は、昭和42年の操車場改良工事の際に瓦器椀等の中世遺物が出土したことによって存在が確認された遺跡である。その後、平成10年までは本格的な調査がなされることはなかった。

また明和池遺跡は、昭和18年に明和池の底土から弥生～古墳時代の土器が発見されることによって知られるようになった遺跡である。昭和62年に大阪府教育委員会によって発掘調査が実施され、古墳時代後期から戦国時代までの遺構・遺物が検出された。

平成10年にJR梅田貨物駅の機能移転計画に伴い、（財）大阪府文化財調査研究センターが吹田信号場構内において遺跡の確認のため61箇所のトレンチを設定して調査を実施した。このうち59箇所は吹田操車場遺跡、2箇所は明和池遺跡である。この結果、予定地内のほぼ全域で旧石器から中世に至るまでの遺物が出土し、また遺構が良好に残存していることを確認した。

平成12年には吹田信号場基盤整備工事に伴い、（財）大阪府文化財調査研究センターが吹田操車場遺跡において発掘調査を実施した。その結果、古墳時代の前期の大溝や、平安時代に施行された条里制水田、平安時代の掘立柱建物などの遺構とともに、弥生時代から中世に至る各時代の遺物が出土した。

平成13・14年には吹田市岸部中住宅代替えに伴い、吹田市教育委員会によって吹田操車場遺跡の発掘調査が実施され、谷状地形や流路群が検出され、東海系の弥生土器が出土した。

平成18・19年には独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 国鉄清算事業西日本支社が吹田信号場基盤整備工事による調整池や導水路建設を計画したことに伴い、（財）大阪府文化財センターが発掘調査を実施した。その結果、古墳時代の流路、古墳時代後半から飛鳥・奈良時代にかけての群集土坑、飛鳥・奈良時代および平安時代の掘立柱建物、近世の溜池状施設などの遺構とともに、古墳時代山陰系土師器や古代の墨書き土器、縁釉陶器、円面鏡などが出土した。

平成19・20年、操車場跡地内でまちづくり事業が計画されたことに伴い、吹田市教育委員会が吹田操車場遺跡部分に59箇所、摂津市教育委員会が明和池遺跡部分に33箇所のトレンチを設定して確認調査を行なった。その結果、弥生時代後期～古墳時代前期の土器窪、古墳時代の井戸や大型土坑、飛鳥時代の建物跡、中世以降の耕作地などの多くの遺構とともに、遺物が検出された。特記すべき遺物としては、旧石器時代の国府型ナイフ形石器、古墳時代の古式土師器、飛鳥時代の土馬などがある。

（参考文献）

- ・（財）大阪府文化財調査研究センター『吹田操車場遺跡』1999年
- ・（財）大阪府文化財調査研究センター『吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点』2001年
- ・（財）大阪府文化財センター『吹田操車場遺跡III』2008年
- ・（財）大阪府文化財センター『吹田操車場遺跡IV』2010年
- ・吹田市都市整備部 吹田市教育委員会『吹田操車場遺跡』2004年
- ・独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備機構 吹田市教育委員会『吹田操車場遺跡確認調査報告書』2008年
- ・独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備機構 摂津市教育委員会『明和池遺跡確認調査報告書』2009年

第3章 調査の成果

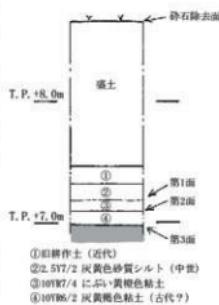
第1節 4-1区

当調査区は二つの貨物線路に挟まれた狭い場所に設定された。両線路は継続して使用されており、機関車が通過するなかでの発掘調査となった。さらに狭い空間という制限された条件下であったため、予定された30m²の調査区を二分割して、土留を施工しながらの調査とならざるを得なかつた。西側（大阪側）半分の調査区を4-1-1区、東側（京都側）半分の調査区を4-1-2区と名けて、調査を施行した。土留および湧水のために、調査区内の四周に側溝を切る必要があり、平面的な調査はさらに縮小することとなつた。

基本層序（第7図）

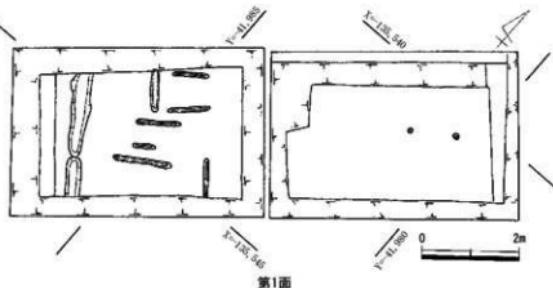
線路に囲まれた調査区であるために地表面には碎石が敷かれており、その下は吹田操車場造成に伴う盛土層となる。この両層は合わせて1.2mの厚さである。

旧耕作土層①は、T.P.+7.5mのレベルで現われる土層で、層厚は0.15m。歯等は確認されなかった。明治期の耕作土と思われる。この①から下は、②灰黄色砂質シルト、③にぶい黄橙色粘土、④灰黄褐色粘土となる。②からは中世の遺物や弥生土器片が出土し、④からは古代の時期のものかと思われる須恵器・土師器の細片および弥生土器片が出土した。④を除去したT.P.+6.95mのレベルで、明黄褐色粘土の地山となる。

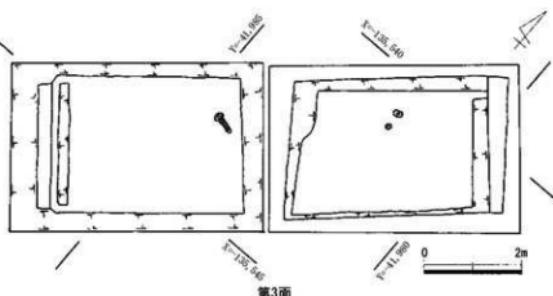


第7図 4-1区

断面模式図

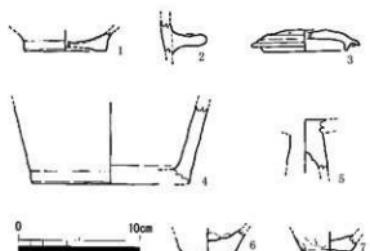


第1面



第3面

第8図 4-1区 各構面 平面図



第9図 4-1区 出土遺物

遺構の概要

第1面 (第8図)

②層を除去したT.P.+7.3mのレベルで、4-1-1区では耕作痕である鋤溝が検出された。鋤溝のうち5条は北東—南西方向に走り、幅0.1m、深さ0.05m、検出長は1mである。これに直交する方向で、幅0.2~0.3m、深さ0.05mのやや大きな溝が1条と、幅0.1mの小さな溝が2条走る。

一方4-1-2区では鋤溝は見当たらず、径・深さともに0.1m程の小ビットが2基検出されたが、これらは杭跡の可能性がある。以上の遺構の埋土は褐色灰色シルトである。

これらの遺構からは遺物は出土しなかったが、②層から中世の遺物が出土していることから、時期は中世と思われる。

なお、第1面の基盤層である③層を除去した面を第2面として精査したところ、この面では遺構は見当たらなかった。

第3面 (第8図)

④層を除去した地山面はT.P.+6.95mのレベルにあり、この面で3基の小ビットを検出した。4-1-2区では径・深さとともに0.1mのものが2基、4-1-1区では径0.15m、深さ0.25mの小ビットに短い溝が付随するものが1基である。これらの小ビットの意味するところは不明である。この遺構面の時期は、④から古代と思われる須恵器・土師器の細片が出土している。古代あるいはそれ以降のものとしておきたい。

出土遺物 (第9図)

1~4は②層出土遺物である。1は中国製白磁碗の底部。2は瓦質羽釜の鉢部。小片であり、歪みがあると思われたので、断面図だけの記録にとどめた。3は7世紀の須恵器で、蓋か壺か微妙なところであるが、ここでは蓋と考えた。4は須恵器の壺の側底部。底面が欠けているので、高台があったかどうか不明である。

5~7は④層の出土遺物である。図化し得た遺物はこの3点だけであった。いずれもかなり磨耗している。5は弥生の高壺。6、7は弥生の壺の底部。

第2節 4-2区

4-1区より北西に10mほど離れた位置に設定した約50m²の調査区である。

基本層序 (第10図)

当調査区における現地表面のレベルはT.P.+8.9~9.0mを測る。ここより1.4mほどの厚みの近現代盛土層を除去すると、旧耕土層①がT.P.+7.5m前後のレベルで現われる。この下は②青灰色細砂混シルト層、③青灰色粗砂混シルト、④明黄褐色細砂混粘土層となり、これを除去した面で地山となる。地山面のレベルはT.P.+7.15mである。

時期的には①が明治期の耕作土、②が中世以降である。③は中世の瓦器や古代の須恵器、弥生土器片

を若干含む遺物包含層であり、④は古代以前の須恵器・土師器や弥生土器片を含む包含層である。②を除去した面を第1面、③を除去した面を第2面、④を除去した地山面を第3面とした。

遺構の概要

第1面（第12図）

第1面のレベルはT.P.+7.3mであり、この面で40条ほどの鋤溝群と14基の小ビットを検出した。

鋤溝は幅0.1~0.15m、深さ0.05m以下、検出長は0.5~2.5mと様々であるが、N-55°-Wの方向にほぼ平行して走る。また小ビット群は調査区の西側に散在するもので、径0.1~0.2m、深さ0.05~0.1mほどである。これらの小ビット群は建物として明確に組み合うものはないが、簡易な掘立柱建物があった可能性を想定することはできよう。

以上の遺構からは中世以前の遺物が摩滅した状態で若干出土しているが、層位的に見て中世以降の時期の遺構となるであろう。

第2面（第12図）

第2面のレベルはT.P.+7.2mであり、この面で80条ほどの鋤溝群を検出した。しかし本来は40条前後の鋤溝群であって、それが途切れ途切れの状態で検出されたものと思われる。検出した鋤溝は幅0.1~0.15m、深さ0.05m以下で、方向はN-55°-Wとなり、第1面の鋤溝群と同一方向である。また、この方向と直交する鋤溝も若干検出した。以上の遺構からは中世以前の遺物が若干出土しているが、この面を覆う③層から中世の遺物が見られたので、この時期の遺構を見ておきたい。

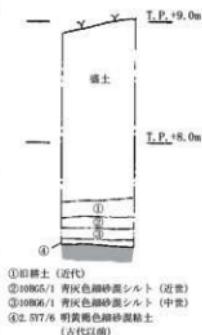
第1・2面の遺構検出状況

況からは、当地が中世に耕作地として使用され始め、その後も引き続き耕作されていったものと考えられる。

第3面（第11・12図）

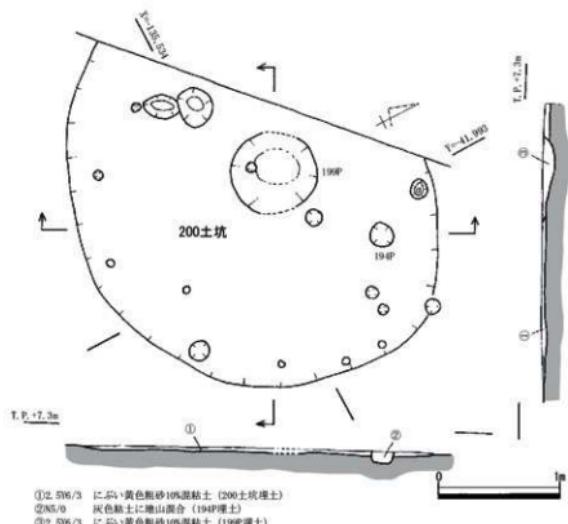
第3面はT.P.+7.15mの地山面であり、この面で土坑・小ビット群を検出した。

200土坑は、調査区の北西側の位置に所在する円形の土坑で、一部が調査区外に出るものである。径3.0mであるが、深さは最大でも0.05mとかなり浅いものである。埋土はにぶい黄

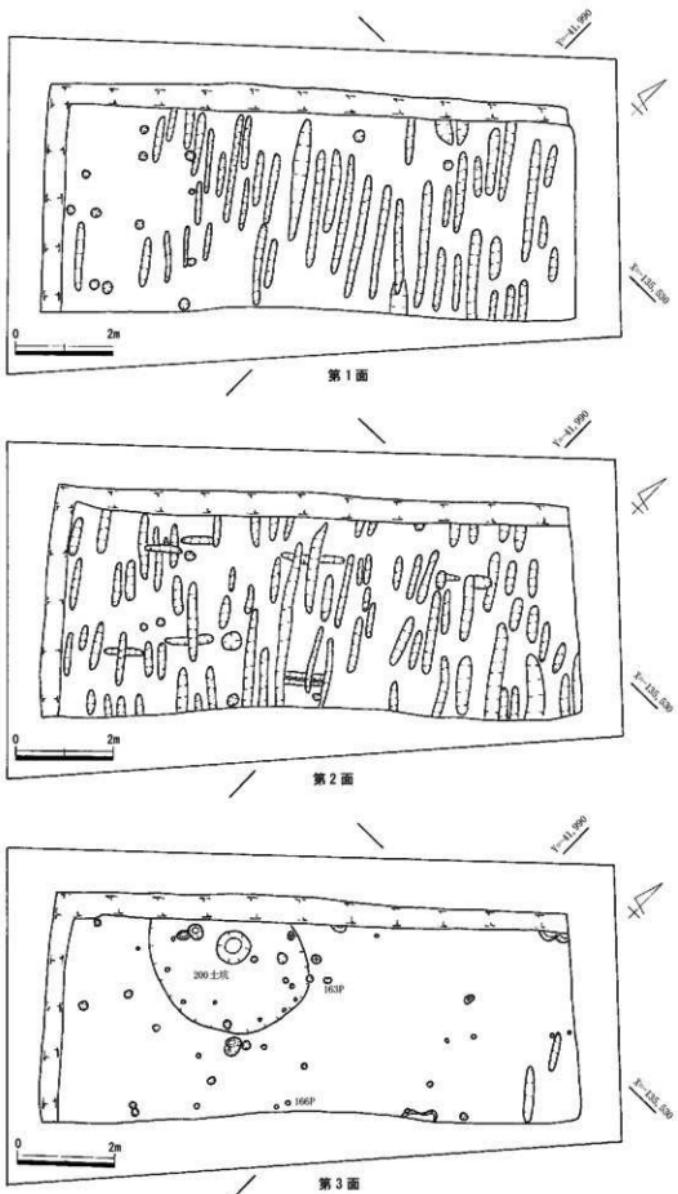


第10図 4-2区

断面模式図



第11図 4-2区 200土坑 平面・断面図



第12図 4-2区 各遺構面 平面図

色粗砂混粘土。この遺構からは弥生時代後期かと思われる土器片が若干出土している。この土坑は平面の形状からすると竪穴建物のように見えるが、周溝や壁の立ち上がりがない。また中央に径 0.7 m、深さ 0.1 m の 199 P、

およびそこから東へ 0.5 m 離れて径 0.2 m、深さ 0.1 m の 194 P の小ビットがあるが、これらは断面観察では円形土坑を切る関係にあり、従って土坑に伴うものではない。他にも径 0.05 ~ 0.25 m の小ビットが 10 基以上散在するが、これらもこの円形土坑に伴うものかどうか分からぬ。結局、円形の 200 土坑の性格は竪穴建物の可能性があるが、断定するには躊躇するところである。

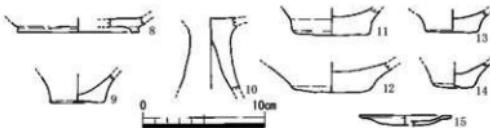
この面で検出した小ビットは 30 基ほどが調査区内に散在する状態にあり、径 0.05 ~ 0.2 m、深さ 0.05 ~ 0.15 m ほどの規模である。この小ビット群は建物跡として組み合はず、また規則的に並ぶ様相を呈していない。そして調査区の東端部では幅 0.15 m、深さ 0.02 m、検出長 0.8 ~ 1.1 m の溝を検出したが、その意味するところは不明である。

出土遺物（第 13 図）

8 ~ 10 は③層およびそれを除去した第 2 面の遺物である。8 は 8 世紀頃の須恵器の环底部。9 は弥生の甕底部。10 は鉤溝から出土したもので、弥生土器の高环。

11 ~ 13 は④層の出土遺物のうち、図化が可能であったものである。すべて弥生土器の底部である。

14 は 199P から出土した弥生土器の底部。15 は 166P から出土した、ての字口縁の土師器小皿。11 世紀末～12 世紀初頃と思われる。



第 13 図 4-2 区 出土遺物

第 3 節 4-3 区

4-2 区より北西に 25 m ほど離れた位置に設定した約 70 m² の調査区である。

基本層序（第 14 図）

当調査区における現地表面のレベルは T.P. + 9.05 m を測る。ここから 1.5 m の厚さの近現代盛土層を除去すると①旧耕土層、さらにその下は②灰黄色細砂層となり、これを除去すると地山が現われる。地山面のレベルは T.P. + 7.2 m である。

①は明治期の耕作土、②からは弥生土器・土師器・須恵器・瓦器の細片が出土したが、かなり摩滅した状態であった。時期は弥生時代～中世である。当調査区では②を除去した地山面で、遺構を検出した。

遺構の概要（第 15 図）

検出した遺構面は上述したように、T.P. + 7.2 m のレベルにある地山面である。この面では 70 基ほどの柱穴、井戸、小ビット、溝を検出した。柱穴は掘立柱建物として組み合わすことができるものである。

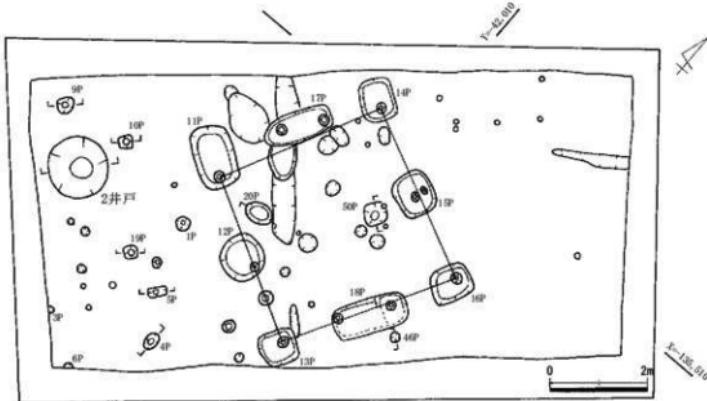
掘立柱建物（第 16 図）

調査区の中央で掘立柱建物を検出した。規模は 3.6 m × 3.7 m で、主



第 14 図 4-3 区

断面模式図



第 15 図 4-3 区 平面図

軸が N-30°-E の方向を持ち、2間×3間の掘立柱建物になるかと思われるが、建物はさらに西に延びる可能性も排除することはできない。柱穴のうち、南側に並ぶ 11 P・12 P・13 P の三基には柱根が残存し、北側に並ぶ 14 P・15 P・16 P、および東側の 18 P には柱痕が観察された。これにより柱間寸法は東西 1.8 m の等間隔であるが、南北は 1.5 m、0.9 m、1.3 m と不揃いであることが判明した。なお 17 P は建物の西側柱穴列として直線上に並ばないので、この建物の柱穴ではないと判断した。

11 P は建物の南西隅に所在する柱穴である。掘り方は 1.3 m × 0.8 m の長方形に、検出深が 0.45 m で、その中の東端の位置に柱を立てるものである。柱は径 0.15 m の柱根が残存していたが、セクションに幅 0.2 m の柱の痕跡が観察されたので、本来の太さはこれであろう。

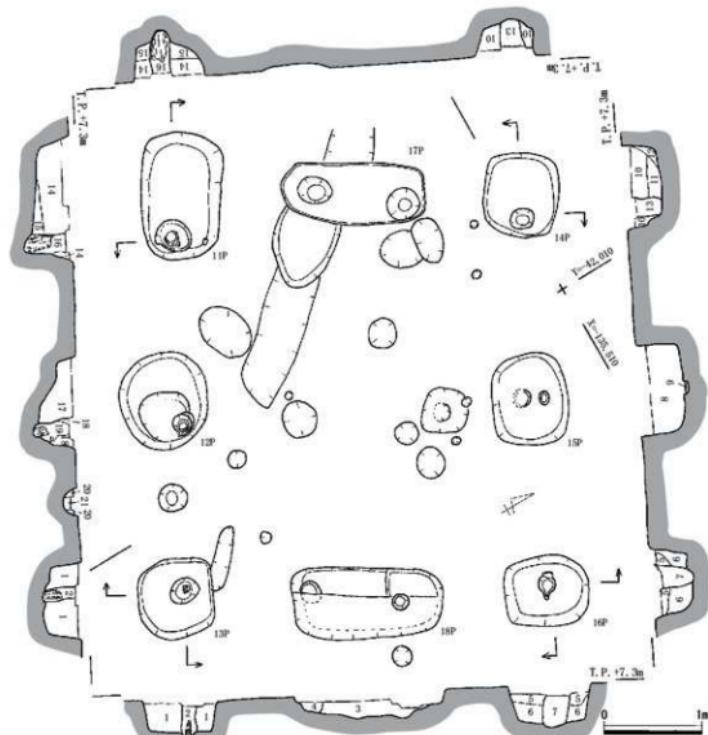
12 P は建物の南側に並ぶ柱のうち、中央に位置する柱穴である。掘り方の規模は径 1.0 m の円形で、検出深は 0.4 m を測る。この中の東端に柱を立てており、径 0.1 m の柱根が残存していた。セクションおよび平面において、径 0.2 m の柱の痕跡が観察されたので、これが本来の太さとなる。

13 P は建物の南東隅に所在する柱穴である。一辺 0.8 m の方形の掘り方のほぼ中央に柱を立てるものである。柱穴の検出深は 0.4 m を測り、径 0.1 m 足らずの柱根が残存していた。セクションの観察により、本来の柱の太さは 0.25 m となる。

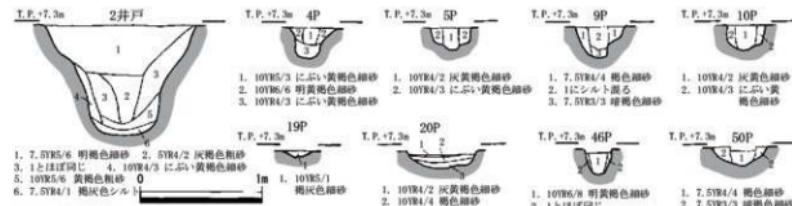
14 P は建物の北西隅に所在する柱穴である。0.8 m × 0.9 m の方形の掘り方の中で、東寄りの位置に柱を立てるものである。柱穴の検出深は 0.35 m を測り、セクションおよび平面の痕跡から柱の太さは 0.2 m と判明した。

15 P は建物の北側に並ぶ柱のうち、中央に位置する柱穴である。一辺 0.8 ~ 0.9 m の方形の掘り方で、検出深は 0.4 m。セクションでは柱が観察されなかったが、掘り方の底面で柱痕を検出することができた。柱の太さは 0.15 m となろう。

16 P は建物の北東隅に所在する柱穴である。0.7 m × 0.9 m のやや長い方形の掘り方の中央に柱を立



第16図 4-3区 据立柱建物 平面・断面図



第17図 4-3区 各遺構 断面図

てるものである。検出深は0.4mを図る。セクションのおよび平面の痕跡から柱の太さは0.2mと判明した。

18Pは建物の東側に並ぶ柱のうち、中央に位置する柱穴である。13Pと16Pのある柱穴とも言える。1.6m×0.7mの長方形の掘り方のなかで、0.9mの間隔を置いて二本の柱の痕跡を検出した。従って一つの掘り方に2本の柱を立てたということになる。柱穴の検出深は0.15mで、他と比べるとかなり浅いものである。

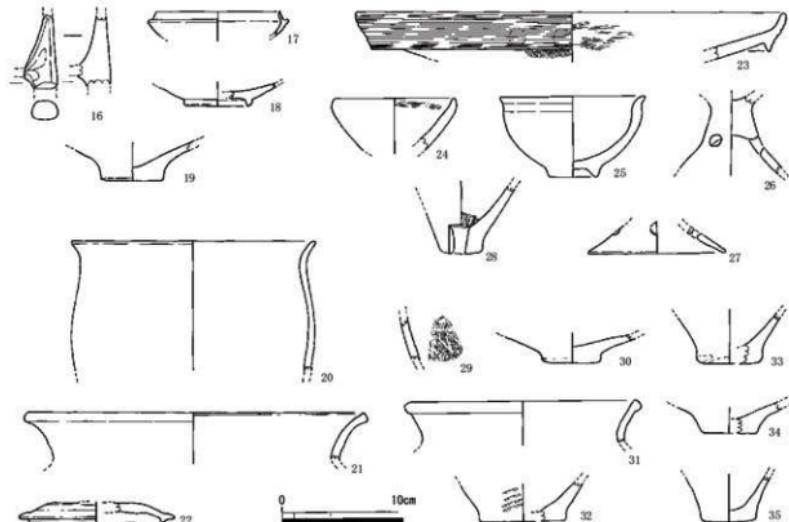
以上の建物柱穴の掘り方からは、弥生土器・土師器や須恵器の細片が出土している。時期が入り混じった小片群でありまた量的にわずかなので、建物の詳しい時期は決めがたいが、平安時代前後になろうかと思われる。

2井戸（第17図）

調査区の南西部で検出した井戸である。上記の掘立柱建物から西へ2mほど離れた位置にある。埋土は上層が明褐色シルト、下層が黄褐色～灰褐色シルトであったが、最下層に褐色粘土があつて滞水した状況をあらわす。井戸の規模は径1.2m、深さ2.1mを測る。井戸枠はなく、素掘りである。出土遺物は弥生土器か土師器の細片が多い。時期は一応弥生時代末～古墳時代初頃としておきたい。

小ピット群（第17図）

掘立柱建物の西側では、径0.05～0.3m程の小ピット群が数十基散在する。4Pは調査区の南西部に所在するピットである。平面形が0.2m×0.35mのやや細長いもので、検出深が0.25mを測る。断面に柱痕が観察された。5Pは4Pより北西へ0.8m離れて所在する。平面形が0.2m×0.4mのやや細長いもので、検出深は0.2mを測る。断面に柱痕が観察された。9Pは調査区の北西隅にあり、2井戸より北西に0.5m離れて所在する。径0.3m、検出深0.25mを測り、断面に柱痕が観察された。



第18図 4-3区 出土遺物

10Pは9Pから東に1.1m、2井戸から北へ0.3m離れて所在する。一辺0.3mの方形を呈し、検出深0.2mを測る。断面に柱痕が観察された。20Pは掘立柱建物の12Pから北へ0.2m離れた位置で検出されたもので、0.4m×0.6mの楕円形を呈し、検出深は0.15mを測る。断面では埋土がレンズ状堆積を示しており、柱痕はなかった。46Pは掘立柱建物の18-Pから東に0.1m離れて所在する。径0.2m、検出深0.5mを測る。断面に柱痕が観察された。50Pは掘立柱建物の15Pから南に0.3m離れて所在する。一辺0.4mの方形を呈し、検出深0.15mで、断面に柱痕が観察された。

以上のように小ピット6基で柱痕が確認されたのであるが、これらは建物としては組み合わない。何らかの建物があった可能性があるとしか、今のところ言い様がない状況である。

他に径0.1m以下の小ピットが多数検出されたのだが、散在した状態で、規則性はなさそうである。

出土遺物（第18図）

16～19は②層から出土した。16は中世の瓦器三足釜の脚の付け根部分。17は古墳時代後期の須恵器环。18は古代の灰釉陶器椀の底部。19は弥生土器壺の底部。②層は、以上のようにかなり時期幅のある遺物が出土した。

20～22は掘立柱建物以外の小ピット群からの出土である。20は1Pから出土した弥生土器壺。内外ともに表面がかなり磨耗している。21は6Pから出土した須恵器壺の口縁。7世紀頃と思われる。22は7世紀の須恵器环蓋。宝珠つまみがあったと思われるが、欠けている。

23～28は2井戸から出土した。いずれも弥生時代後期後半～古墳時代初めの土器である。23は壺の口縁部で、端面に擬凹線9条を施し、その上に円形浮文を貼り付けた痕跡が2ヶ所残る。24は鉢で、内面にハケ目の痕跡を有する。25は高台を有する鉢。口縁端が外反する。26は脚部に3孔を有する高杯。27は4孔を有する小型器台。28は有孔壺の底部。内面にハケ目。

29～35は掘立柱建物の柱穴から出土した遺物である。29・30は11P、31・32は16P、33は13P、34は18P、35は17Pからの出土である。29は須恵器の破片で、ヘラ描き波状文と直線文を施す。31は須恵器の壺の口縁部。他はすべて弥生土器の壺あるいは壺の底部である。このうち32には、外面にタタキ目が残る。

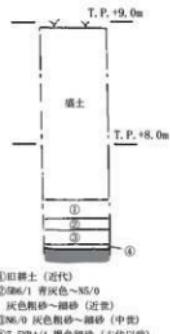
第4節 4-4区

4-3区より北西に13m離れた位置に設定した調査区である。面積は75m²である。

基本層序（第19図）

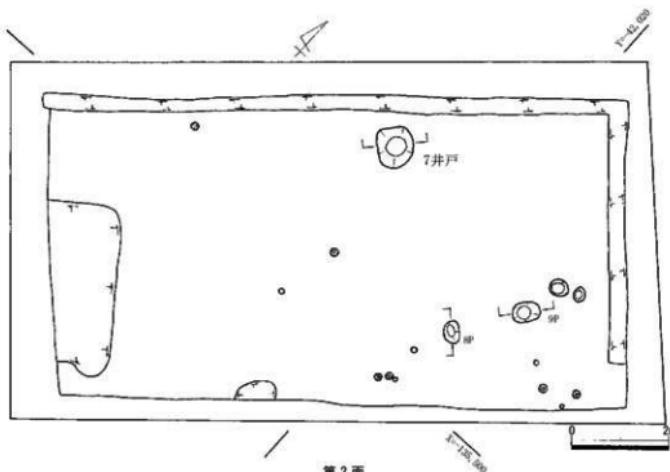
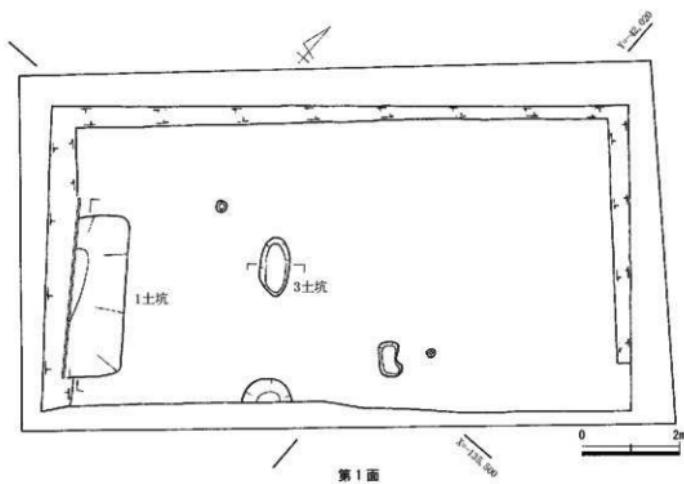
当調査区における現地表面のレベルはT.P.+8.95mを測る。ここから1.4mの厚さの近現代盛土層を除去すると①旧耕土層、さらにその下は②青灰色砂層、③灰色砂層、④褐色細砂層となり、これを除去すると地山が現われる。地山面のレベルはT.P.+7.15mである。

①は明治期の耕作土、②は①に伴う床土層と思われる。③からは瓦器の細片が出土しており、時期は中世となる。④では古代以前の土師器・須恵器および弥生土器の細片が出土した。当調査区では③を除去した面を第1面、④を除去した地山面を第2面とした。



第19図 4-4区

断面模式図



第20図 4-4区 各遺構面 平面図

遺構の概要

第1面（第20・21図）

第1面では、土坑・小ピットを五基検出した。

1 土坑は調査区の南西端に所在するもので、一辺が3.2mの方形を呈するが、大半が調査区外にあるので、全容は分からず。検出深は2.2mで、埋土は青灰色の砂シルトが主であった。出土遺物は須恵器片がわずかにあつただけで、詳しい

時期は分からず。遺構の時期は一応中世としておきたい。この土坑はその規模や埋土の状況から考えると井戸ではあり得ず、といって他の性格を考えることも今のところ困難な状況である。

3 土坑は調査区の中央やや西寄りに所在するもので、0.6m×1.2mの大きさで、検出深0.05m。埋土は青灰色細砂である。他の小ピットも大きさは様々であるが、深さが0.05m以下とかなり浅いものが多く、遺物の出土もなかった。これらの土坑の性格は不明であり、時期は中世と思われる。

第2面（第20・22図）

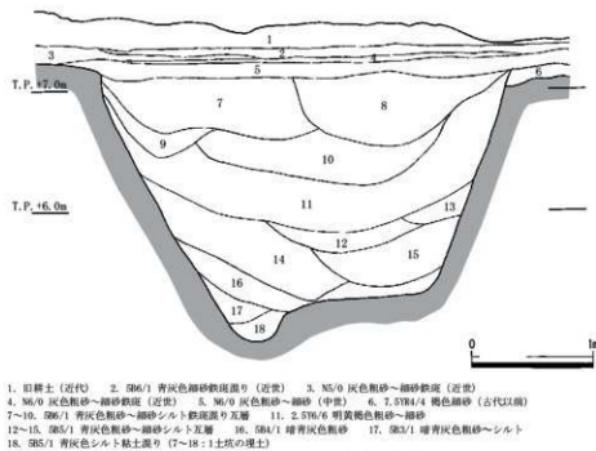
第2面では井戸や小ピットを十数基検出した。

7 井戸は調査区の北側に所在するもので、0.7m×0.9mの規模で、検出深0.7mを測る。埋土は黒褐色～褐灰色の粘土・シルト層で、その上部から弥生土器・土師器がまとまって出土した。時期は弥生時代末～古墳時代前期頃と思われるが、かなり摩滅している。

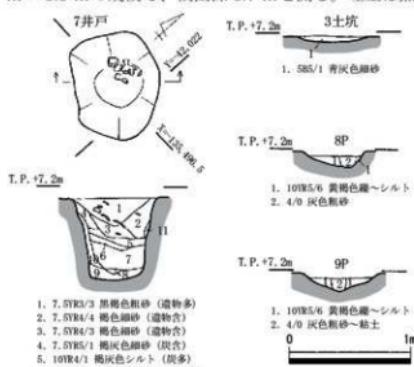
8 Pは調査区の東南部に所在する。0.3m×0.5mの楕円形を呈し、検出深0.15mを測る。セクションに柱痕が観察された。遺物は出土しなかった。

9 Pは8 Pより北東に1.1m離れた位置に所在する。0.4m×0.6mの楕円形を呈し、検出深0.15mを測る。セクションに柱痕が観察された。遺物は出土しなかった。

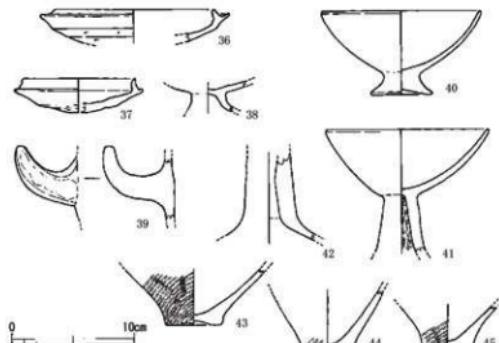
以上の柱痕のある小ピットの存在は掘立柱建物の存在をうかがわせるが、建物として復元で



第21図 4-4区 1土坑 断面図



第22図 4-4区 各遺構 平面・断面図



第23図 4-4区 出土遺物

耗が激しく、接合が困難であったが、図面上でつなぎ合わせて作図することができた。41・42は土師器高杯。脚部内面に絞り目。43～45は弥生系の甕の底部。外面にタタキ目が残る。

第5節 4-5区

4-4区より北西に13m離れた位置に設定した調査区で、面積は45m²である。

基本層序(第24図)

当調査区における現地表面のレベルはT.P.+8.8mを測る。ここから1.0mの厚さの近現代盛土層を除去すると①旧耕土層、さらにその下は②青灰色粗砂シルト混粘土層、③明青灰色粗砂シルト混粘土層、④青灰色粗砂シルト混粘土層となり、これを除去すると後述する土坑群が現われる。この土坑群は何回も重なり合っており、その埋土は⑤褐色粘土・明黄褐色粗砂粘土混合堆積層である。

の土坑群の底面が地山面となり、そのレベルは最深でT.P.+6.5mである。

①は明治期の耕作土層、②は近代以前の耕作土層、③中世の耕作土層になるのではないかと思われる。③を除去した面を第1面、④を除去して土坑群を検出した面を第2面とした。

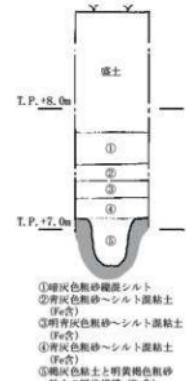
遺構の概要

第1面

この面の基盤層となる④層はグライ化しており、この面では植物根によると思われる斑駁が見られるところから、当調査区は湿地帯であったことをうかがわせる。層位的に見て中世の時期と思われる。この面では、遺構は検出されなかった。

第2面(第25・26図)

この面では、調査区全体で42基の土坑群の重なりを検出した。土坑群は平面が長楕円形や不定円形等々の様々な形状を有し、大きさも長軸1.0m～2.5m、短軸0.7m～2.0m、深さ0.5m～1.2mとばらつきがあるものである。土坑群はすべてが重複し、切り合っており、単独のものはなかった。



第24図 4-5区

断面模式図

きるものではなかった。他に10基ほどの小ピットを検出したが、深さが0.1m以下のものが散在する状況でその位置に規則性はなく、また遺物の出土もなかった。

出土遺物(第23図)

36～39は④層からの出土。36・37は須恵器壺。6世紀末～7世紀前半。38は7世紀頃の須恵器の高壺。39は土師器の把手。

40～45は7井戸からの出土。40は土師器の台付鉢。全体的に磨

1 土坑は調査区の北東端にかかるもので、大半は調査区外となる。2.5 m以上の大きさを持ち、深さは0.5 m。8—土坑を切り、9—土坑に切られる関係にある。埋土は暗灰色粗砂混シルトである。

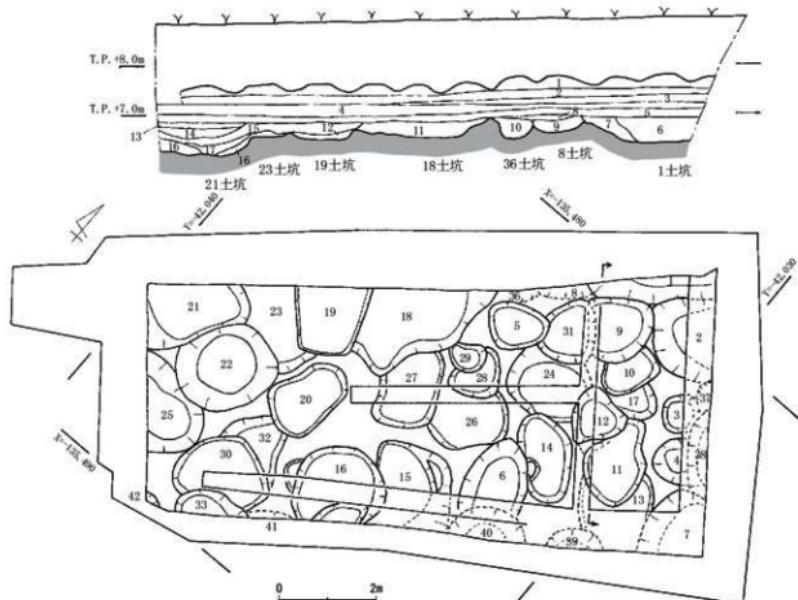
2 土坑は1 土坑の南東にあってこれを切る関係にある。1.6 m × 1.2 mの大きさで、深さは0.4 m。37 土坑に切られる。埋土は褐灰色粘土と黄橙色粘土の混合である。埋土は褐灰色粘土に明黄橙色粗砂粘土の帶状混合堆積である。

3 土坑は2 土坑の南にあって、径0.9 mほどの円形を呈し、深さ0.3 m。38 土坑に切られ、37—土坑を切る。埋土はにぶい黄橙色粘土に灰色粘土の帶状堆積である。

4 土坑は3 土坑より南に0.1 m離れて所在し、0.9 m × 0.6 m以上の円形を呈し、深さは0.15 m。38—土坑に切られる。埋土はにぶい黄橙色粘土に灰色粘土の帶状堆積である。

5 土坑は調査区の北東部にあって、1 土坑より南西へ1.1 m離れた位置に所在する。1.0 m × 1.3 mの三角形に近い円形を呈する。深さは0.25 m。5 土坑は31・36 土坑を切るが、切られる関係のものではなく、土坑群のなかでは新しい時期のものとなる。埋土は灰色～灰白色粘土に明黄褐色粘土のブロック状混合である。

6 土坑は調査区の南東部にあって、5 土坑の南に1.8 m離れて所在する。1.3 m × 1.7 m以上の長椭



層名

1. NS/ 暗灰色シルト(近代粘土)
2. S65/1 青灰色粘土シルト混り(古代粘土)
3. S66/1 青灰色粘土シルト混り(中世粘土)
4. S66/1 褐灰色粘土シルト混り(古代～中世)
5. S67/1 明青灰色粘土シルト混り(古代)
6. 10W5/1 褐色と10W7/8 黄褐色粘土の混合
7. 10W7/2 にぶい黄褐色粘土粗砂混り
8. N6/ 灰色粘土
9. 10W7/6 明黄褐色粘土にNS/ 灰色粘土ブロック含む
10. NA/ 灰色粘土に10W7/8 黄褐色粘土の带状混り
11. 10と同じ
12. NM/ 單色粘土と10W7/6 明黄褐色粘土の混合
13. 2. S66/1 黄灰色粘土
14. 2. S66/1 黄褐色粘土に10W5/6 黄褐色粘土混り
15. NL/ 單色粘土にNS/ 灰色粘土混り
16. NM/ 單色粘土10W7/6 黄褐色粘土ブロック混り
17. 16と同じ

第25図 4-5区 平面・断面図

円形を呈し、深さは 0.3 m。40 土坑を切り、1 土坑に切られる関係にある。埋土は明黄褐色粘土に黃灰色粘土ブロック混合である。

7 土坑は調査区の南東隅に所在する。大半が調査区外になるので、全容は分かり難い。径 1.3 m 以上、深さは 0.4 m まで確認された。13・38 土坑を切るものである。埋土は灰色粘土と明黄褐色粘土の混合である。

8 土坑は調査区の北側セクションで確認できた遺構である。1.0 m 以上の大きさで、深さは 0.3 m。1 土坑に切られ、36 土坑を切る関係にある。埋土は明黄褐色粘土に灰色粘土ブロック混合である。

9 土坑は調査区の北東部あって、2 土坑の西に接する位置に所在する。1.3 m × 1.5 m ほどのやや不定円形を呈し、深さは 0.3 m である。31 土坑に切られ、1・10・17 土坑を切る関係にある。埋土は明黄褐色粘土と黃灰色粘土の混合である。

10 土坑は 2 土坑の南に接する位置にあり、9 土坑に切られ、17 土坑を切る関係にある。径 1.2 m ほどの不定形を呈し、深さは 0.4 m。

11 土坑は調査区の南東部にあって、7 土坑の西に 0.5 m 離れて所在する。1.2 m × 1.9 m の不定形を呈し、深さは 0.4 m。12 土坑に切られ、13 土坑を切る。埋土は明黄褐色粘土・オリーブ黒色粘土・灰色粘土の帶状混合である。

12 土坑は調査区の東部にあって、11・17・24 土坑を切るが、切られる関係のものはなく、土坑群のなかでは新しい時期のものとなる。1.1 m × 1.2 m の不定三角形を呈し、深さは 0.3 m。埋土はにぶい黄色粘土と黃灰色粘土との混合である。

13 土坑は調査区の南東部にあって、7・11 土坑に切られ、39 土坑を切る。1.5 m × 1.7 m 以上の大きさを有し、深さは 0.4 m である。埋土は灰色粘土と明黄褐色粘土の混合である。

14 土坑は調査区の東部にあって、6 土坑の北に切られ、28 土坑を切る。1.1 m × 1.9 m の長楕円形を呈し、深さは 0.3 m。

15 土坑は調査区の中央南部にあって、6 土坑の西に 0.2 m 離れて所在する。遺構の一部が調査区外にないので全容は分かり難いが、1.5 m × 1.7 m の不定円形で、深さは 0.6 m を測る。16 土坑に切られる。埋土は、上層がにぶい黄褐色粗砂にシルト粘土混じりで、下層が黄褐色粘土・褐灰色粘土・明黄褐色粘土のブロック状混合である。

16 土坑は調査区の南西部にあって、その東部が 15 土坑の西を切る位置にある。径 1.9 m の円形で、深さは 0.6 m を測る。埋土は、上層がにぶい黄橙色粗砂にシルト混じり粘土で、下層が黄灰色粘土と灰白色粘土のブロック状混合である。

17 土坑は調査区の東部にあって、10・11・12 土坑に切られる位置にある。0.9 m 以上 × 1.6 m 以上の長楕円形を呈し、深さは 0.25 m。



第 26 図 4-5 区 土坑群 断面図

18 土坑は調査区の中央北部にあって、遺構の大半が調査区外にある。1.7 m以上 × 3.0 m以上の不定形を呈し、深さは 0.3 m。19 - 土坑に切られる。埋土は灰色粘土に黄橙色粘土のブロック混合である。

19 土坑は調査区の中央北部あって、18 - 土坑の西端を切る位置にある。遺構の一部が調査区外にあって全容は分かり難いが、1.5 m × 1.3 m以上の台形を呈し、深さは 0.3 mを測る。埋土は暗灰色粘土に明黄褐色土のブロック混合である。

20 土坑は調査区の西半部の中央にあって、16 土坑の西に 0.3 m、19 土坑の南に 0.1 m離れて所在する。32 土坑を切るが、切られる関係のものはなく、土坑群のなかでは新しい時期になると思われる。1.2 m × 1.8 mの大きさで、深さは 0.3 mである。埋土は黄灰色粘土と明黄褐色粘土のブロック混合である。

21 土坑は調査区の北西隅に所在する。遺構の大半は調査区外にある。1.0 m以上 × 2.0 m以上の大きさで、深さは 0.4 mを測る。埋土は、上層が暗灰色粘土と灰白色粘土の混合で、下層が暗灰色粘土と明黄褐色粘土のブロック状混合である。

22 土坑は調査区の西半部にあって、20 土坑の西に接し、21 土坑の東に接する位置にある。径 2.0 mの円形を呈し、深さは 0.5 mを測る。23・25 土坑を切る。埋土は上層が黄灰色粘土と明黄褐色粘土の混合で、中・下層が褐灰色～灰色粘土に黄橙色粘土のブロック状混合である。

23 土坑は調査区北西部にあって、19・21・22 土坑に囲まれて、それぞれに切られる関係にある。調査区の北側セクションにこの土坑の痕跡が認められたところから、大きさは 1.9 m程と推定される。深さは 0.25 m。

24 土坑は調査区東半部の中央にあって、5・12・14・31 土坑に囲まれて、それぞれに切られる関係にある。径 1.8 m、深さ 0.2 mを測る。

25 土坑は調査区の西端のセクションにかかる位置で検出された。1.7 m × 1.8 m以上の楕円形を呈し、深さは 0.1 mを測る。22 - 土坑に切られる。埋土は黒褐色粘土と黄灰色粘土の混合である。

26 土坑は調査区中央にあって、6 土坑の北端に接する位置にある。径 1.7 m、深さ 0.15 mを測る。

27 土坑は調査区中央にあって、18 土坑の南東隅に切られ、26 - 土坑の西端を切る位置にある。1.2 m × 1.9 mの長方形を呈し、深さは 0.2 m

28 土坑は調査区の中央にあって、26 土坑の北端に切られる。0.9 m × 1.2 mの三角形を呈する。

29 土坑は調査区の中央にあって、18 土坑の東に接し、28 土坑の北西部を切る位置にある。0.4 m × 0.6 mの不定楕円形である。

30 土坑は調査区の南西部にあって、25 土坑の南東端に接し、32 土坑を切り、33 土坑に切られる。1.5 m × 1.9 mの大きさで、深さ 0.1 mである。

31 土坑は調査区の北東部にあって、5 土坑の東に切られ、8 土坑の南に接し、9・24 土坑を切る関係にある。径 1.2 m程の三角形に近い形状を有し、深さは 0.4 mを測る。

32 土坑は調査区の南西部にあって、20 土坑の南西端、30 土坑の北東部に切られる位置にある。1.3 m × 1.0 m以上の不定形を呈する。

33 土坑は調査区南西端部にあって、その大半は調査区外にある。30 土坑を切る。1.5 m × 0.5 m以上の長楕円形を呈し、深さは 0.6 mを測る。埋土は、上層が明黄褐色粘土・黒色粘土・灰白色粘土のブロック混合で、下層が青灰色粘土である。

36 土坑は調査区の北側セクションで確認できた遺構である。平面形は不明で、深さは 0.4 mを測る。

8 土坑に接する。埋土は灰色粘土に黄橙色土の帶状堆積である。

37 土坑は調査区の西側セクションで確認できた遺構である。2 土坑に接し、38 土坑に切られる。平面形は不明で、深さは 0.3 m。埋土は褐灰色粘土に黄橙色粗砂粘土の帶状混合堆積である。

38 土坑は調査区の西側セクションで確認できた遺構である。37 土坑を切り、7 土坑に切られる。平面形は不明で、深さは 0.5 m。埋土は褐灰色粘土に黄橙色粗砂粘土の帶状混合堆積である。

39 土坑は調査区の南側セクションの東半部で確認したもので、7 土坑より 0.6 m 離れる位置にあり、13 土坑を切る。土坑平面形は不明だが、深さは 0.4 m を測る。埋土は灰色粘土と明黄褐色粘土の混合である。

40 土坑は調査区南側セクションにおいて 39 土坑より 0.5 m 離れたところで確認した遺構である。6 土坑を切る。平面形は不明だが、1.5 m 程の大きさで、深さは 0.2 m を測る。埋土は褐灰色粘土と明黄褐色粘土のブロック状混合である。

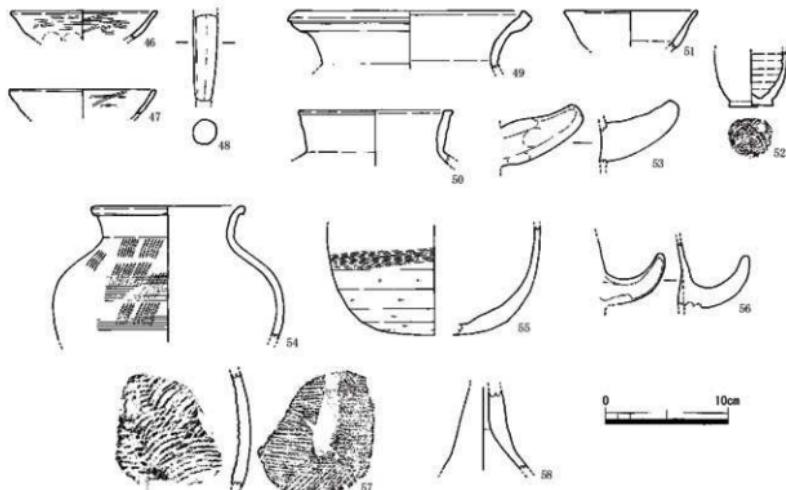
41 土坑は調査区の南側セクションの西半部で確認したもので、16・33 土坑に接する。平面形は不明だが、深さは 0.2 m を測る。埋土は明黄褐色粘土・黒色粘土・灰白色粘土のブロック状混合である。

42 土坑は調査区の南西端にあって、そのほとんどが調査区外にある。セクション上において確認したもので、深さ 0.5 m を測る。

以上の土坑群は、当区から 18 m 離れた C 1・2 区（平成 18・19 年度調査）で検出された群集土壙と一連のものと考えられ、時期は古墳時代後期～飛鳥時代となろう。

出土遺物（第 27 図）

46～48 は③層から出土した遺物である。46 は瓦器椀で、かなり磨耗しているが、外面にかろうじてミガキを観察することができた。47 も瓦器椀であるが、外面にミガキがない。48 は瓦器三足釜の脚である。



第 27 図 4-5 区 出土遺物

49～53は④層から出土した遺物である。49・50は須恵器壺の口縁部。7世紀頃か。51は須恵器壺の口縁部で、高台が付くタイプと思われる。内外面に緑色の自然釉が被る。52はいわゆる壺Gと呼ばれる小型須恵器長頸壺。外底面には糸切り痕が残る。51・52は8世紀後半であろう。53は土師器の把手。

54～58は土坑群から出土した遺物である。54は2～土坑から出土した須恵器壺。古墳時代後期のものか。55は16土坑から出土した須恵器壺の底部。外面下半に回転ヘラケズリを施す。時期は古墳時代であろうが、詳しく述べない。56は13～土坑から出土した土師器の把手。7世紀頃か。57は25土坑から出土した須恵器壺の腹部の破片。外面に平行タタキ、内面に同心円タタキ目。58は13土坑から出土した土師器高杯。

第6節 4～6区

4～5区の北西に18m離れた位置に設定した調査区である。11m×50mの本体部の南東中央に5m×14mの拡張部がつく形態で、面積は620m²である。

基本層序(第28図)

当調査区における現地表面のレベルはT.P.+8.8mを測る。ここから1.3mの厚さの近現代盛土層を除去すると①旧耕土層、さらにその下は②にぶい黄橙色細砂、③褐灰色粗混じりシルト、④褐灰色細砂混じりシルトとなり、これを除去すると地山となる。地山面のレベルは、T.P.+7.0～7.1mである。②は近世、③は中世、④は古代～中世の遺物包含層となる。③を除去した面を第1面、④を除去した地山面を第2面とした。

遺構の概要

第1面(第29図左)

第1面の基盤層はグライ化しており、中世段階には湿地帯であったと考えられる。この面では井戸や小ピットを若干検出した。

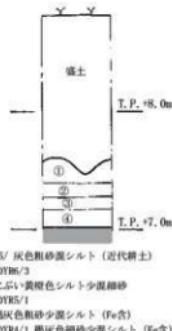
1井戸は調査区の西半部にあるもので、径2.0m、検出深1.2mを測る。中世以降の遺物が出土しており、本来はもっと上面より切り込まれた遺構と思われる。

小ピット群は調査区中央で検出されたもので、径0.6m程のものが4基、径2.0～3.0mの多少大きめのものが3基であった。深さはいずれも0.1～0.3mと浅いもので、遺物の出土もなかった。これらの小ピットは中世のものとしていいのかどうか、明確にはできない。

第2面(第29図右)

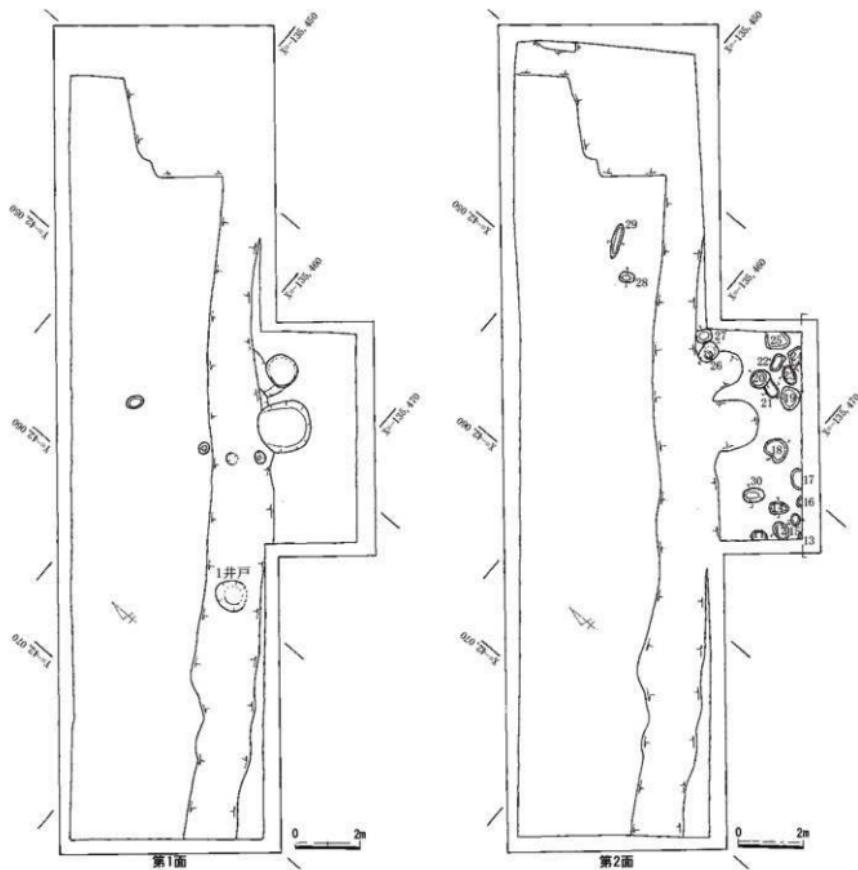
この面では、拡張部において18基の土坑群を検出した。土坑群は、そのうちの数基が調査区外に伸びて全容が分からぬが、主に橢円形あるいは不定円形を呈し、大きさは長軸1.0～1.5m、短軸0.3～1.0mで、深さは0.1～0.3mを測る。

11土坑は拡張部の南西側セクションに一部かかる遺構で、1.0m×0.5m以上の橢円形を呈し、深さは0.3m。埋土は、灰白色と明黄褐色細砂混シルト(地山ブロック)の混合土である。

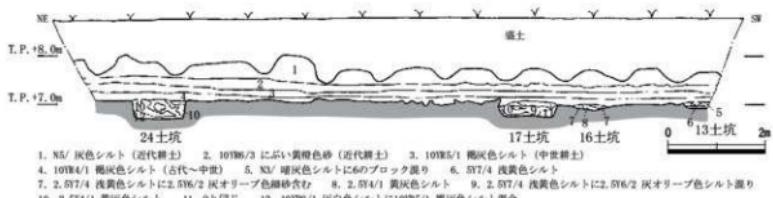


第28図 4～6区

断面模式図



第29図 4-6区 各遺構面 平面図



第30図 4-6区 断面図

12 土坑は 11 土坑の東に 0.5 m 離れて所在し、拡張部の南西側セクションに一部がかかる。1.2 m × 0.8 m の大きさで、深さは 0.1 m。埋土は暗灰色細砂混シルトに浅黄色細砂混シルト（地山ブロック）が混合するものである。

13 土坑は拡張部の南端コーナーにかかる遺構で、全容は分からず。深さ 0.2 m で、埋土は暗灰色細砂混シルトに浅黄色細砂混シルト（地山ブロック）が混合する。

14 土坑は 12 土坑の北東に 1.0 m 離れて所在する。1.2 m × 0.7 m の大きさで、深さは 0.15 m。埋土は暗灰色細砂混シルトに浅黄色細砂混シルト（地山ブロック）が混合する。

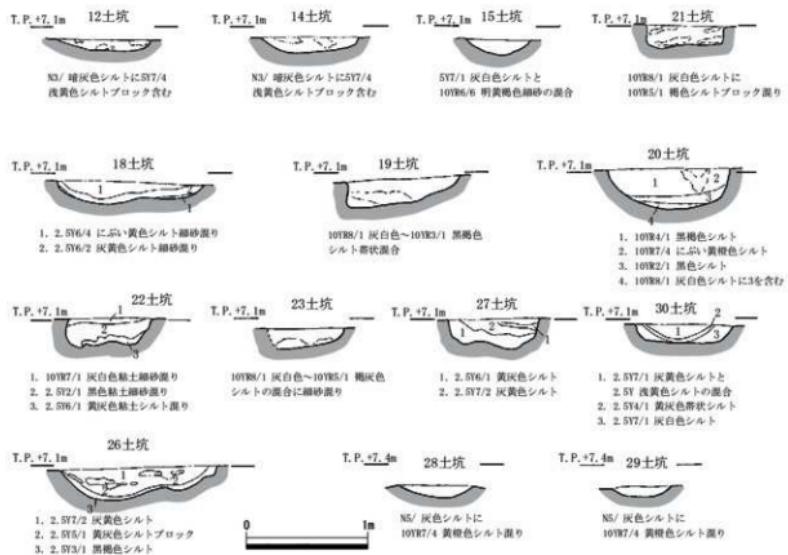
15 土坑は 12 土坑の東に 0.3 m 離れて所在する。0.7 m × 0.5 m の大きさで、深さは 0.1 m。埋土は灰白色細砂混シルトと明黄褐色細砂の混合である。

16 土坑は 15 土坑の東に 0.4 m 離れて所在し、その半分以上は調査区外となる。0.7 m ほどの大きさで、深さは 0.1 m。埋土は浅黄色細砂混シルトと灰オリーブ色細砂混シルトの混合ブロックに、さらに黄灰色シルトブロックが混じる。

17 土坑は拡張部の南東側セクションに沿って 16 土坑より 0.3 m 離れて所在し、その半分以上は調査区外となる。1.3 m ほどの大きさで、深さは 0.3 m。埋土は浅黄色細砂混シルトに細砂混シルト、さらに黄灰色シルトブロックが混合するものである。

18 土坑は 17 土坑より北へ 0.9 m 離れて所在し、径 1.5 m ほどの不定円形を呈する。深さは 0.2 m。埋土はにぶい黄色細砂混シルトのなかに、灰黄色細砂混シルトが遺構の底面を覆うように堆積するものである。

30 土坑は拡張部南西半部の中央にあって、14 土坑の北に 0.5 m 離れて所在する。遺構検出作業の都



第 31 図 4-6 区 各遺構 断面図

合で、遺構番号の数字がずれ込んだものである。1.3 m × 0.8 m の楕円形を呈し、深さは 0.15 m。埋土は灰黄色細砂混シルトと灰白色細砂混シルトとの間に、黄灰色細砂混シルトが帶状に堆積するものである。

19 土坑は拡張部北東半部にあって、18 土坑より東に 1.8 m 離れて所在する。1.2 m × 1.5 m の大きさで、深さは 0.2 m。埋土は灰色～1 黒褐色の帶状混合細砂混シルトにぶい黄橙色土が入るものである。

20 土坑は拡張部北東半部中央にあって、19 土坑の北に 1.0 m 離れて所在する。1.1 m × 1.3 m の円形で、深さは 0.3 m。埋土は、上層が黒褐色細砂混シルトブロックとぶい黄橙色細砂混シルトブロックで、下層は黒色細砂混シルトと 10 灰白色土の帶状堆積である。この遺構から須恵器の甕片が出土した。

21 土坑は、その北端を 20 土坑に切られる位置にあり、0.7 m × 1.0 m 以上の大きさである。深さは 0.15 m。埋土は灰白色細砂混シルトブロックと褐灰色細砂混シルトの混合である。この遺構から須恵器の甕の破片が出土した。

22 土坑は 20 土坑の東に 0.2 m 離れて所在する。1.1 m × 0.6 m の大きさで、深さは 0.2 m。埋土は、上層から灰白色細砂混粘土、黒色細砂混粘土、細砂混粘土の 3 層である。

23 土坑は 19 土坑の北東に 0.1 m、22 土坑の南に 0.1 m 離れて所在する。1.2 m × 0.8 m の大きさで、深さは 0.2 m。埋土は灰白色～褐灰色の細砂混シルトの混合である。

24 土坑は、その一部が拡張部南東側セクションにかかり、また 23 土坑の東に接する位置にある。1.0 m × 0.8 m 以上の方形を呈し、深さは 0.35 m。埋土は灰白色細砂混シルトに黄灰色シルトブロックが混合する。

25 土坑は、その一部が拡張部北東側セクションにかかり、22 土坑の北東に 0.2 m 離れて所在する。1.5 m × 1.0 m 以上の大きさで、深さは 0.3 m。埋土は灰白色～褐灰色の細砂混シルトの混合である。

26 土坑は、拡張部北東半部でも北端で、本体部との接点にあたる。20 土坑の北に 2.5 m 離れた位置である。1.3 m × 1.0 m の大きさで、深さは 0.1 m。埋土は遺構の底面に黒褐色シルトの層が覆い、その上に灰黄色シルトに黄灰色シルトブロックが混じる層が堆積する。

27 土坑は 26 土坑の北東に接する位置にある。0.8 m × 1.0 m の大きさで、深さは 0.25 m。埋土は黄灰色シルトに灰黄色シルトが挟み込むように堆積する。

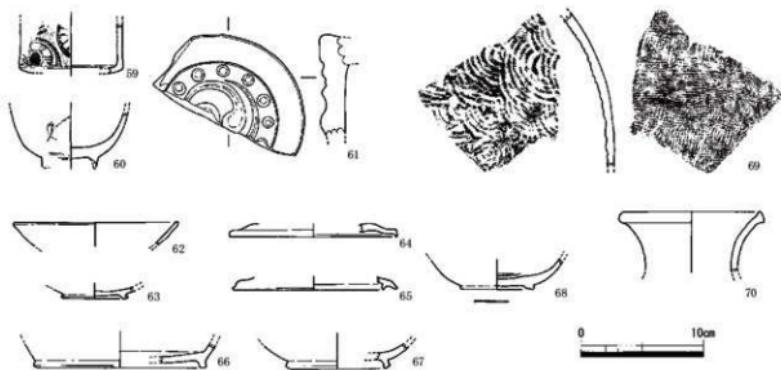
28 土坑は調査区本体部北東半部の中央に所在する。0.6 m × 1.0 m、深さは 0.1 m。埋土は灰色シルトと Y にぶい黄褐色シルトの混合である。この遺構は、拡張部で検出された土坑群とは 5 m 離れており、埋土も違っている。性格を異にするものと思われる。

29 土坑は 28 土坑の北に 1.0 m 離れて所在する。0.6 m × 2.2 m の溝状のもので、深さは 0.1 m。埋土はにぶい褐色シルト混粘土で、これも拡張部の土坑群とは性格を異にするものとなる。

以上のうち 11 ～ 27・30 土坑は拡張部内に群集するもので、出土遺物は少ないが古墳時代後期～7 世紀頃と考えられる。これは先述の 4 ～ 5 区で検出した土坑群と時期が一致し、また空間的にも近接するものなので、一連のものと見てよいであろう。ただし本区の土坑群は 4 ～ 5 区のものと比べると、やや小ぶりなものが多く、また切り合う関係のものが少ないという特徴を見ることができる。

出土遺物（第 32 図）

59 ～ 61 は 1 井戸から出土した遺物である。59 は染付磁器の小鉢。60 は茶碗、61 は軒丸瓦。いず



第32図 4-6区 出土遺物

れも時期的に新しいものとなろう。

62～68は④層から出土した遺物である。62は瓦器椀。内外面ともに磨耗しており、ミガキが見えない。63は瓦器碗の底部で、見込み部にミガキの痕跡が見える。64は8世紀末頃の須恵器坏蓋。65は7世紀の須恵器坏蓋。66は須恵器坏の底部。8世紀末頃か。67は灰釉陶器椀の高台部。68は綠釉陶器椀の底部で、高台内に「一」のヘラ記号がある。

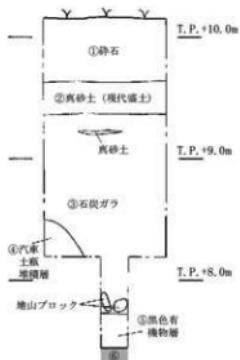
69・70は20土坑から出土した須恵器壺の腹部破片と口縁部である。当区の土坑群から出土した遺物のうち、図化し得たのはこの2点である。

第7節 5区

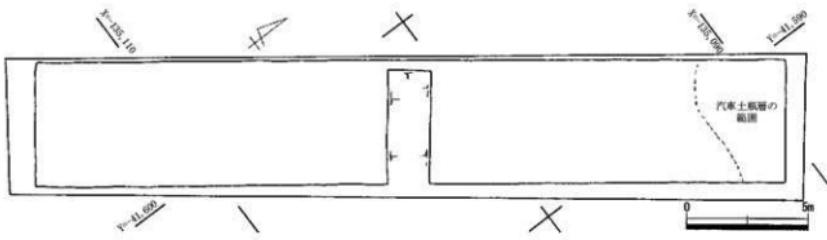
当区は他区と違つて摂津市域に属し、遺跡名称は「明和池遺跡」となる。上述の4区より北東方向(京都方面)に550m離れた位置に設定した調査区で、面積は120m²である。調査は本体工事に合わせての床付けまでとしたので、調査区の大半は地山に到達しておらず、調査区中央におけるトレンチで地山に到達することができた。

基本層序(第33図)

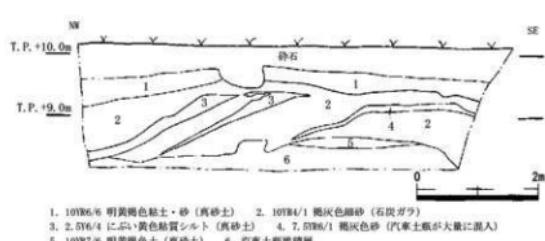
調査区の現地表面のレベルはT.P.+10.1mで、4区と比べると1mほど高くなる。ここから①碎石および②現代盛土(真砂土)を除去すると、厚さ1.0～1.5mの③褐色灰色礫砂(石炭ガラ)である。この石炭ガラ層中には、真砂土もしくは地山の2次堆積である粘質シルトを間に挟む。この層に注目すると、南東から北西に向けて埋められた廃棄坑と思われる。調査区北東端(京都側)では30cm以上の層厚を持つ④汽車土瓶堆積層が見られた。これらの埋土の状況から推測すると、調査区の南東側(京都方面に向かって右側)に列車を停めて、そこから北西側の廃棄坑に向けて石炭ガラや汽車土瓶等を投棄したのではないかと思われる。



第33図 5区 断面模式図



第34図 5区 平面図



第35図 5区 断面図

調査区の大部分は本体工事の予定掘削深度に止める床付け掘削となったので、③④の途中で調査を終えざるを得なかつたが、調査区の中央では本体工事でもピット掘削が予定されたので、この部分だけは地山まで到達することができた。この調査では③石炭ガラの下は⑤黒色有機物混じり層で、これは有機

物ゴミが土壤化したものではないかと推定される。⑤を除去したところで、地山が露出した。T.P.+7.4 mで⑥地山となる。地山は灰白色のシルト質粘土である。

結局、当調査区は全体が汽車・客車から発生する石炭ガラや塵芥の廃棄坑であったということになる。④層には様々な汽車土瓶、それに伴う湯呑み、丼鉢などが含まれていた(第5・6図)。時期は、吹田操車場内で客車操車場が操業していた昭和3年(1928)～同8年(1933)に限定できると考えられるものである。(第2章第1節参照)



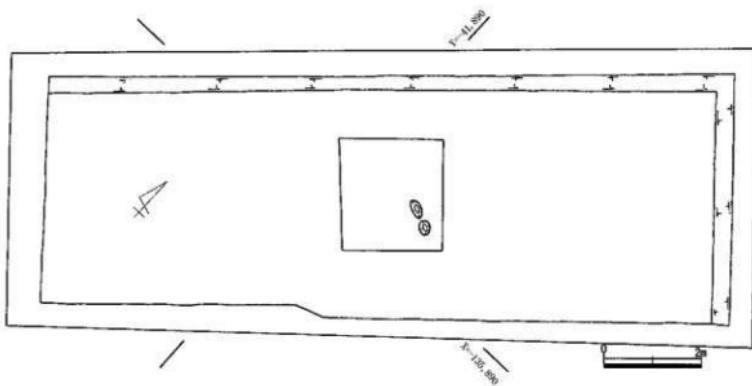
第36図 6区 断面模式図

第8節 6区

当区は4区より北東に150m、5区より南西に450m離れた位置に設定した調査区で、面積は70m²である。調査は本体工事に合わせて床付けまでとした。従って調査区の大半は第1面で終わったが、調査区の中央では本体工事でのピット掘削が予定されていたので、この部分では地山まで確認することができた。

基本層序(第36図)

当調査区における現地表面のレベルはT.P.+9.1mを測る。ここから近年の碎石および盛土を除去すると①旧耕作土(近代)が現われ、断面に歴が観察される。①を除去した面を「第1面」として精査したところ、溝と耕作痕を検出した。①の基盤となる層は③反応オリーブ色シル



第37図 6区 平面図

トで、①層と接する部分では黄色みを帯びる。この③層からは土師器・須恵器の細片が出土した。詳細な時期はわかり難いが、一応中世としておきたい。これを除去した面を「第2面」とした。この面の基盤となる土層は厚さ80cm程の④～⑥黄色シルト層等で、下に行くほど砂の割合が強くなり、また灰色の度合いが強くなる。この層からの出土遺物はなかった。これを除去したT.P.+7.1mのレベルで地山となる。

遺構の概要

第1面

①の近代の耕作土層を除去した面である。耕作に伴う馬鍬溝などの耕作痕を検出した。馬鍬溝は幅が1～2cmほどの細い溝が平行して無数に走るもので、馬鍬の歯先がこの面に当たったものと推測した。この溝群の方向はまた調査区中央でN-33°-Wである。また調査区の中央で幅0.6mと0.4mの平行する溝を検出した。これは段差のある2枚の水田の境界に掘られた排水溝跡と思われる。方向はN-38°-Wである。この面の遺構の時期の詳細は不明だが、かなり新しいものとなろう。

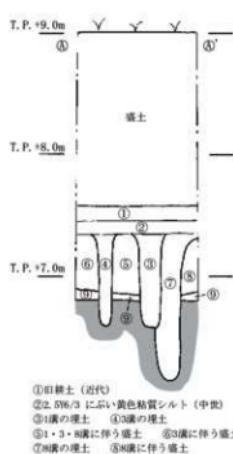
第2面（第37図）

第2面は調査区の中央に設定した一辺2mの正方形のグリッドで現われた面で、2基の小ピットを検出した。0.1～0.3mの大きさで、深さは0.1mを測る。埋土は茶褐色を呈し、出土遺物はなかった。遺構の時期は不明であるが、周辺の調査の状況からすると中世ではないかと思われる。

第2面の基盤となる④～⑥層は自然河川に由来する砂層である。これを除去すると地山となるが、床付けのため面的調査はせずに断面観察で調査を終わらせた。

第9節 7区

当区は4区より北東に90m、6区より南西に40m離れた地点に設定した調査区で、面積は280m²。この調査区の中央～南西部は、吹田操車場の地下を横断する歩行者・自転車専用通路に繋がる連絡地下道によって遺構が削平された状態であった。連絡地下道は発掘調査着手時には閉鎖されていたが、調査区の真ん中に部厚いコンクリートが残存するなかでの調査となった。



第38図 7区 断面模式図

基本層序（第38図）

当調査区における現地表面のレベルはT.P.+9.0mを測る。ここから1.4mの厚さの近年盛土を除去すると①旧耕土層（近代）、さらに②にぶい黄色粘質シルト（中世耕作土）となる。②を除去した面で後述する方形周溝の可能性のある遺構等が検出された。これらの遺構は当時の掘削土を周間にマウンド状に盛土するもの（⑤⑥⑧層）であった。この盛土層を除去すると、⑨灰白色砂層の上面となり、レベルはT.P.+6.9mである。そしてこれが方形周溝の可能性のある遺構等の掘削当初の面となる。⑩は0.05~0.1mの厚さで、これを除去した面が明黄褐色粘土の地山であり、地山面のレベルはT.P.+6.8mを測る。

①を除去した面を「第1面」とし、②を除去した面を「第2面」、⑨の上面を「第3面」とした。なお第2面では遺構が2時期にわたることが判明したため、新しい時期のものとして精査・検出した遺構群を「第2-1面」、古い時期のものとして精査・検出した遺構群を「第2-2面」とした。また連絡地下道のうち、遺構の残存が予想された部分はコンクリートを取り壊して調査したのであるが、この際に検出された遺構群も第2-2面として取り扱った。

第1面は中世以降のかなり新しい時期である。第2面は中世の遺物を包含する②層の除去面であるが、中世の遺構は検出されず、弥生時代の遺構が検出された。これは中世に弥生時代の遺構を削平したために、中世の層②を除去した面で弥生時代の遺構が露出したものと考えられる。第3面の基盤層は⑨の薄い砂層で、その直下が地山の粘土層となる。そのため⑩の上面での精査は難しく、⑩を除去した地山面での精査によって遺構検出を行なった。

遺構の概要

第1面（第39図左）

第1面では調査区の南西隅部分で、小ピットを二基検出した。

11P（第42図）は、調査区の南西部においてプライマリーな土が残る狭い空間で検出した遺構である。その半分はセクションにかかる。径1.0mの大きさで、深さ0.4m。埋土は灰白色砂質シルトで、遺物の出土はなかった。

12Pは11Pより南に0.8m離れて所在する。その大半は連絡地下道により搅乱されており、全容は分からず。深さは0.2m以上で、埋土は灰白色砂質シルトで、遺物の出土はなかった。

以上の遺構は近代の耕作に関係する遺構ではないかと考えられる。

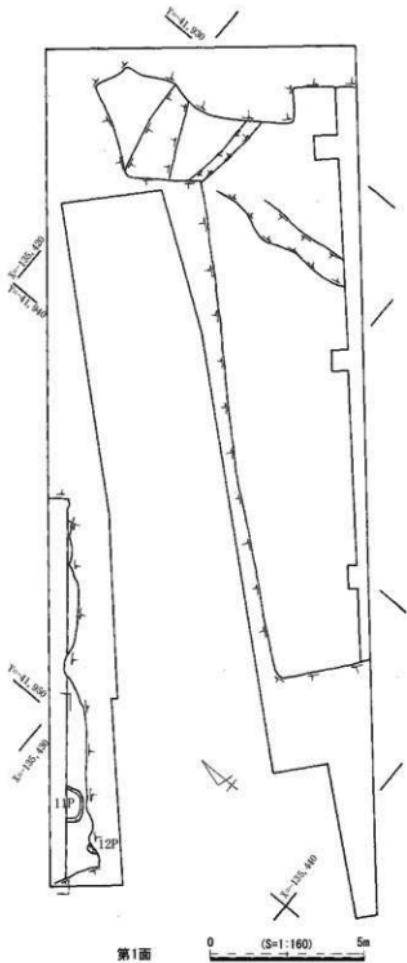
この面では、他に近年に掘削された溝等があったが、すべて搅乱扱いとした。

第2-1面（第39図右）

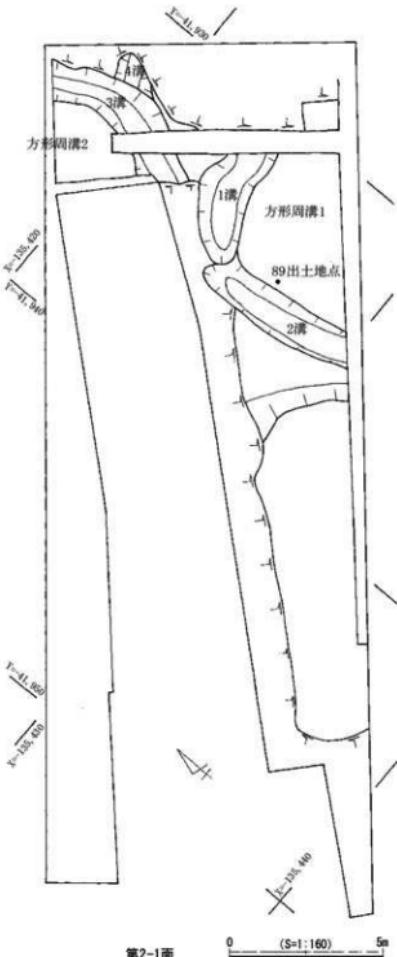
第2面の当初に精査した際に、調査区の北東部において幅1.5m前後の溝を4条検出した。2時期ある第2面のうち、新しい時期に相当するものである。

1溝はやや内湾しながら東西に走る溝で、幅1.5m、深さ0.7m、検出長5.0mで、それより東の方は近年の搅乱により削平されている。埋土は基本的に黄褐色～灰色砂で、部分的に黒褐色粘土が入る。

2溝は1溝の西端から南に伸びる南北溝で、幅1.3m、深さ0.7m、検出長6.0m。それより南は調

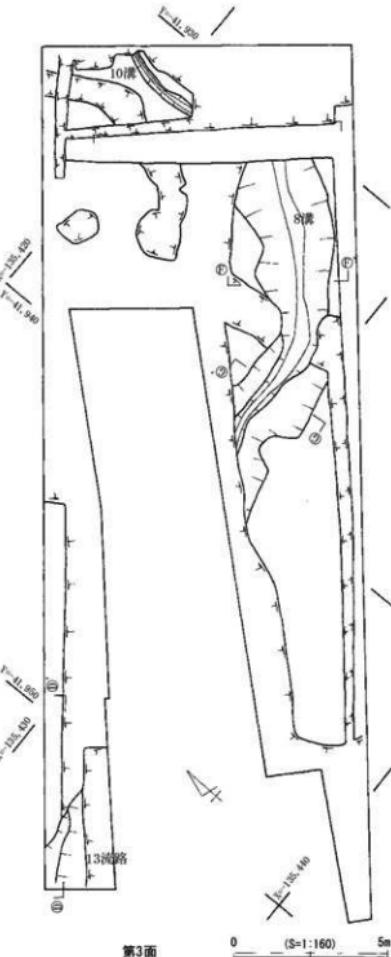
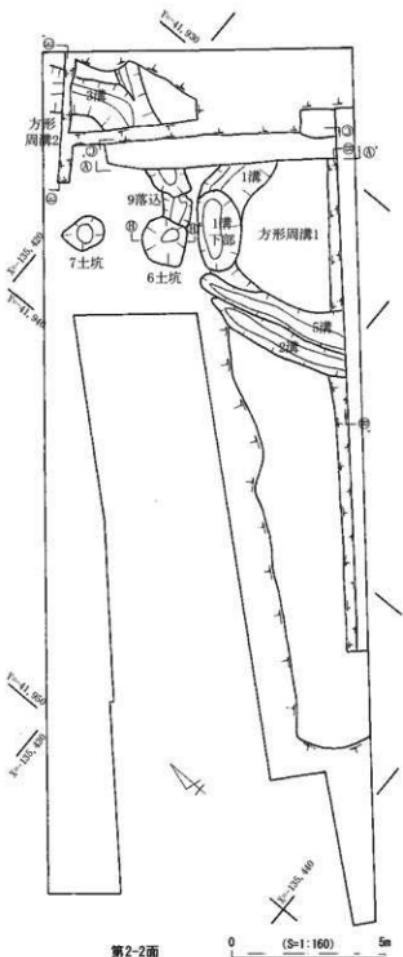


第1面



第2-1面

第39図 7区 第1面・第2-1面 平面図



第40図 7区 第2-2面・第3面 平面図

査区外となる。埋土は褐灰色砂であるが、溝底には薄く粘土が溜まる。

1溝と2溝とは幅も深さも近似しており、また埋土がほぼ同じであること、そしてそれぞれの溝の始まり部分が一致することから、本来は直角に曲がる同一溝であると考えられる。ただしそのコーナー部分は底面が他に比べて高くなっている、両溝は一見別の溝のように見えるが、これは両溝が継続して掘削されたのではなく、断続して掘削されたものであろう。掘削後の両溝は同一溝として機能し、最終的には同時に埋没したものと思われる。

この両溝の幅と深さ、そして溝の方向が直角に曲がること、この溝に囲まれた部分が小ブロックを含む土層で、溝の掘削土の盛土と考えられること、さらに後述するように時期が弥生時代後期であることから、これが方形周溝墓の周溝である可能性があるものと考えられる。ただし主体部については精査を繰り返したが見当たらず、また溝が全周するものかどうか不明であることもあって、方形周溝墓と断定するには未だ躊躇せざるを得ないところである。しかし方形周溝墓の可能性は否定できないと思われるので、ここでは方形周溝1と名付けることとした。1・2溝に囲まれたところが方形周溝1の盛土となる。

3溝（第42図）は調査区の北端部にあって、調査区外の北から南東方向に3.0m走ったところで東西に曲がり、1溝からは0.2mほどにまで近接する。検出長は5.0m。溝の幅は1.5m、深さは北端で0.5mだが、南に行くほど深くなり、最深で0.8mを測る。埋土は灰褐色粘土であるが、最下層には砂層が溜まる。この溝の続きが連絡地下道の擾乱部分に伸びることが判明したが、これについては次節で説明することとしたい。この溝は1・2溝と同じく大きく曲がるという特徴と、溝の幅や深さも類似することや、溝に囲まれた部分が溝の掘削土の盛土と考えられるところから、方形周溝墓の可能性がある。しかし溝が全周するものかどうか不明であり、またこの盛土部分を精査しながら下げていっても主体部は見つからなかった。方形周溝墓とは断定できないが、可能性のある遺構であるところから、方形周溝2と名付けた。3溝に囲まれた部分が方形周溝2の盛土となる。

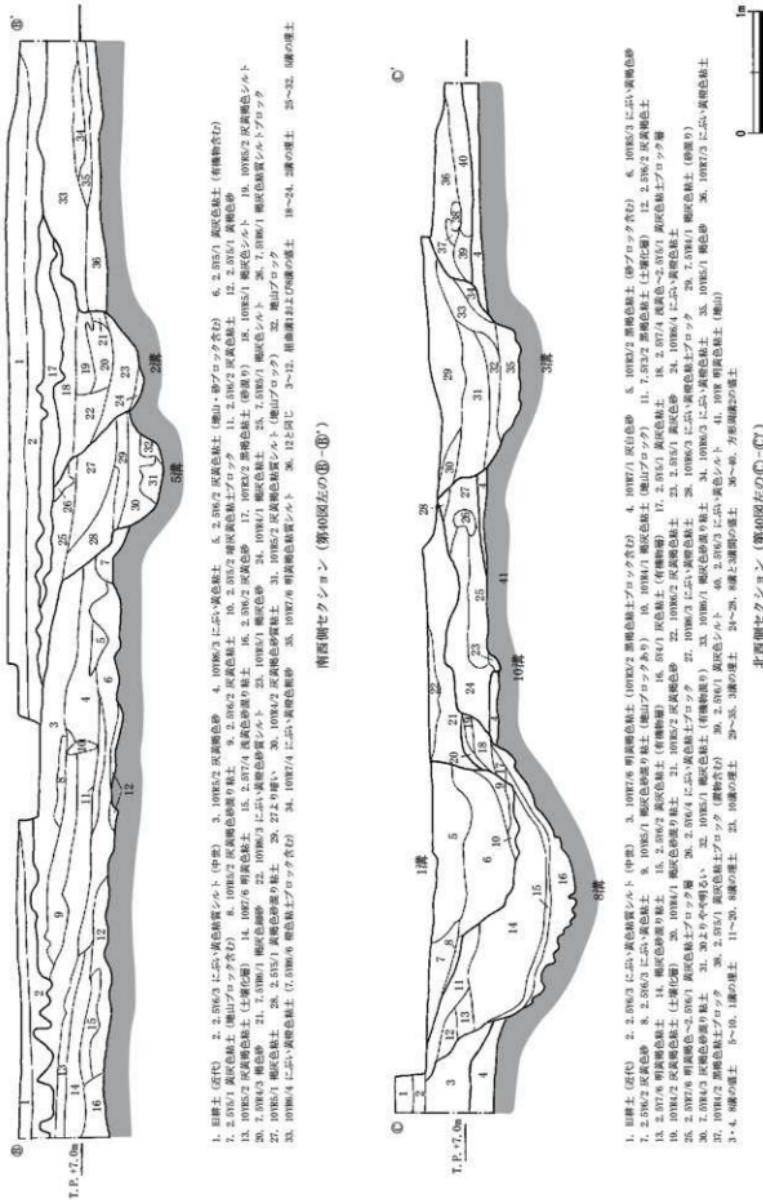
4溝は3溝が曲がるコーナーから北東に走る溝で、幅1.3m、深さ0.5m。近年の擾乱によって切られており、検出長は0.8mに過ぎない。埋土は3溝と同様で灰褐色粘土であるので、同一時期に埋没したものと思われる。4溝は方形周溝2から見ると周溝から外に逃げる溝となる。

以上のようにこの面において2基の方形周溝を検出したのだが、この二つが接する個所が連絡地下道によって擾乱されており、両者がどういう関係にあるのか判じがたい。同一時期に掘削されたのかどうか、両者並存していたのかどうか、等々の点が明確にできないのである。しかし両者に埋土の違いがあるところから、少なくとも最終的な埋没時期に違いがあることは確かであろう。

第2-2面（第40図左）

上述したように第2面には2時期あり、古い方の時期に相当する。また連絡地下道による擾乱部分でも遺構が残存することが判明し、この部分のコンクリートを除去して遺構検出を行なった。以上のように、第2面の古い時期と遺構と、擾乱を除去して新たに検出した遺構とを同時に調査を行なったので、これを「第2-2面」と称した。

5溝は2溝に切られる関係で、また2溝の東に0.7mほどずれて平行して走る溝である。5溝の検出幅は1.3mであるが、本来は1.8mほどになるものと思われる。深さ0.7m、検出長は5.0mで、溝の始まりである北端部2溝の北端部とほぼ同じ位置にある。以上により、5溝が埋没した後に、西に0.7mほどずらして2溝を掘り直したことになる。従って5溝と2溝は時期や位置は違うが、性格的には同じものとして掘られたものと推定できる。



第41図 7区 断面図

1溝下部は、1溝の埋土である砂層を除去すると、その西半部の溝底において長さ2.5mの範囲で更に落ち込むことが判明したために検出した遺構である。埋土が砂ではなく黒褐色土で、深さは1溝底より0.2mほどであり、また弥生土器の破片がある程度集中して出土した。1溝下部は、1溝が掘削される以前の溝の痕跡である可能性がある。つまり、上述の2溝が5溝を掘り直したのと同様に、1溝も以前の溝を掘り直したと言えるのではないかろうか。そうなれば、1溝下部は5溝に關係する溝の痕跡と言えるだろう。

3溝は第2-1面ですでに検出されたのであるが、連絡地下道の搅乱部分にその続きが残存することが判明したため、連絡地下道のコンクリート構造物を撤去した上で、それを検出したものである。これによって、3溝は検出長6.0mで止まることが判明した。しかしこれは、ここが搅乱部分であって、地山がかなり削平されたレベルで検出されたことから、3溝はこの部分で底面のレベルが高くなつて、近年に削平を受けて消滅したものと推定できる。

6土坑（第42図）は連絡地下道の搅乱内に残存していた遺構である。径1.5m、検出深1.3mを測るが、上述のように検出面がすでに搅乱で削平されているので、本来はもっと深い遺構である。埋土は下層が灰色・明オリーブ色・黄色粘土シルトのブロック層で、中層が黒褐色土と黄色土がレンズ状に幾層か重なる上層で、上層が灰褐色土である。遺構の位置が3溝の延長線上にあり、切り合ひ関係にあるはずだが、削平の故に不明と言わざるを得ない。また遺構は土坑としたが、井戸である可能性がある。

7土坑は6土坑の北西に1.2m離れて所在するもので、径1.1m、深さ0.9mを測る。埋土は黒褐色土。出土遺物はなかったので時期は不明であるが、埋土の状況からして周囲で検出した遺構と同様に、弥生時代後期と見てよいと思われる。この遺構も土坑としたが、井戸である可能性がある。

9落込は、3溝と6土坑の間に存在する遺構で、両方の遺構に切られるため全容は分からぬ。幅1.0mの溝と見ることも可能である。検出深0.3mほどで、埋土は灰黄褐色土。遺物の出土はなかった。当初は3溝の一部としていたのだが、埋土の違いと遺構底のレベルの違いがあったため、3溝に切られる遺構として扱った。

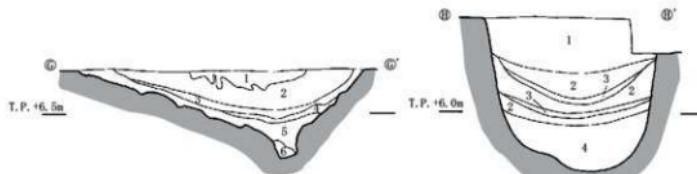
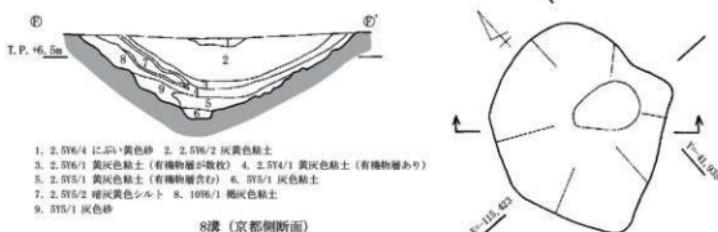
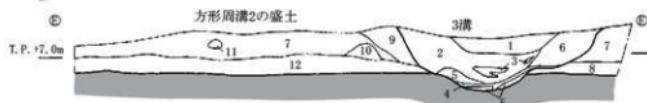
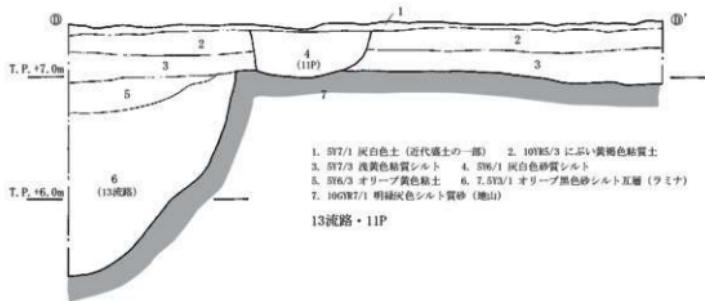
第3面（第40図右）

この面は地山面であるが、上述の方形周溝に伴う盛土を除去した面でもある。従つて、方形周溝1・2が造成されるより以前の遺構と言える。

8溝（第42図）は方形周溝1の盛土を除去して検出した溝である。方向は北東から南西に7.0m行ったところで西の方に曲がる。溝底もこの方向に従つて深くなっている。幅2.0～2.5m、深さ0.6mであるが、溝底には0.2m、深さ0.1～0.15mほどの細長い溝がさらに抉られるように走り、これを含めると深さは0.7mとなる。検出長は11.0mを測り、さらに伸びることは確実であるが、連絡地下道の南西隅に残るプライマリーな部分では観察されなかつた。埋土は下層に黒い有機物層が幾枚かを挟む灰黄褐色粘土、上層が黄橙色粘土で、最上層に灰黄色砂が被る状態であった。この溝の底面には凹凸が見られるが、これは人為的に掘削されたことを示すものである。そしてこの時の掘削土は溝の左右に沿つて置かれて盛土された。ところでこの8溝から出土遺物は出土しなかつたので、時期は不明と言わざるを得ないものである。

10溝は3溝の東に0.6m離れて位置に、地山面で検出された南北溝である。幅0.2m、深さ0.05m、検出長は3.0mで、やや弧状に走る。断面観察では8溝に伴う盛土を除去した段階で見える遺構である。遺構内から遺物の出土はなく、時期は不明である。溝としたが、ごく小さな自然流路の痕跡である可能性もある。

13流路（第42図）は調査区の南西隅で検出した自然流路である。その肩の一部を検出したのみで、



第 42 図 7 区 各遺構 断面・平面図

大きさも深さも不明である。埋土はオーリープ黒色砂シルト互層で、明瞭なラミナが観察された。遺物の出土はなかった。この遺構は位置的に8溝の延長上にあるが、埋土の違いから別遺構であることは明らかである。

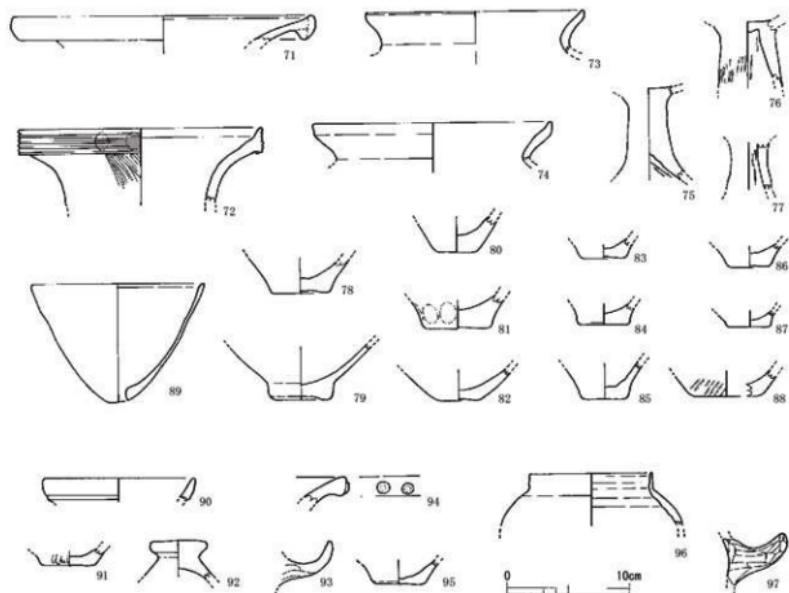
出土遺物（第43図）

71～89は方形周溝1に伴う出土遺物で、すべて弥生時代後期である。出土点数は多かったが、ほとんどが小片で、図化し得たのはこれだけであった。うち89は盛土上からの出土で、他は溝内からの出土である。71・72は壺の口縁部。71は磨耗の激しいものであるが、口縁部端において粘土の継ぎ目で剥がれているので、製作過程が判明する。72の口縁端面には5条の擬凹線の上に円形浮文の貼付痕跡がある。73・74は甕の口縁部。どちらも磨耗が激しく、調整は不明である。75～77は高环の脚部。磨耗が激しい。78～88は甕もしくは壺の底部。磨耗が激しく、表面が剥落しているものが多い。88には外面にタタキ目の痕跡が見られる。89は有孔鉢。方形周溝に伴う盛土上の端で出土した。器壁が薄く、また磨耗しているので接合が難しかったが、図面上で完形に復元することができた。

90～92は6土坑からの出土した弥生土器である。90は甕の口縁部。91は壺もしくは甕の底部。92は蓋である。

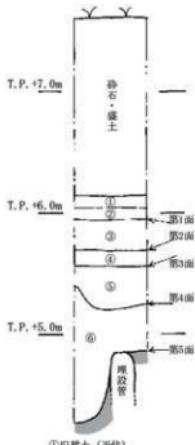
93～95は②層からの出土である。93は土師器の把手。94は弥生壺の口縁部で、端面に円形浮文が貼り付く。95は弥生土器の底部。

96～97は近現代の盛土・擾乱層からの出土である。96は須恵器の無頸壺で、8世紀後半か。97は土師器の把手。



第43図 7区 出土遺物

第10節 8区



- ①旧耕土 (近代)
- ②5t5/1 灰色砂質土 (近代)
- ③5t6/2 灰オリーブ色
砂質シルト (古代・中世)
- ④2. 5t5/2 暗灰黄色土
- ⑤2. 5t5/1 灰色粘質シルト

第44図 8区

断面模式図

断面模式図

第1～3面

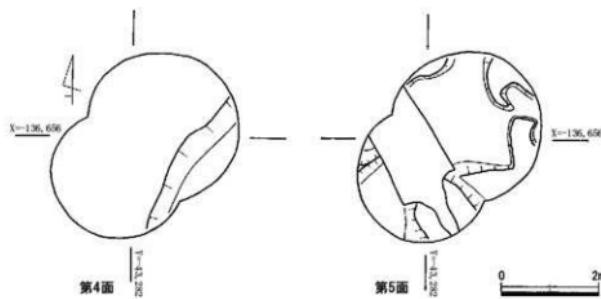
当調査区における現地表面のレベルはT.P.+7.6 mを測る。ここから1.5 mの厚さの近年の碎石および近現代の盛土層を除去すると①旧耕土層、さらにその下は②灰色砂質土層、③灰オリーブ砂質シルト層、④暗灰黄色土層、⑤灰色粘質シルト層となり、これを除去すると自然河川堆積物である⑥灰色～浅黄色砂層が現われ、この下が地山面である。地山面のレベルはT.P.+4.2～4.9 mである。

①②は明治期の耕作土で、これを除去した面を第1面として精査したが、遺構はなかった。③からは古代・中世の土器が若干出土している。これを除去した面を第2面としたが、遺構はなかった。④⑤では遺物の出土がなかったので時期は分からず。⑥を除去した面を第3面、⑥を除去した面を第4面とした。この第4面で落ち込みを検出した。第4面の基盤となる⑥は厚さ0.5～1.1 mの自然河川堆積層で、断面には発達したラミナが観察された。⑥を除去すると地山面が現われ、これを第5面とした。

遺構の概要

第1～3面

これらの面は中世以降の時期となる。精査を繰り返したが、遺構は見当たらなかった。



第45図 8区 各遺構面 平面図

第4面（第45図左）

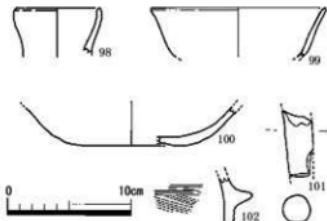
調査区の西端セクションにかかる場所で落込みを検出した。深さ0.2m、検出長3.0mほどの大きさである。遺物の出土はなく、時期不明と言わざるを得ない。また遺構として扱ったが、自然の落込みの可能性も排除できない。

第5面（第45図右）

自然河川の埋土である⑥層を除去した面で、河底面でもある。この面ではかなりの凹凸が検出されており、この河川がかなり複雑な流れをしていたものと思われる。河川からは遺物が出土しておらず、時期は不明と言わざるを得ない。また調査区が狭小なため、河川の底面を確認したに過ぎず、その規模や流れの方向等は明らかに出来るものではなかった。

出土遺物（第46図）

98～102は③層からの出土遺物である。98は須恵器で、平瓶の口縁部になるかと思われる。99は須恵器壊。100は須恵器で、壺の底部と思われる。以上98～100は古代。101は土師質の三足釜の脚。本来は瓦器であるが、焼成が甘くて土師質となったと思われる。102は土師器の羽釜の脚部。内面にハケ目の痕跡がある。以上の101・102は中世。



第46図 8区 出土遺物

第11節 9区

4-1区の南東に60m離れて設定した調査区である。ここはもともと周知の遺跡の範囲外であったが、土木工事が予定されたため、平成21年度に遺跡の存在の有無を確認するために行なった調査である。調査区の面積は40m²である。

調査の結果、遺構が発見され、また完形の白磁碗という貴重な遺物の出土も見たので、この場所を新規発見の遺跡として「吹田操車場遺跡C地点」と名付けられた。そして翌22年度に13区として、本調査を施工することとした。9区は13区の範囲内にあるので、その調査成果は13区と重なる。従つて当区の調査の報告は後述の13区に含めて行ないたい。

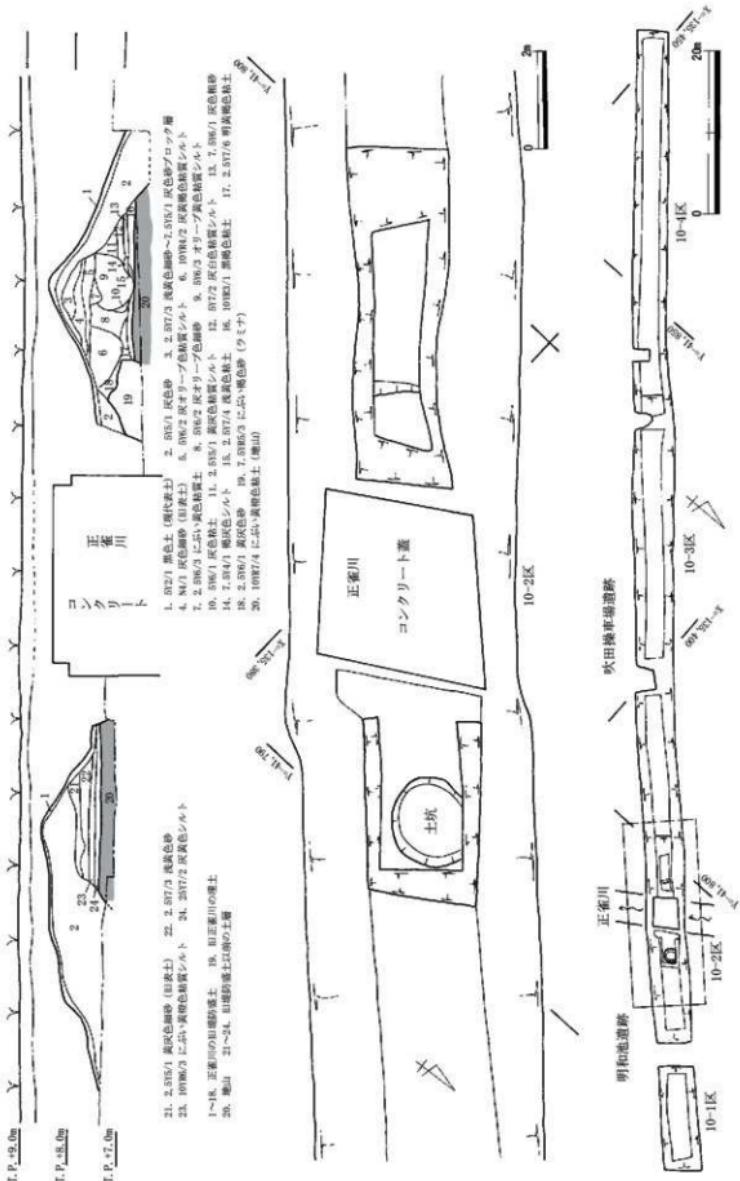
第12節 10区

6区より東に50mほど離れた地点に設定した延長140mの調査区である。この調査区は行政区域において吹田市と摂津市にまたがるもので、それに従って遺跡名も吹田操車場遺跡と明和池遺跡に分かれることになる。

調査区は4つに分割して施工したので、北東（京都側）から、10-1、2、3、4区と名付けた。10-2区の中央に正雀川がコンクリート暗渠内を流れおり、これより南西側が吹田操車場遺跡（吹田市）、北東側が明和池遺跡（摂津市）となる。

調査は本体工事に合わせての床付けとしたので、調査区内のほとんどにおいて地山まで到達せずに調査を終えることとなった。

調査区の現地表面のレベルはT.P.+9.0mで、床付けのレベルはT.P.+7.1～7.5mであるが、



第47図 10区 平面・断面図

10-2区の正雀川付近を除く全ての個所で、床付けは近現代の盛土・搅乱層内に止まることが判明した。床付け面でスティックを突き刺して推測するには、さらに1.0mほどの深さ（レベル的にはT.P.+6.0m前後）までは盛土・搅乱土と見てもよいと思われる。10-2区で確認された地山面レベルはT.P.+7.4mであるので、今回の調査区のほとんどは、近年の搅乱が地山をかなり掘り下げたものと推測できる。

10-2区の中央を走る正雀川の両岸に当たる部分には、堤防跡が埋没していることが確認された。左岸（京都側）では幅7.0m、高さ1.2mの土盛りの堤防である。堤防の天場のレベルはT.P.+8.5mである。この堤防の盛土内にプライマリー土層が残存しており、この部分では他調査区と同様の発掘調査が可能であった。これによれば地表下-1.1m、埋没堤防の頂上からは0.7mの深さで旧表土、さらに浅黄色土層、にぶい黄色粘質シルト層、灰黄色シルト層となって、その下は地山面である。各層からの出土遺物はほとんどなく、時期は分からぬ。地山面のレベルはT.P.+7.3mを測る。遺構としては、地山の一枚上の灰黄色シルト層を切る土坑を検出した。径1.8mで、埋土は灰色砂。この遺構の深さは確認できなかったが、井戸である可能性がある。出土遺物はなく、時期は不明である。

右岸（大阪側）では幅6.0mの堤防であるが、左岸側の堤防とは違ってプライマリー土層が残っていなかった。堤防は地山面を0.5mほど削平したうえで、1.7mほどの盛土をしたものである。その際に、旧の正雀川の埋土である砂層を切っており、平面状では段状の遺構として検出された。堤防は補強のためにかなりの土を入れ替えるように盛土したものと思われる。セクションでは盛土工事をした際のプロック土が観察された。堤防の天場のレベルは、T.P.+8.5mで、左岸側と変わらない。堤防の盛土内からは遺物が全く出土せず、時期は不明と言わざるを得ない。

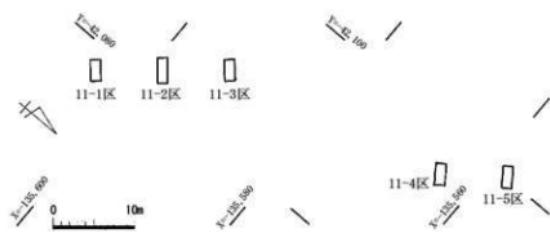
第13節 11-1～5区

11-1～5区は、4-1～4区より南西へ80m離れた場所に、50mの範囲で北西～南東方向に並んで5ヶ所設定した調査区である。うち11-1～3区の三ヶ所は7m間隔、さらに11-4・5区の2ヶ所はそこから25m離れて7m間隔で設定した。各調査区とも1.2m×2.6m、面積にして3m²ほどの狭小な調査区である。また湧水の激しい所であり、そして深さ0.5mごとに掘削して土留めを設置することを繰り返しながらの調査であったため難渋したが、各遺構面の精査と遺物の採集および断面図の作成を行ない、発掘調査の目的を達することができた。

各調査区の概要

11-1区

当調査区の現地表面のレベルはT.P.+8.5mを測る。ここから1.8mの厚さの①盛土層を除去すると、②旧耕土層が露出し、その下は④にぶい黄橙色粘質シルト。④層はこの調査区では遺物はなかったが、古代の土層に相当すると思



第48図 11-1～5区 調査区位置図

われる。その下は⑤灰色粘土と⑥灰色砂の互層のなかに⑦オリーブ黒色～灰色粘土（植物遺体層）が挟まる土層で、自然河川堆積物である。この河川からは出土遺物はなく、時期は不明である。

この調査区では各面で精査を行なったが、遺構は検出されなかった。またT.P.+5.4mまで掘削したが、地山には到達しなかった。

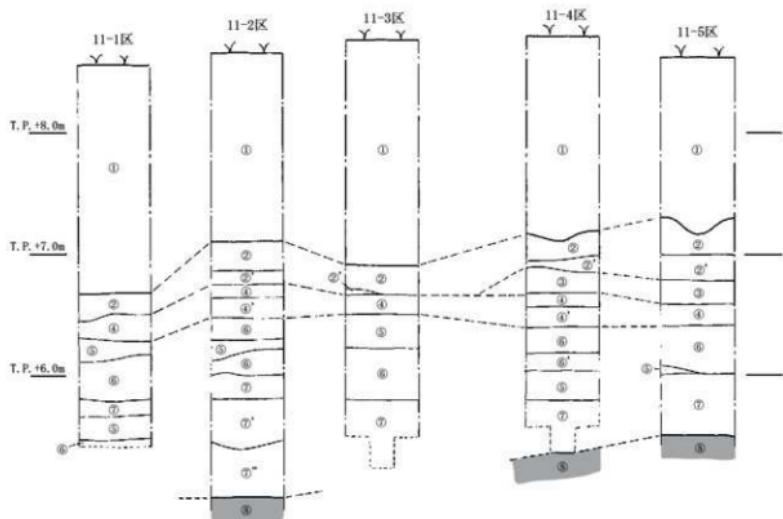
11-2区

当調査区の現地表面のレベルはT.P.+8.6mを測る。ここから1.5mの厚さの①盛土層を除去すると、②旧耕土層およびそれに伴う②'層、その下は④にぶい黄橙色粘質シルトと④'灰黄色シルト質砂となる。この④④'層が古代に相当すると思われる。その下は⑥灰色砂と⑤灰色粘土、さらに⑦オリーブ黒色～灰色粘土、⑦'灰色粘土、⑦''黃灰色粘土層で、この⑦⑦'⑦''層はそれぞれ植物遺体を多く含むもので、自然河川堆積物である。この土層から読み取れることは、この場所では自然河川内でも滞水した状況であったことを表すものであろう。この河川からは出土遺物はなく、時期は不明である。

この調査区でも各面で精査を行なったが、遺構は検出されなかった。またT.P.+5.0mまで掘削したところで地山が現われ、河川の底面を確認した。

11-3区

当調査区の現地表面のレベルはT.P.+8.7mを測る。ここから1.8mの厚さの①盛土層を除去すると、②旧耕土層およびそれに伴う②'層、その下は④にぶい黄橙色粘質シルト。この④層から遺物が出土している。古代の土層に相当すると思われる。その下は⑤灰色粘土、⑥灰色砂、⑦オリーブ黒色～



○盛土（近・現代） ②旧耕土（近代） ②'旧耕土の一層（古代） ③SY6/3 オリーブ黄色粘土（中世） ④2.5Y6/3 にぶい黄色シルト質粘土（古代）
 ④'2.5Y6/2 黄灰色シルト質砂（古代） ⑤2.5Y5/1 灰色粘土 ⑥SY6/1 灰色砂 ⑥'6に鉄分沈着
 ⑦7.8Y3/1 オリーブ黒色～8Y4/1 灰色粘土（植物遺体多い） ⑦'7.8Y5/1 灰色粘土（植物遺体多い） ⑦''2.5Y6/1 黄灰色粘土（植物遺体含む）
 ⑨2.5G7/1 明オリーブ灰色粘土（地山）

第49図 11-1～5区 断面模式図

灰色粘土（植物遺体層）となる。⑤⑥⑦層は自然河川堆積物であるが、この河川からは出土遺物ではなく、時期は不明である。

この調査区でも各面で精査を行なったが、遺構は検出されなかった。またT.P.+5.2mまで掘削したが、地山には到達しなかった。

11-4 区

当調査区の現地表面のレベルはT.P.+8.8mを測る。ここから1.6mの厚さの①盛土層を除去すると、②旧耕土層およびそれに伴う②'層、その下は③オリーブ黄色粘土、④にぶい黄橙色粘質シルト、④'灰黄色シルト質砂となる。③層からは瓦器・土師器の小片が出土し、④層からは古代の土師器・須恵器、④'層からは土師器・須恵器以外に製塙土器が出土した。③層は中世、④④'は古代の土層に相当する。その下は⑥灰色砂、⑤灰色粘土、⑦オリーブ黒色～灰色粘土（植物遺体層）となる。⑤⑥⑦は自然河川堆積物であり、これを除去したT.P.+5.3mのレベルで地山となり、河川の底面を確認した。河川からは遺物は出土しなかった。

この調査区でも各面で精査を行なったが、遺構は検出されなかった。

11-5 区

当調査区の現地表面のレベルはT.P.+8.6mを測る。ここから1.3mの厚さの①盛土層を除去すると、②旧耕土層およびそれに伴う②'層、その下は③オリーブ黄色粘土、④にぶい黄橙色粘質シルト、④'灰黄色シルト質砂となる。③層からは瓦器・土師器の細片が出土し、④層からは古代の土師器・須恵器の細片が出土した。③層は中世、④は古代の土層に相当する。その下は⑥灰色砂、⑤灰色粘土、⑦オリーブ黒色～灰色粘土（植物遺体層）となる。⑤⑥⑦は自然河川堆積物であり、これを除去したT.P.+5.5mのレベルで地山となり、河川の底面を確認した。河川からは遺物は出土しなかった。

この調査区でも各面で精査を行なったが、遺構は検出されなかった。

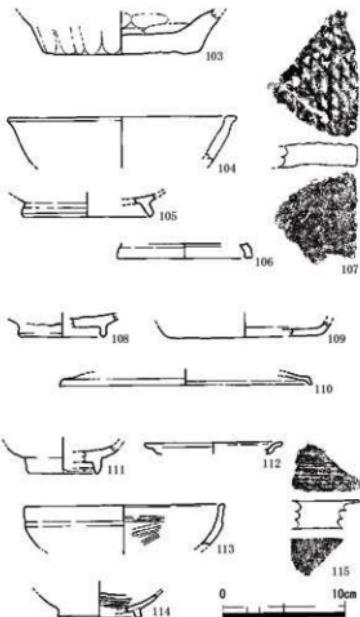
出土遺物（第50図）

103は、11-2区の近代盛土層から出土した弥生の底部。内外面に指頭圧痕が残る。

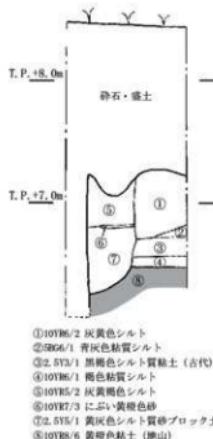
104～107は11-3区の④層からの出土遺物である。104は須恵器鉢の口縁部。105は灰釉陶器の高台部。内面に釉薬の痕跡が残る。106は須恵器の高台である。この破片の上部は方形透孔の下面となる。円面鏡の脚部の可能性がある。107は土師質の平瓦片。外面は斜め格子タタキ目、内面は布目。

108～110は11-4区の④層からの出土遺物である。108は灰釉陶器碗の底部。109は土師器皿。110は須恵器環蓋の口縁端部。以上は8～9世紀頃と思われる。

111・112は11-5区の②層から出土した。111

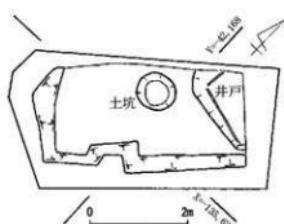


第50図 11区 出土遺物



第 51 図 11-6 区

断面模式図



第 52 図 11-6 区 平面図

は近世～近代の陶器椀底部。112 はての字口縁の土師器小皿で 12 世紀以前に遡る。113～115 は同区の③あるいは④層から出土した。113 は瓦器椀であるが、表面の炭素吸着が剥落している。内面のミガキがかろうじて見える。114 は瓦器椀の底部。内面底にミガキがあるが、外面にはミガキはない。115 は平瓦片。外面は繩タタキ目、内面は布目。

第 14 節 11-6 区

当調査区は 11-2 区より南西へ 90 m 離れ、C1・2 区（2006・7 年度発掘調査）の西に隣接する位置に設定した調査区である。当区は前述の 11-1～5 区とはかなり離れた位置にあり、また調査時期も違うのであるが、調査に至る原因が同じ特殊電柱建設であるため、それに伴う一連の調査として「11-6 区」と名付けた。面積は 8 m² である。

当区の現地表面のレベルは T.P. + 8.4 m を測る。当区の大半は、近代あるいはそれ以降の時期の井戸等によって搅乱されており、南西半部のセクションで T.P. + 6.7 m のレベルで遺物包含層が確認された。この層から出土した遺物は土師器・弥生土器の細片であるが、弥生土器は磨耗しており、後世の混入と思われる。この遺物包含層の時期は、隣接の C1・2 区の調査成果から一応古代としておきたい。T.P. + 6.45 m のレベルで地山となる。

井戸と土坑以外に遺構は確認されなかった。井戸は四角い木枠を有し、近年の客土で埋められており、最近に廃棄された井戸と判明した。また土坑は素掘りの井戸の可能性もあるが、埋土の状況からかなり新しい時期のものと考えてよいものである。

第 15 節 12 区

4-3 区から南西に 30 m、11-3 区からは 50 m 北東に離れた位置に設定した調査区である。現行地下道に繋がる職員通路建設に伴う発掘調査で、地下道の位置および地下障害物確認のための調査区を「12-1 区」、職員通路本体工事に先行して実施した発掘調査を「12-2 区」とした。

12-1 区

近代に建設された地下道の天井部、およびこれに平行して設置されたコンクリート受台を確認した。地下道の天井部は地表下 - 3.5 m の深さにあり、またコンクリート受台の上面は G.L. - 1.4 m の深さにあった。受台の厚さは 0.9 m ほどで、これを除去した面は T.P. + 6.7 m のレベルとなり、遺構の存在の可能性を考えることができた。

12-2 区

当区は、第 12-1 区とはコンクリート受台部で重なるように設定された調査区である。

基本層序（第 53 図）

現地表面のレベルは T.P. + 9.1 m で、そこから 1.5 m の深さまでは吹田操車場に隣接する盛土・擾乱土である。これを除去した T.P. + 7.5 m のレベルで操車場造成直前の①旧耕作土が露出する。この①層およびそれに伴う②床土層を除去した面を「第 1 面」として小ピット群を検出した。第 1 面のレベルは T.P. + 7.2 m である。この面の下層からは、基盤層となる自然河川の堆積砂を確認した。コンクリート受台を除去した T.P. + 6.7 m の面でこの自然河川の肩を検出し、この面を「第 2 面」とした。この河川の砂層を除去した川底面は T.P. + 5.1 m のレベルにある。

遺構の概要

第 1 面（第 55 図上）

この面では小ピット 13 個を検出した。

1 P は調査区の北西部に所在するもので、一部が側溝にかかる。径 0.4 m、深さ 0.15 m。埋土は黒褐色シルトである。

2 P は調査区中央の西寄りに所在するもので、1 P から南西に 3.8 m 離れた位置にある。径 0.3 m、深さ 0.1 m。埋土は浅黄色砂である。

3 P は 2 P の南に接する位置にあるもので、径 0.3 m、深さ 0.2 m。埋土は褐灰色粘質シルトである。

4 P は 3 P の東へ 0.9 m 離れて所在する。径 0.2 m、深さ 0.15 m。埋土はぶい褐色シルトである。

5 P は 3 P の西へ 0.4 m 離れて所在する。0.3 m × 0.5 m の楕円形を呈し、深さ 0.2 m。埋土は黄灰色砂と灰褐色砂である。

6 P は 4 P の南へ 0.7 m 離れて所在する。径 0.2 m、深さ 0.2 m。埋土は褐灰色シルトである。

8 P は 6 P の南へ 1.3 m 離れて所在する。径 0.15 m、深さ 0.15 m。埋土は褐灰色シルトである。

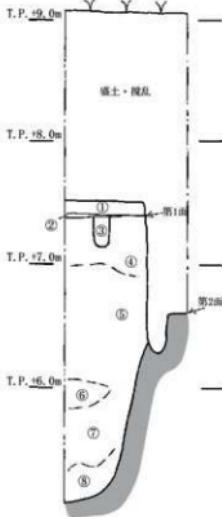
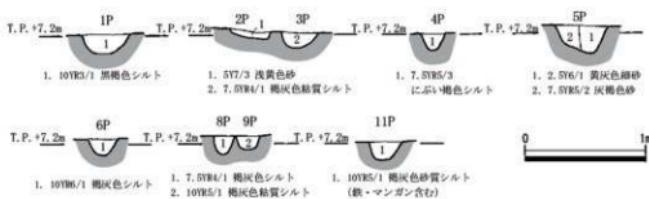
9 P は 8 P の南西に接している。径 0.15 m、深さ 0.1 m。埋土は褐灰色粘質シルトである。

11 P は 1 P の南に 1.8 m 離れて所在する。径 0.25 m、深さ 0.15 m。埋土は褐灰色砂質シルトである。この 11 P に接して径 0.2 m の小ピットがあるが、これは近年のものと思われる。

12 P は調査区南東側セクションにかかるもので、正確な規模は分からぬが、径 0.35 m、深さ 0.3 m ほどになろう。11 P からは 2.0 m 離れた位置になる。

以上の小ピット

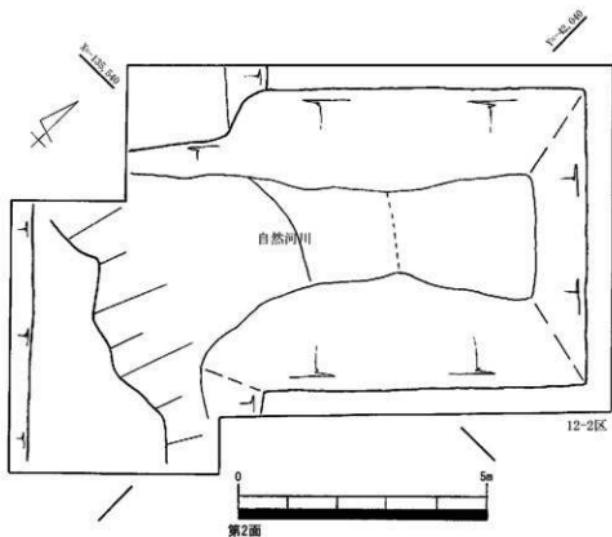
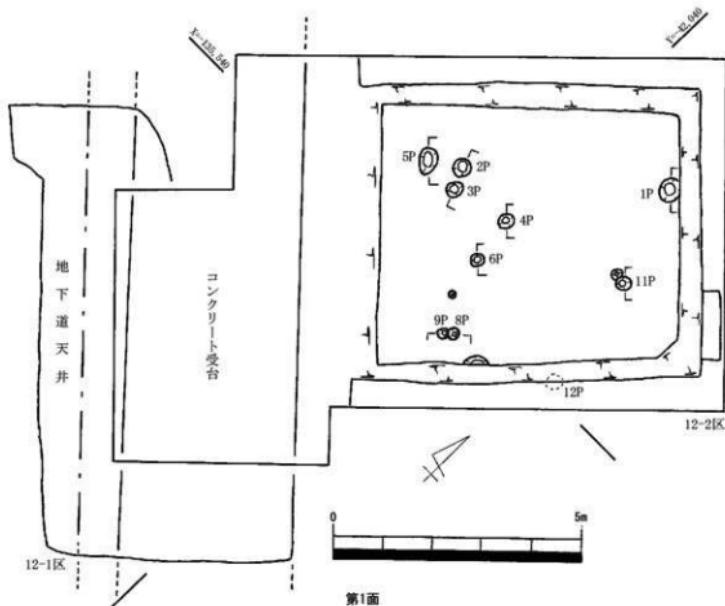
群のうち、1・11・
12 P はほぼ等間
隔に並び、掘立柱
建物の可能性は考
えられないことも
ないが、埋土や深
さの違いがあるの



第 53 図 12 区

断面模式図

第 54 図 12 区 各遺構 断面図



第55図 12区 各造構面 平面図

で、今のところその可能性を否定しておきたい。

第2面（第55図下）

第1面の基盤となる砂層は自然河川が堆積したもので、灰褐色～淡黄色を呈する。この河川の範囲は12-2区のほぼ全体を占めるもので、調査区の南端部でその肩の一部を検出したのみであった。従つて川幅は不明と言わざるを得ない。T.P.+5.1mのレベルで川底となり、川の深さは第1面のレベルから測ると2.3mとなる。河川の埋土である砂層は大雑把に粗砂と細砂、ラミナの発達した層とそうでない層、鉄分等が沈着する層とそうでない層等があるが、これらの層は総体的に時間的経過とともに形成した堆積層であるので、分層は難しい。この河川から遺物の出土は全くなかった。

第16節 13・9区

当調査区は、元々は遺跡の範囲外であったが、平成21年度に「9区」と名付けて試掘調査を実施したところ、遺構・遺物が検出されたので、府教委が「吹田操車場遺跡C地点」という新たな遺跡発見の手続きをとった上で、平成22年度に当本調査を実施したものである。13区の調査面積は9区も含めて360m²である。

当区の土地は近年までは銀行等建物があったとされる場所で、この建物の建設時や撤去時に地下の遺跡に大きな影響を与えていた。そのためにコンクリート構造物や埋設管、各種廃棄物等による搅乱が激しいものであったが、発掘調査の結果、下記のような成果を得ることができた。

基本層序（第56図）

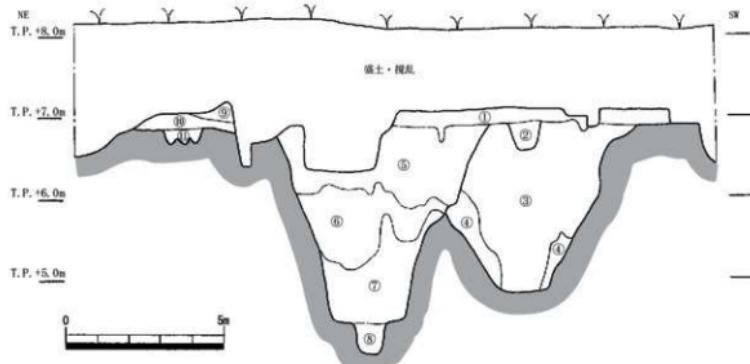
現地表面から1.0～1.2mの深さまでは近年の盛土・搅乱土である。これを除去したT.P.+7.1mのレベルで①旧耕作土が露呈する。この調査区は操車場敷地の範囲外にあるので、旧耕作土は他の調査区のように操車場造成直前ではなく、もっと時期の新しいものになると考えられる。旧耕作土を除去したT.P.+6.9mのレベルで遺構面となる。なお調査区の南西側の狭い範囲では、旧耕作土と遺構面との間に、中世の遺物を含む灰黄褐色土層（第56図下の③層）が挟まる。

今回の調査における遺構面は、地山と自然河川堆積砂層（第56図上の③④層、第56図下の②③④層）を基盤とする面であり、この面で当初に検出した遺構面を「第1面」とした。さらに、この面では自然河川の肩も見えたので、第1面検出後にこの自然河川を掘削して調査区全体で地山面を露出させた。これを「第1-2面」とした。従つて第1面と第1-2面とは、層位的あるいはレベル的には同一遺構面となる。

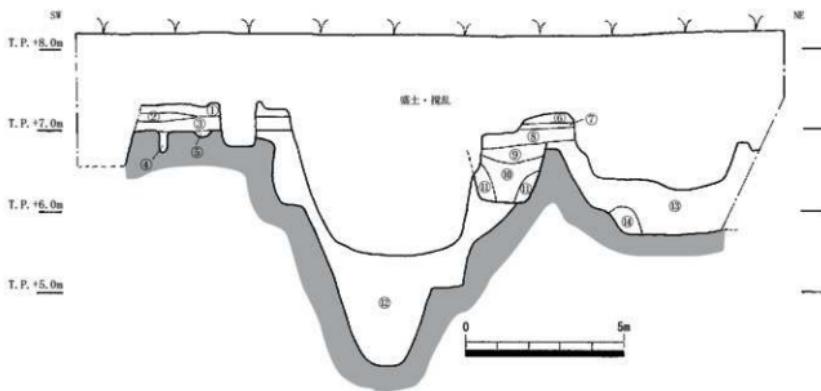
遺構の概要

第1面（第57・59図）

1 土壙墓は、確認調査（9区）の際に完形の白磁碗が出土したことにより発見された中世の土壙墓である。その際にはセクションにその一部がかかる状態だけでの検出であったが、13区の本調査によつて全体が明らかにすることができた。この土壙墓は13区の南部にあって、1.6m前後×1.2mの長方形を呈し、深さ0.25mの規模である。長軸の方向は北西—南東である。土壙墓の底面には板の木目の痕跡があり、墓の底に板が敷かれていたものと推定できる。9区のセクションには鉄器状のものが引っかかっており、刀子ではないかと思われたのであるが、13区の調査では鉄の痕跡が観察されたのみであった。何らかの鉄片であるが、それ以上のことは不明である。また人骨らしきものも出土したが、今のところ人骨か否か不明である。遺物としては他に土師器・瓦器の細片が出土したが、これは土壙墓の

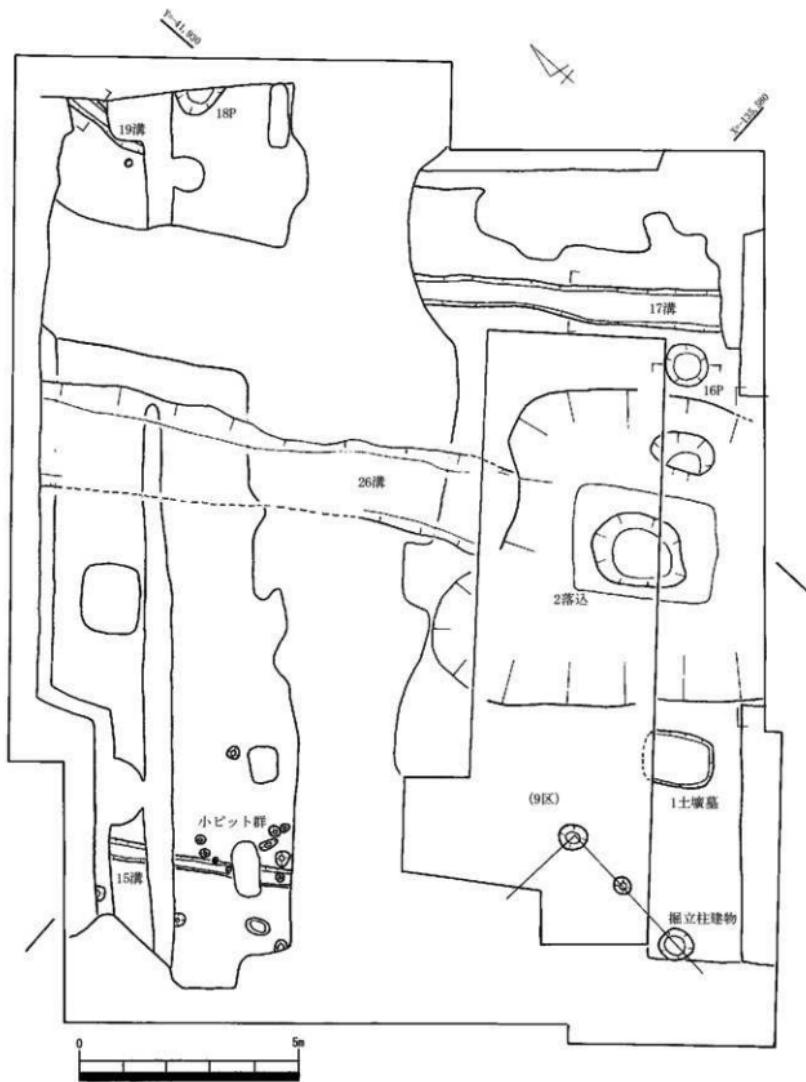


南東側セクション

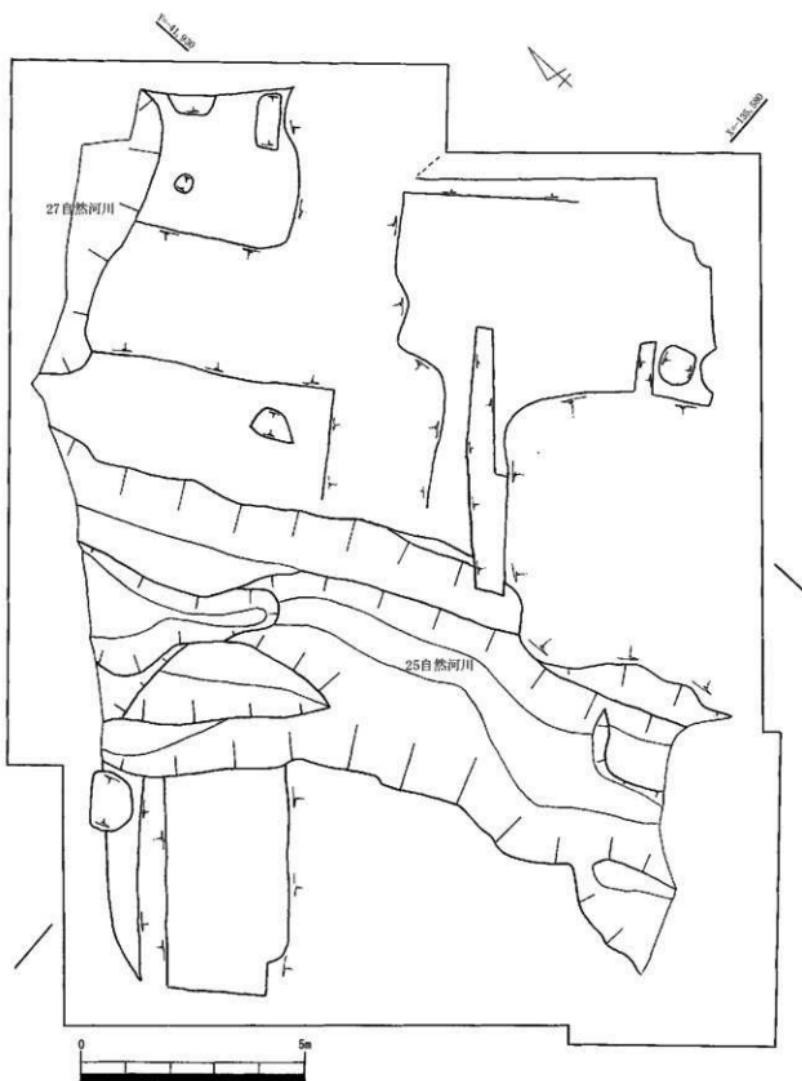


北西側セクション

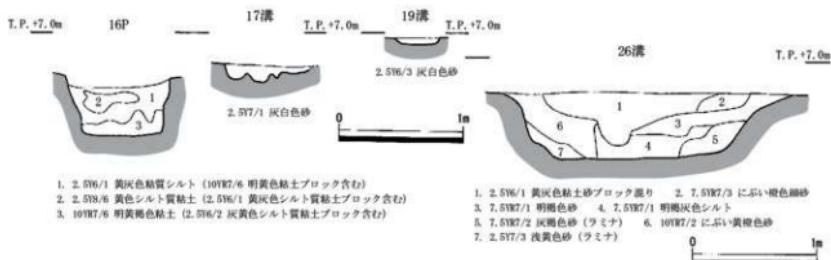
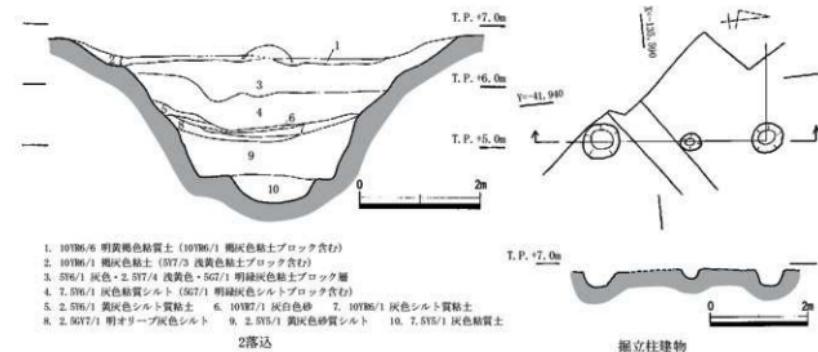
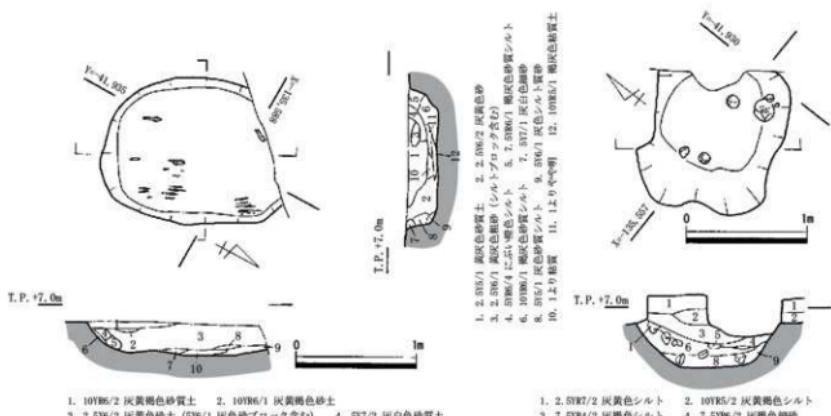
第 56 図 13 区 断面図



第57図 13区 第1面 平面図



第58図 13区 第1-2面 平面図



第 59 図 13 区 各遺構 平面・断面図

埋土に混入したものと思われる。結局この土壙墓には、完形の白磁碗以外に特記すべき遺物はなかったと言わざるを得ない。時期は 11 世紀末～12 世紀初め前後であろう。

2 落込は、13 区の南東側中央で検出した遺構である。9 区では幅 7.0 m、深さ 2.4 m、遺構の壁面の傾斜がかなり急なものとして検出されたので、堀削の一部ではないかと思われたのであったが、13 区の調査によって堀削ではなく、上面が 7.0 m × 7.0 m に西端部分が膨らむ形状を呈し、底面が 3.2 m × 2.4 m の長方形、その高低差が 2.4 m、そしてこの底面には更に 2.0 m × 1.5 m、深さ 0.4 m の土坑が掘られる遺構と判明した。従ってこの遺構の深さは 2.8 m となる。埋土にはブロック土が多く混入しており、また断面にレンズ状粘土堆積が見られないことから、この遺構は水を溜めることなく、短時間のうちに人力で埋められたものであろうと推定される。この遺構の性格については堀削でないことは判明した。他に井戸ではないかとも考えられるが、井戸枠がなく、また遺構の肩から底までの斜面が高低差 2.4 m、水平距離 2.0 m という勾配であることから水を汲むことが困難と思われる所以、井戸と考えることは難しい。このようにこの遺構の性格については不明と言わざるを得ないので、今のところ「落込」と称した。遺物としては中世あるいはそれ以前の土器片が出土しており、近世以降の遺物はなかったので、この 2 落込の時期は中世としておきたい。なおこの 2 落込内に打ち込まれた H 鋼の擾乱部分から石臼が出土した。出土状況からこの石臼は、この 2 落込の遺物の可能性を考えることができる。

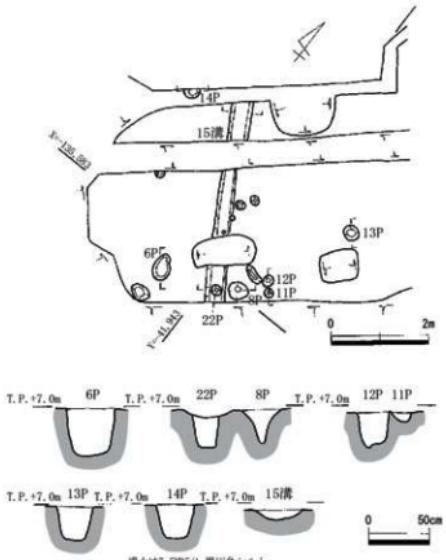
掘立柱建物は、当調査区南端部で、径 0.4 ~ 0.8 m、深さ 0.1 ~ 0.3 m の 3 個の小ビットが 1.7 m の等間隔に並ぶものである。この遺構は、確認調査（9 区）の際に 2 P、4 P の二基を検出し、さらに本調査（13 区）でこれに続く 3 P を検出したものである。従って発掘調査現場作業時には掘立柱建物とは気付かず、現場作業終了後に図面を接合することによって、この 3 個の小ビットが掘立柱建物の一部

であることを確認できた。方向は N - 4° - E を測る。土器・須恵器の細片がわずかに出土したのみで、時代は古代ではないかと推測できる程度である。方向がほとんど同じ遺構が当調査区北端部の 19 溝（後述）があるので、取りあえず 10 世紀としておきたい。

16 P は、2 落込より東に 0.5 m 離れて所在する。径 0.9 m、深さ 0.5 m。埋土にはブロック土が多く混入しており、人為的に短期間で埋められたことを示す。遺物は摩滅した土器の細片が出土したが、時期は不明。埋土の様相が 2 落込と似るので、これと同一時期としておきたい。

18 P は、当調査区の北端に位置する土坑である。1.0 × 1.2 m 以上、深さ 0.5 m の規模で、埋土は黄灰色～灰褐色シルトである。完形の須恵器環や土器碗、高杯などが出土した。7 世紀前半の所産である。

17 溝は、当調査区東側部において北西～南



第 60 図 13 区 15 溝・小ビット群 実測図

東方向に走る溝である。幅 0.6 ~ 0.8 m、深さ 0.1 m、検出長 7.5 m、方向は N - 35° - W である。遺構の底面には凹凸が見られる。これは溝を掘削した際の道具先の痕跡かと思われる。埋土は灰白色砂。土師器・須恵器・弥生土器の細片がまとまった量で出土したが、ほとんどが摩滅した状態で、時期は分かりがたいが、7世紀頃と思われる。

19 溝は、当調査区の北端部において南北に走る溝である。幅 0.4 m、深さ 0.1 m、検出長 2.4 m、方向は N - 5° - W である。埋土は灰黄色砂。土師器・須恵器・弥生土器の細片が出土したが、黒色土器と思われる遺物が含まれていたので、時期は 10 世紀としておきたい。17 溝とは埋土の様相がほぼ同じだが、時期だけでなく方向や規模が違うので、別遺構と見るべきものである。19 溝は前述の掘立柱建物とは 18 m ほど離れているが、方向がほぼ同じであることに注目される。

15 溝（第 60 図）は、当調査区の西端に位置する溝である。幅 0.4 m、深さ 0.1 m、検出長 4.2 m、方向 N - 35° - W を測る。埋土は褐灰色粘質土で、土師器・黒色土器片が出土した。後述の 26 溝と関係する遺構と思われるところから、時期は 11 世紀末～12 世紀初め頃となろう。

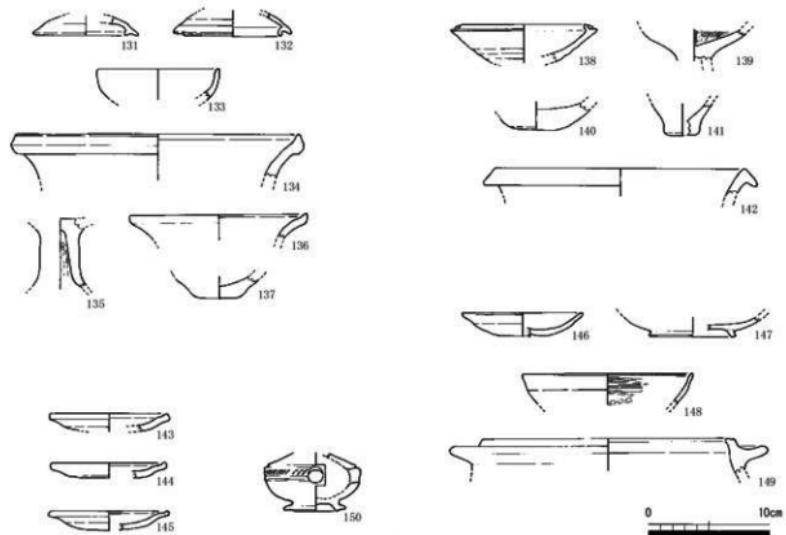
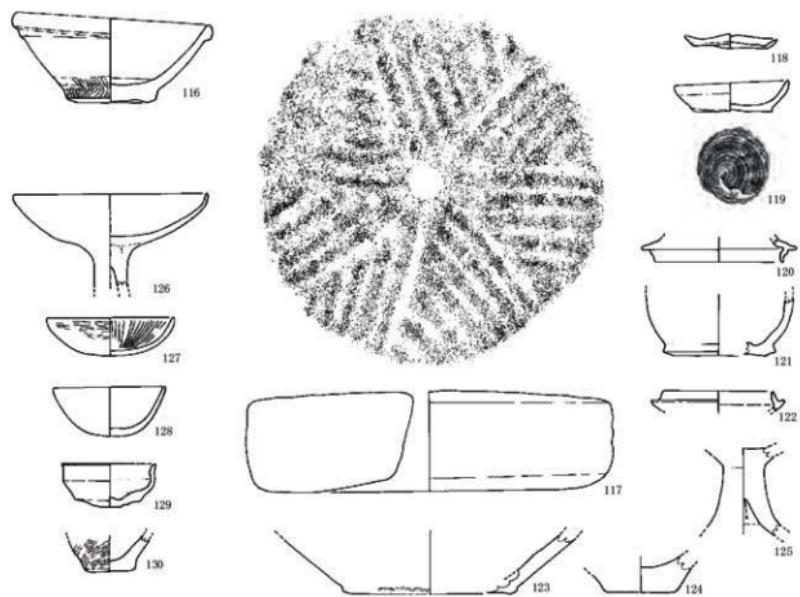
26 溝は、当調査区の中央を北西～南東方向に走る溝である。この遺構は後述の 25 自然河川と同じ方向が重なり合い、しかも埋土が類似していたために、当初同一遺構と考えて第 1 - 2 面において検出作業を行なったのであるが、発掘調査の過程で別遺構と判明したため、遺構番号を別にとって「26 - 溝」とした。さらに遺物整理作業の結果、1 土壙墓と時期がほぼ同じであることが判明したので、本書ではこの第 1 面の遺構として扱った。この溝は幅 2.2 m、深さ 0.5 m、検出長 11.0 m、方向 N - 33° - W を測る。埋土は灰白色～灰黄色砂で、ラミナが観察される。南東半部にある 2 落込に切られ、北西半部では 25 自然河川を切る関係になる。遺物としては土師器・須恵器・瓦器が出土しており、時期は 11 世紀末～12 世紀初め前後と思われる。これと同一時期の 15 溝とは 9 m 離れて平行すること、およびその方向が 1 土壙墓の長軸方向に大体一致することに注目される。

小ピット群（第 60 図）は当調査区の西端部において、15 溝の周囲に 15 個ほどの小ピットを検出した。これら的小ピット群は並ぶ様子ではなく、単に散在している様相を示している。径 0.1 ~ 0.5 m、深さ 0.1 ~ 0.3 m、埋土は褐灰色粘質シルトである。小ピット群のうちの 22 P からは土師器・黒色土器片が出土しており、時期は 10 世紀前後と思われる。これら的小ピット群のうちの幾つかは、15 溝とは切られる関係にある。

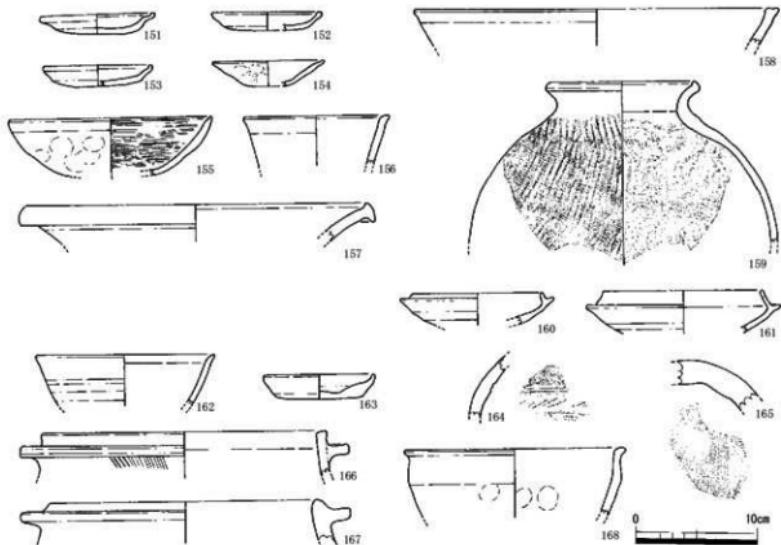
第 1 - 2 面（第 58 図）

25 自然河川は、当調査区の中央を北西～南東方向に流れる河川である。幅 6.0 ~ 7.0 m、深さ 2.1 ~ 2.5 m を測る。埋土の砂層にはラミナが発達している。川の底面の一部にかなりの凹凸がみられるので、この川の流水は複雑な流れで地面を下刻していくものと思われる。河底面のレベルは T . P . + 4.1 m ~ 4.8 m を測る。この河川からは出土遺物は全くなく、時期は不明である。人間が活動するより以前の時期になる可能性も考えられる。

27 自然河川は、当調査区の北端を北東～南西方向に流れる河川である。調査ではその肩の一部を検出したのみで、川底まで掘削することができなかった。そのため規模や深さは不明と言わざるを得ない。この河川の最上層から 7 世紀の須恵器が 1 点出土し、これが河川の最終埋没時期を示すものなろう。この河川が 7 世紀でも浅い落込みとなって残存し、遺物が入り込んだものかと思われる。他に遺物は出土しなかった。



第 61 図 13 区 出土遺物 (1)



第 62 図 13 区 出土遺物 (2)

出土遺物 (第 60・61 図)

116 は 1 土壙墓から出土した完形の中国製白磁碗。全体的に形が少し歪んでおり、口縁のレベルが一方に少し片寄る。底部は削り出し高台。外面下部から高台にかけて、荒いヘラ削り痕が模様状に残る。11 世紀末～12 世紀初頃のものと思われる。

117～125 は 2 落込から出土した遺物である。117 は花崗岩製の研き臼で、下臼に相当する。臼面には七分画で目が刻まれる。奇数の分画は珍しい。各分画の大きさが不揃いなので、当初より意図して奇数分画に刻んだものか疑問が残る。118 は土師器小皿。かなり歪んだ製品である。119 は底面に糸切り痕を残す土師器小皿。120 は須恵器の蓋の端部、121 は須恵器壺の底部、122 は須恵器壺の口縁部、123 は須恵器鉢の底部、124 は弥生土器の底部、125 は弥生土器の高环。以上のように、2 落込は弥生時代から中世に至るまでのかなり時期幅のある遺物が出土した。

126～130 は 18 P から出土した遺物である。126 は土師器高环。磨耗激しく表面剥落のため、本来あったはずのミガキが見えない。127 は土師器環で、磨耗しているが一部に剥落していない部分が残存し、調整痕が観察できる。内面に放射状暗文、外面に横方向のミガキ。128 も土師器環で、一部に剥落していない部分があるが、それを見る限りミガキや暗文はないと思われる。129 は須恵器。底外面にヘラ切り痕が残り、未調整である。以上は 7 世紀の第 2 四半期頃の所産と思われる。130 は弥生時代後期の甕の底部で、混入であることは明らかである。

131～137 は 17 溝から出土した遺物である。131・132 は須恵器環蓋、133 は須恵器環、134 は須恵器壺の口縁部。135 は弥生土器高环、136 は弥生土器甕の口縁部、137 は弥生土器甕の底部。

138～142 は 19 溝から出土した遺物である。138 は須恵器で、环か蓋か迷うところだが、一応环

と考えた。139は土師器高坏、140・141は弥生壺の底部。142は弥生壺の口縁部だが、磨耗激しく調整不明。

143～145は15溝から出土した遺物である。ての字口縁の土師器小皿で、時期は11世紀末頃～12世紀初頃と思われる。

146～149は15溝に切られる22Pから出土した遺物である。小ピットであるにもかかわらず、図化できる遺物が多い。146は土師器小皿、147は土師器坏の底部、148は内黒の黒色土器椀、149は土師質の羽釜である。以上は10世紀頃のものと思われる。

150は27自然河川の最上層から出土した高台付きの甕。7世紀と思われる。

151～157は26溝から出土した遺物である。151～153は、ての字口縁の土師器小皿。154は土師器小皿で、外間に指頭痕がある。155は瓦器碗で、器壁が比較的厚く、口縁端内面に沈線をまわし、内面全体に密なミガキ。外面は磨耗のためかミガキが見えない。以上は11世紀末～12世紀初頃と思われる。156は提瓶の口縁部と思われるが、時期は8世紀以前となろう。157は須恵器の壺の口縁部。

158～168は、旧耕作土層と第1面の間に挟まる遺物包含層（第56図下の③層）からと第1面精査時に出土した遺物である。158は須恵器鉢の口縁部。9世紀頃か。159は須恵器の甕。外面に平行タタキ目、内面に同心円タタキ目。7世紀頃にならうか。160は7世紀、161は6世紀の須恵器坏。162は中国製白磁碗。163は土師器小皿で、底外間に糸切り痕を有する。164は須恵器壺の破片で、波型文・沈線・列点文を刻む。165は須恵質の丸瓦で、内面に布目。166・167は土師質の羽釜。168は瓦質の鉢である。

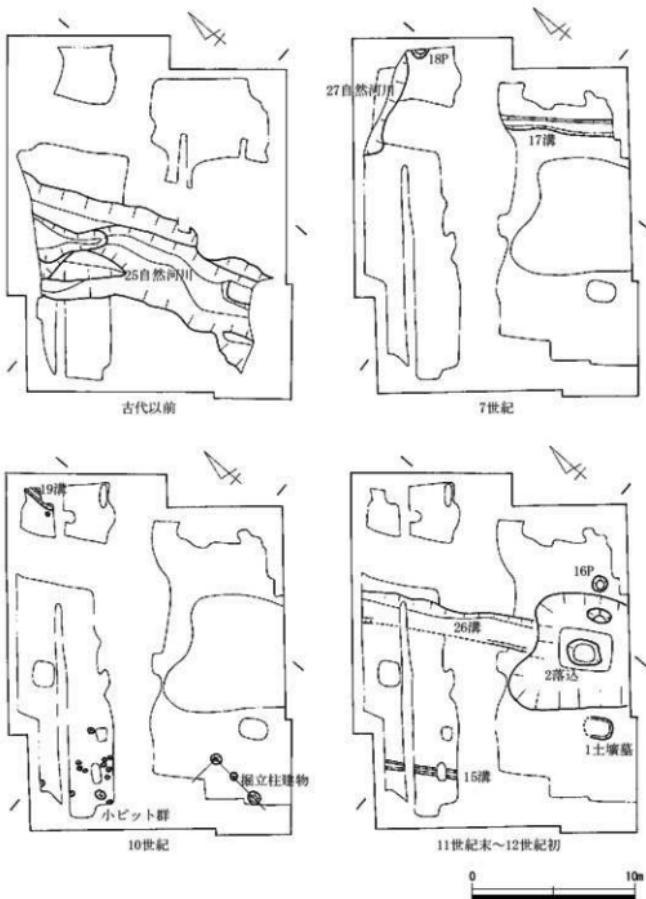
13区のまとめ（第63図）

13区で検出した遺構で、最古のものは調査区中央を走る25自然河川である。この河川からは遺物は全く出土せず、時期は分からぬ。地質年代の埋没谷の可能性も考えることができる。

当区においては、7世紀になってから人為的な遺構として明確なものが出現する。18Pからは完形の土器が出土し、17溝からはかなり摩滅した細片ばかりであったが、まとまった量の遺物が出土した。27自然河川の最上層からも、この時期の須恵器が出土している。

10世紀では19溝、小ピット群、掘立柱建物といった居住域を示す遺構が多く現われる。調査範囲が狭いので明確には言えないが、この時期には一定程度安定した集落が營まれたのではないかと思われる。

中世では1土壤墓、15溝、26溝、2落込、16Pがある。15溝と26溝は平行し、その方向が1土壤墓の長軸方向とほぼ同じであり、さらにこの3つの遺構の出土遺物も同一時期（11世紀末～12世紀初）を示すので、お互い関連があるのは明白である。2落込と16Pはこれらを切る関係になり、時期的に新しいものとなる。



第63図 13区 各時期別 平面図

第4章　まとめ

旧石器・縄文時代

吹田操車場遺跡では、これまで旧石器の出土が報告されているが、今回の調査では出土しなかった。また縄文時代の遺構・遺物もなかった。

弥生時代

4-2区では弥生時代後期と推定される円形土坑を検出した。径3.0m、深さ0.05mの規模で、堅穴建物の可能性がある。4-3・4区では弥生時代末～古墳時代初の井戸を検出した。7区では弥生時代後期の溝、土坑を検出した。溝の中には方形周溝墓の周溝である可能性が考えられるものがある。その場合、吹田操車場遺跡およびその周辺ではこれまで見つかっておらず、注目されるものとなろう。

弥生土器は遺構からだけでなく、今回の調査区全般にわたって、後世の包含層や盛土・撓乱土層からも出土する。ほとんどが細片で摩滅しているが、周辺にこの時代の遺構がさらに多く存在することが考えられる。

古墳時代

4-5区から4-6区にかけて、古墳時代後期～飛鳥時代頃の60基以上の土坑群を検出した。これは平成18・19年度調査のC1・2区で検出された群集土坑と一連のものであろう。この遺構の性格については粘土探掘痕と考えられている。

飛鳥時代

13区において土坑と溝を検出した。土坑からは完形の遺物が数点出土し、溝からは細片ながらもある程度まとまった量の遺物が出土した。当区周辺にはこの時代の遺構が広がっているものと思われる。

奈良時代

奈良時代として明確な遺構はなかったが、後世の包含層からこの時代の須恵器が出土しており、周辺に遺構があるものと思われる。

平安時代

4-3区では掘立柱建物、13区では溝、小ビット群、掘立柱建物といった集落跡を示す遺構を検出した。この時代には集落が営まれたものと考えられる。

中世以降

13区では11世紀末～12世紀初の土壙墓、溝、落込、小ビットを検出した。土壙墓には完形の中国製白磁碗が副葬されており、この地域の有力者の墓と思われる。

4-1・2区では鋤溝群を検出し、4-3～6区では中世の耕作土と思われる土層を観察した。この付近一帯が耕作地として農業が営まれたことを示す。

近世以降では、各調査区の全般にわたって旧耕作土層が観察でき、吹田操車場造成直前まで農業が営まれたことを示す。4-6、11-6区で検出した井戸は、この時期の農耕に関連するものと考えられる。

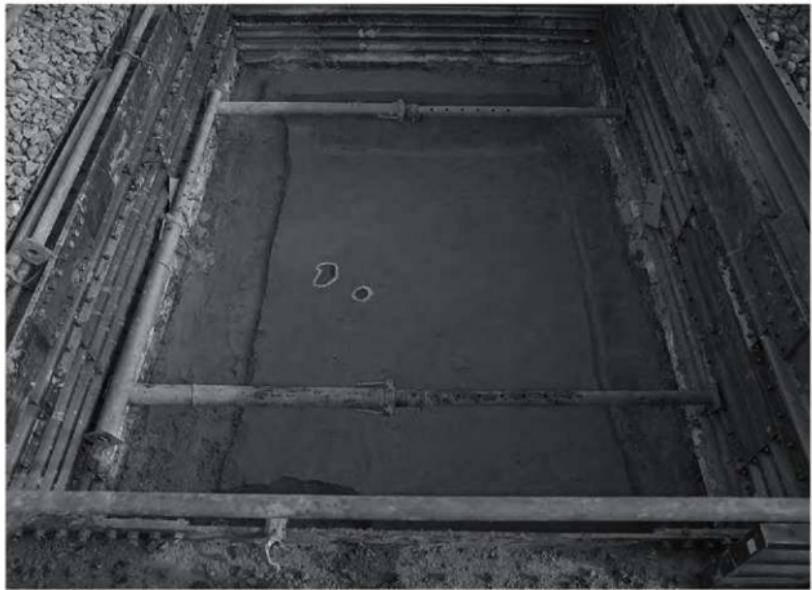
近代

明治時代になって東海道本線が敷かれ、大正時代には東洋一と称されるほどの吹田操車場が造成された。5区では、操車場に関連する汽車土瓶がまとまった量で確認できた。

写 真 図 版



1. 4-1-1区 第1面 (北東から)



2. 4-1-2区 第3面 (南東から)



1. 第1面全景（南西から）



2. 第2面全景（北東から）



1. 第3面全景（北東から）



2. 北西側セクション（南東から）



3. 第3面（南西から）



4. 200 土坑（北西から）



5. 200 土坑（北から）



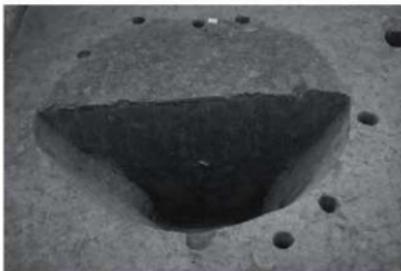
1. 地山面全景（南西から）



2. 据立柱建物（西から）検出時



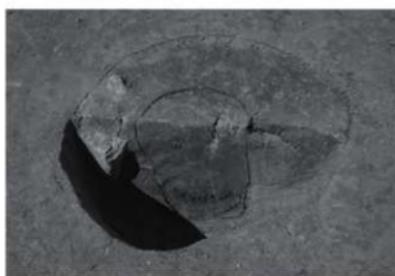
3. 据立柱建物（西から）完掘



4. 2井戸（南東から）断面



5. 2井戸（南東から）遺物出土状況



1. 9 P (南東から)



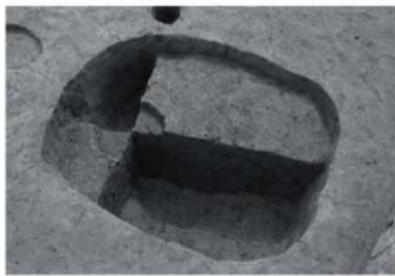
2. 11 P (南西から)



3. 12 P (南西から) 断面



4. 12 P (南西から) 完振



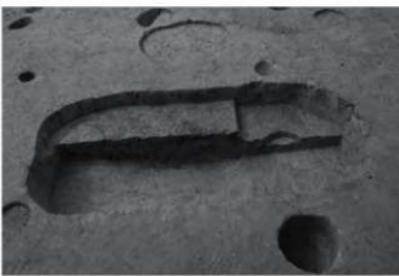
5. 14 P (北から)



6. 15 P (北から)



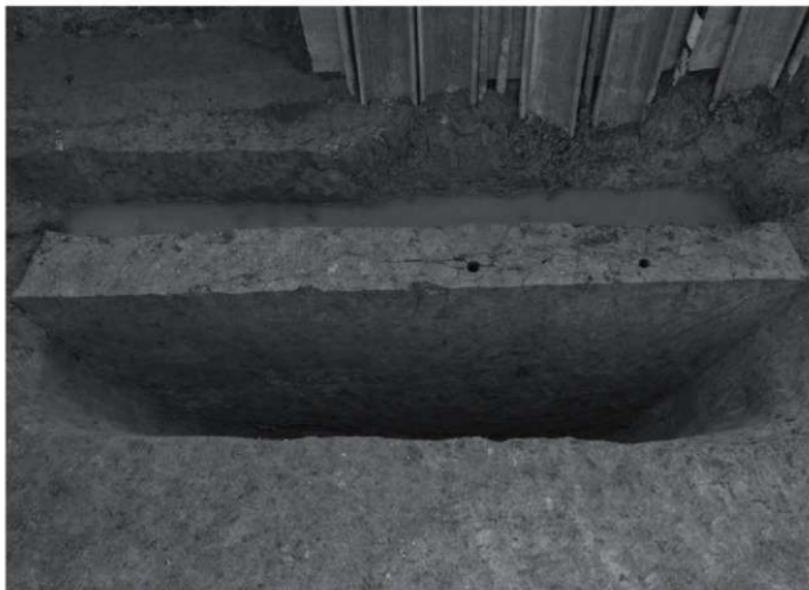
7. 16 P (北から)



8. 18 P (東から)



1. 第1面全景（北東から）



2. 1P（北東から）



1. 第2面全景（北東から）



2. 7Pの断面（南東から）



3. 7Pの遺物出土状況（南東から）



4. 8P（東から）



5. 9P（東から）



1. 全景（北東から）



2. 1・9土坑の断面（南西から）



3. 11・13土坑の断面（南西から）



4. 20土坑の断面（南から）



5. 21土坑の断面（南東から）



1. 第1面全景（南西から）



2. 第2面拡張部 土坑群（北東から）



1. 土坑群精査状況（南東から）



2. 19土坑（南西から）



3. 20土坑（西から）



4. 21土坑（南から）



5. 25土坑（南西から）



6. 26土坑（南から）



7. 27土坑（南東から）



8. 20・21土坑（東から）



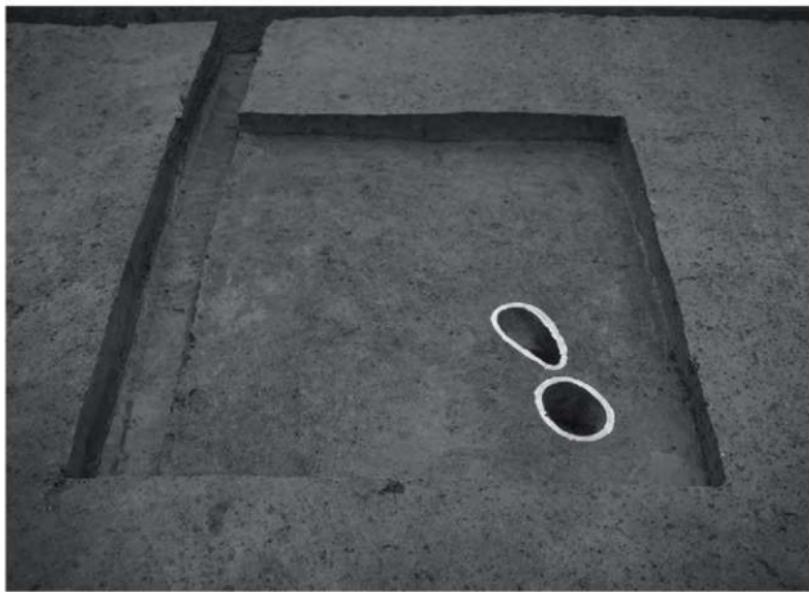
1. 全景（南西から）



2. 断面（南西から）最下層が汽車土瓶堆積層



1. 第1面 全景（北東から）



2. 第2面（東から）中央トレンチ



1. 方形周溝 1・2 (北から)



2. 方形周溝 2と土坑 (東から)



1. 方形周溝 1 (南から)



2. 方形周溝 1 と断面 (北東から)



1. 方形周溝 1・2 (北から) 検出当初



2. 方形周溝 2 (東から) 検出当初



3. 11・12 P (北東から) 検出当初



1. 1・8・3溝の断面（東から）



2. 1溝の断面（南から）



3. 3溝の断面（東から）



4. 2・5溝の断面（北西から）



5. 8溝の断面（北東から）大阪側



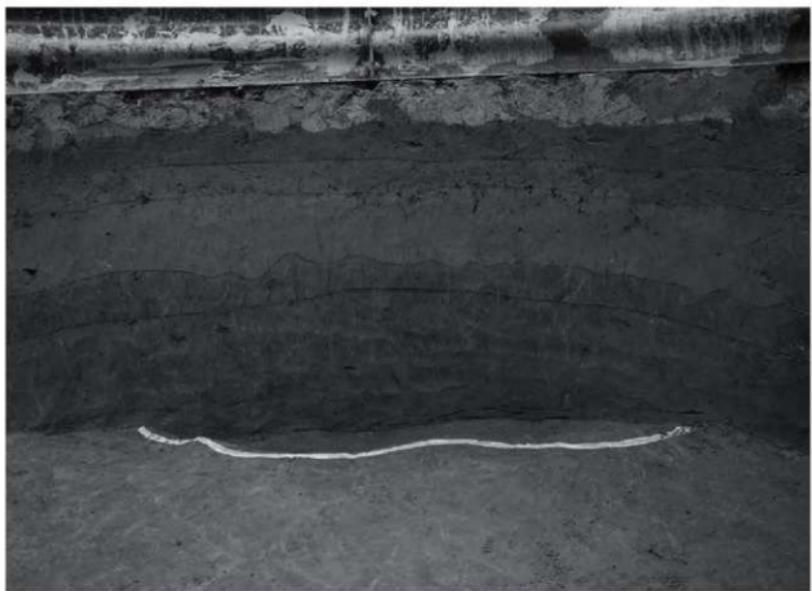
6. 8溝の断面（南西から）京都側



7. 6P（南西から）



8. 南東側セクション（北から）



1. 第4面セクション（北西から）



2. 第5面（西から）



1. 10-1区（北東から）



2. 10-2区（南西から）



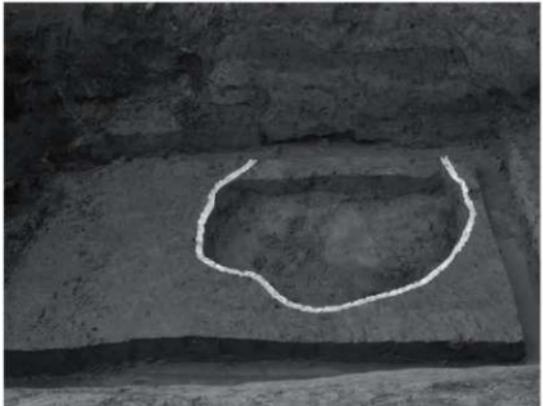
3. 10-3区（北東から）



1. 10-4 区 (南西から)



2. 10-2 区 旧正雀川 堤防断面
(北西から)



3. 10-2 区 土坑 (南東から)



1. II-2区 第7面 (北東から)



2. II-2区 最下の断面 (北東から)



3. II-3区 第5面 足跡 (北東から)



4. II-3区 最下の断面 (北東から)



5. II-4区 第4面 (北東から)



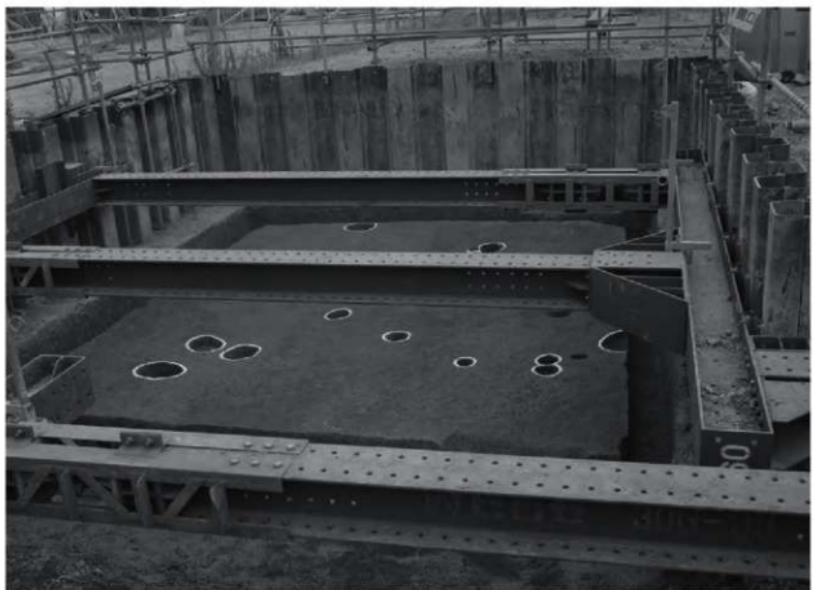
6. II-4区 最下の断面 (南東から)



7. II-6区 全景 (南西から)



8. II-6区 セクション (西から)



1. 第1面 全景（南西から）



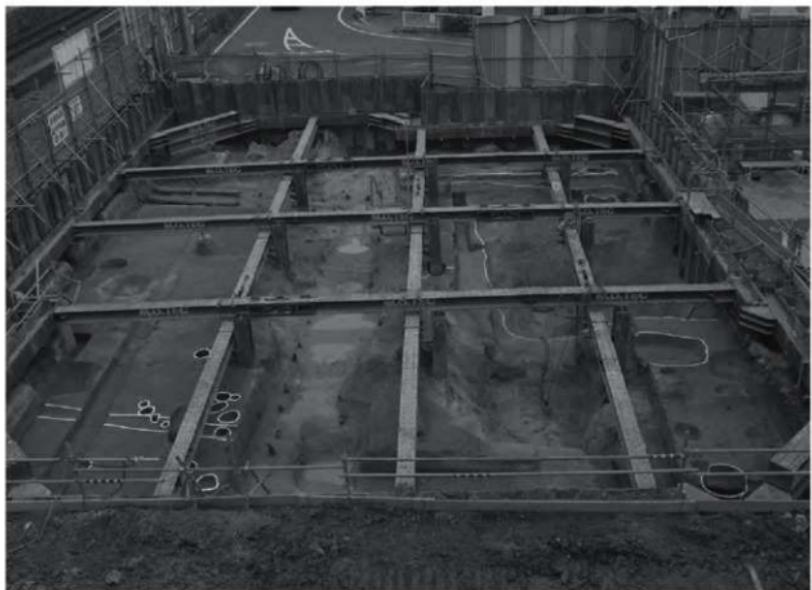
2. 第2面 自然河川（南から）



1. 9区 第1面 全景（南西から）



2. 9区 第1-2面 全景（北東から）



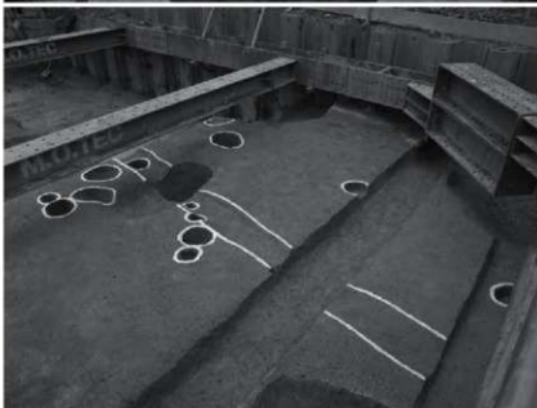
1. 13区 第1面 全景（南西から）



2. 13区 第1-2面 全景（南西から）



1. 13区 第1面 南東隅（南西から）



2. 13区 第1面 南西隅（北から）



3. 13区 第1面 北西隅（南から）



1. 13 区 1 土壌墓（北西から）



2. 13 区 1 土壌墓の断面（北西から）



3. 9 区 1 土壌墓の断面（北西から）



1. 13 区 2 落込み (北から)



2. 13 区 2 落込みの断面 (北から)



3. 9 区 2 落込みの断面 (北西から)



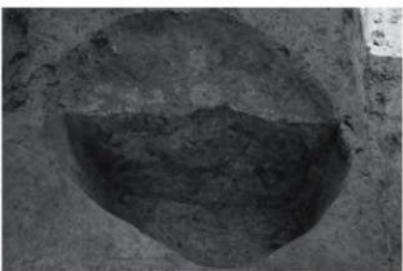
1. 18 P (西から)



2. 18 Pの断面 (南西から)



3. 3 P (南西から)



4. 16 P (北東から)



5. 17 溝の断面 (北西から)



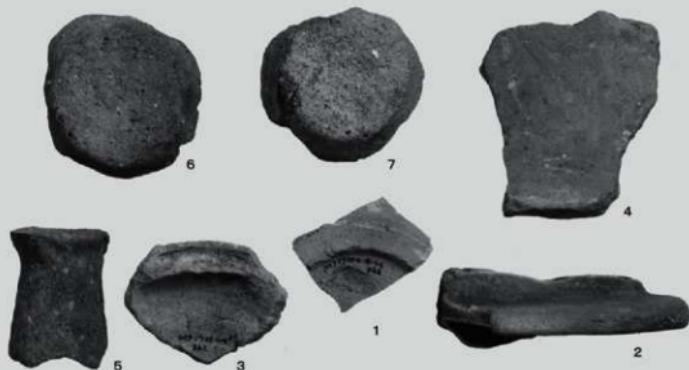
6. 26 溝の断面 (北西から)



7. 13 区 25 自然河川 (西から)



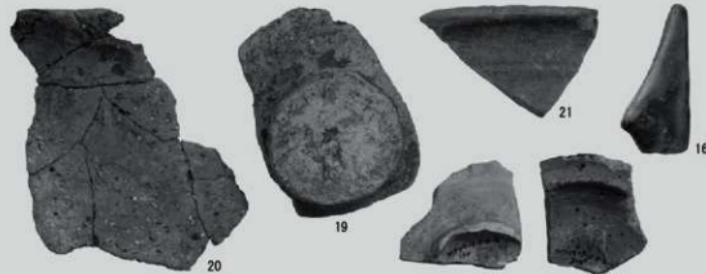
8. 9 区 25 自然河川の断面 (北西から)



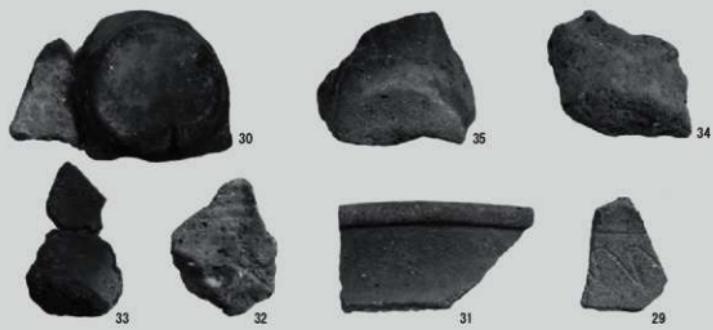
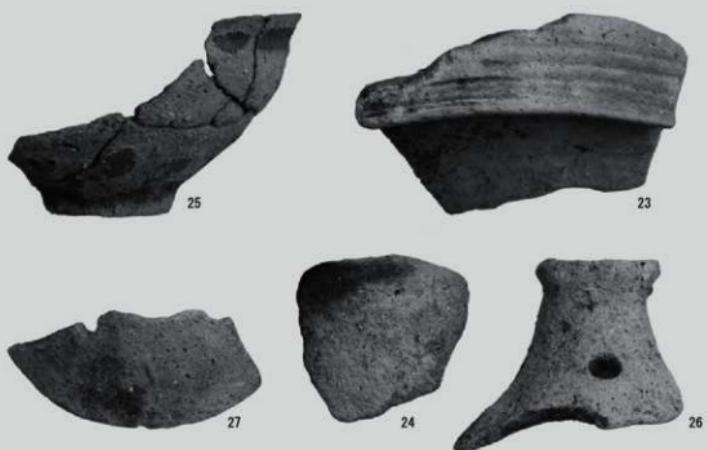
4-1区



4-2区

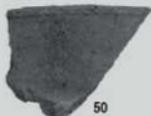
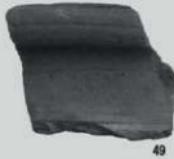


4-3区





4—4区



4—5区



4—5区



4-5区



56



57



61



60



59

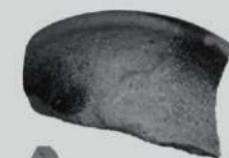
4-6区



4-6区



63



67



65



66



64

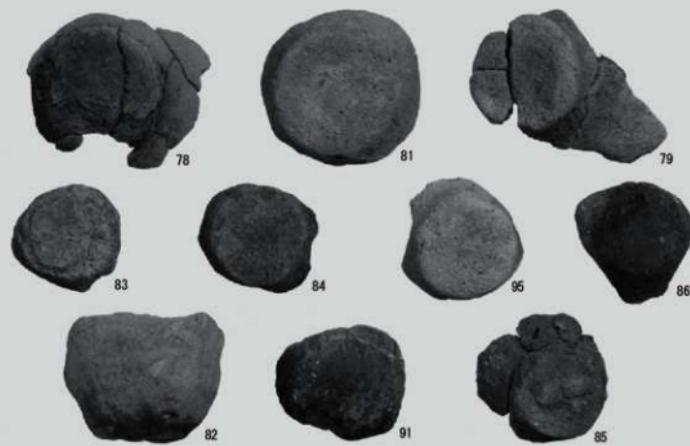
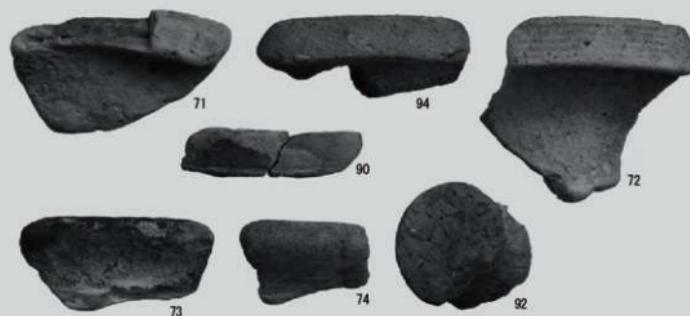


63



62

4-6区

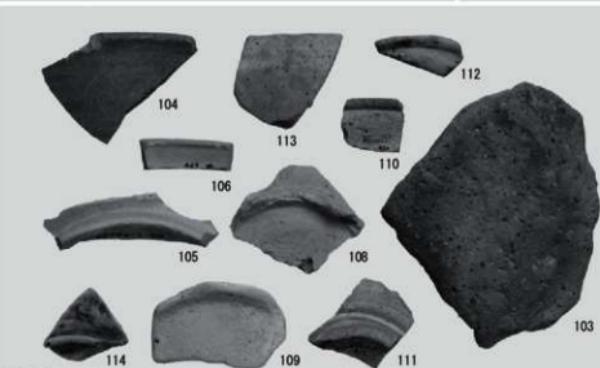




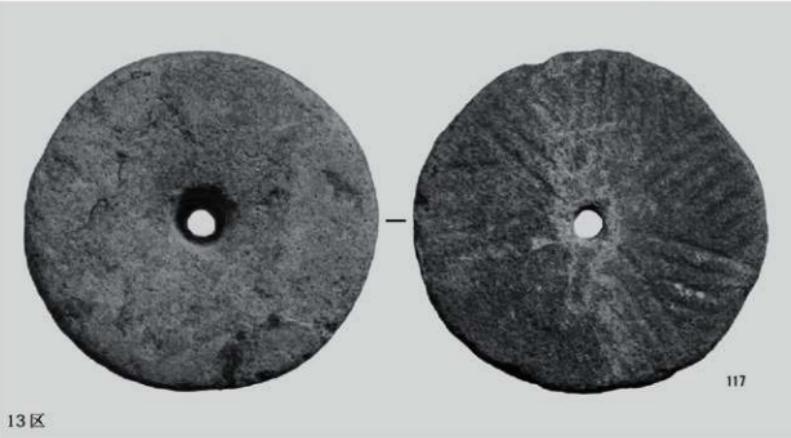
8区



11区



11区



13区



1



9区

116

151



118



119



151



153



127

128



126



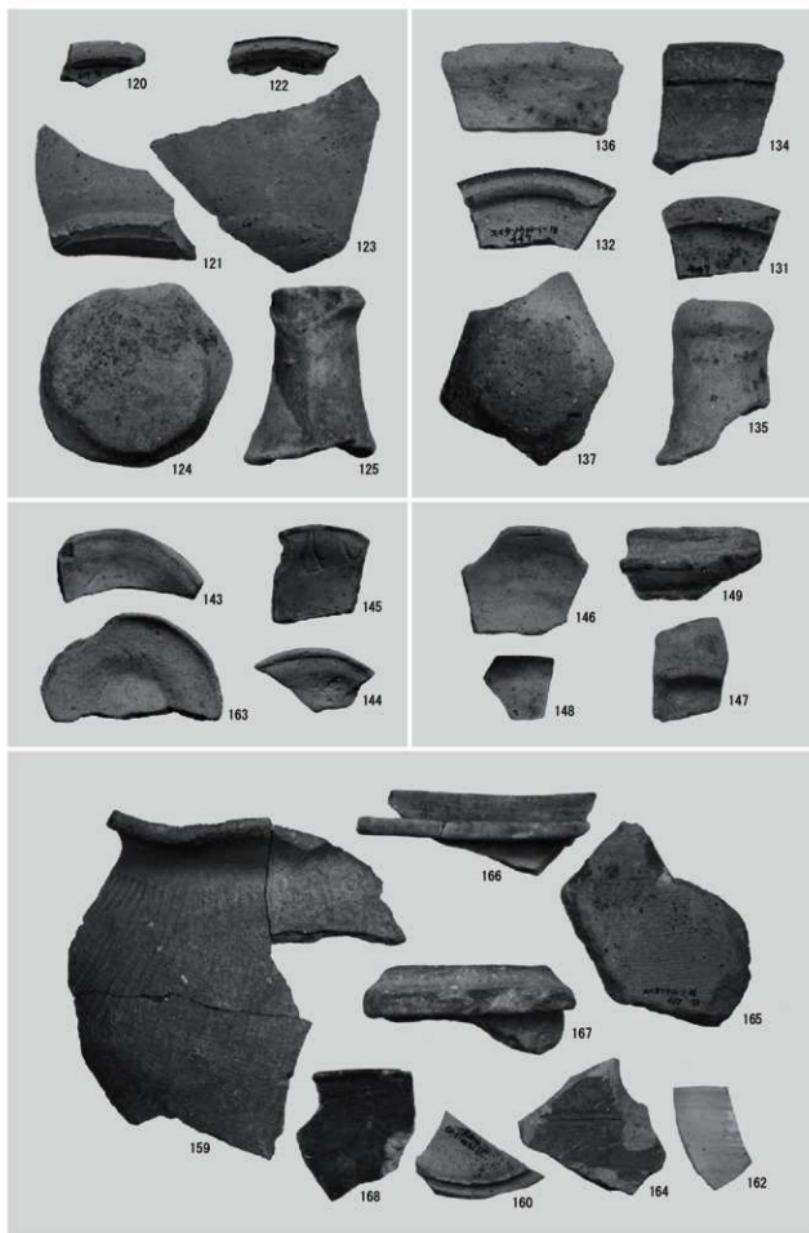
129



150



130



報告書抄録

ふりがな	すいたそうしゃじょういせき さ
書名	吹田操車場遺跡V
副書名	吹田（信）基盤整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	(財) 大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第216集
編著者名	辻本 武
編集機関	(財) 大阪府文化財センター
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号
発行年月日	平成23年 3月 15日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
すいたそうしゃじょういせき 吹田操車場遺跡 どう らくじゆ 同 C地点 めいわいせき 明和池遺跡	すいたしおたとうらうほか 吹田市芝田町他	27205	73	34° 46° 13"	135° 31° 57"	2009年7月15日 ～2010年8月31日	2,175m ²	吹田信号場 基盤整備工事
	すいたしおとせんせき 浜津市千里丘庄 7丁目			34° 46° 46"	135° 32° 13"			

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吹田操車場遺跡 同 C地点 明和池遺跡	集落跡	弥生時代	円形土坑・土坑・溝・井戸	弥生土器	
		古墳時代	土坑群	土師器・須恵器	
		古代	孤立柱建物・土坑・溝・小ビット群	土師器・須恵器	
明和池遺跡	集落跡	中世	土壤墓・溝・落込・小ビット・躰痕群	白磁碗・瓦器・土師器	

要約	<ul style="list-style-type: none"> ・弥生時代の円形土坑・土坑・溝・井戸を検出した。円形土坑は竪穴建物の可能性があり、また溝には方形周溝構の可能性のあるものがある。井戸は弥生時代末～古墳時代初である。 ・古墳時代では、平成18・19年度調査で発見された群集土坑と一連のものとなる土坑群を検出した。時期は古墳時代後期で、飛鳥時代まで続くと思われる。粘土探査痕ではないかと考えられる。 ・古代では孤立柱建物を検出し、また飛鳥時代の土坑からは完形の須恵器・土師器が出土した。他に小ビット群や溝を検出した。この時期には集落が営まれたものと思われる。 ・中世では、土壤墓・溝・落込・小ビットを検出した。土壤墓には完形の白磁碗が副葬されており、地域の有力者の墓と思われる。近世以降は一帯が耕作地となり、農業が営まれた。
----	--

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第216集

吹田操車場遺跡V

吹田(信)基盤整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日/平成23年3月15日

編集・発行/財団法人 大阪府文化財センター

大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本/株式会社 明新社

奈良市南京終町3丁目464番地